Fate/Medal of Honor

A—10教徒

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、「人類」が己の力で、未来を取り戻す物語だ。

アメリカ海兵隊特殊部隊に所属しているローガン・Ｋ・アダムス大尉は、イラクでの特殊任務で命を落とした。

だが彼は日本人とアメリカ人のハーフの「藤丸立香」に生まれ変り、１８年後――――１８歳の時に彼は自身にある才能があると言われ、人理継続保障機関カルデアにスカウトされる。

そして、彼は人類の全てを賭けた戦いに身を投じる事になる――――

―

前代未聞の聖杯「戦争」、今ここに開戦する。

ハーメルンでの初投稿です。

この小説はｐｉｘｉｖにて投稿していたものを投稿しています。

型月とは水と油のような関係（個人の意見です）の存在である軍事をメインとした二次創作なので、そういうのが大っ嫌いだ！（総統閣下風）という人には、ブラウザバックをお勧めします。

目次

Chapter.0『Medal of Honor』
Mission Briefing.0『Semper fidelis』 1
Mission.1『辞令は何時も突然に』 11
Mission.2『Memory of the Battlefield』 23
Mission.3『旅立ちと歓迎』 46
Mission.4『人理継続保障機関』 63
Prologue『Flame polluted city Fuyuki ／ 炎上汚染都市 冬木』
Mission.5『戦いの前哨』 85
Mission.6『Once a Marine, Always a Marine.』 100
Mission.7『燃える街にて』 118
Mission.8『カルデアとサーヴァント』 134
Mission.9『新たな敵』 152
Mission.10『VS. サーヴァント』前編 167
Mission.11『VS. サーヴァント』後編 174

Chapter.0『Medal of Honor』

Mission Briefing.0『Semper fidelis』

２０１５年７月　イラク北部のとある街

あちらこちらから聞こえていた銃声も、今ではすっかり止み、あたりは静寂に包まれていた。

「ハァッ……ハァッ……！」

男は息を切らしながら狭い路地裏を必死に走っている。男が身に纏っている迷彩服は彼と彼以外の人間の血や砂埃で汚れ、ボロボロになっていた。その顔からは、焦燥と悔恨の色が滲み出ていた。

暗視装置をヘッドマウントから落としたために、男の視界はほぼゼロになっていた。唯一の光源は、微かな月明かりのみだった。

男の名はローガン・Ｋ・アダムス。アメリカ海兵隊の兵士であり、さる特殊部隊の隊長だ。彼と彼の部隊はここで任務に従事していたが、その最中に最悪なアクシデントに遭遇してしまい、彼は孤立してしまったのだ。

「――――――！――――――！」

彼に続くように数人の男達がアラビア語で怒鳴り散らしながら、彼を捕まえようと追っている。その手にはＡＫ―４７アサルトライフル等のロシアや中国製の銃火器が握られていた。彼等はこの街を実効支配している武装勢力で、一般にテロリストと呼ばれている人間達だ。

男達は走りながら銃を構え、一斉に引き金を引く。

「あぁクソッ！」

途端に後ろから銃声と共に、大量の弾丸が彼目掛けて襲い掛かってきた。銃弾はローガンの足元や壁に着弾し、甲高い音と共に着弾点に弾痕を残す。ローガンは撃たれまいと照準を逸らすために姿勢を低くし、左右に蛇行する。顔のすぐ側を銃弾が通過し、素早く風を切る

音が聞こえた。
彼はホルスターからＭ４５Ａ１ピストルを引き抜くと、背後に向けて弾倉内の七発の・４５ＡＣＰ、その全弾を発砲した。出鱈目な発砲だが、これはあくまで牽制が目的なのだ。撃たれる危険を犯してまで照準する必要はなかった。
「クソクソクソッ！」
弾切れになり、スライドが後退したＭ４５Ａ１をホルスターに収納したローガンは苛立った様子で悪態を吐きながら、この状況を作り出した自身の事を呪っていた。
本来なら今頃自分は帰りのオスプレイに乗り、洋上の揚陸艦での作戦成功の祝杯を部隊員全員で楽しみに待っていたはずだった。だが今はどうだろう。彼が判断ミスを侵したせいで、彼は孤立し、部下達は全員――――彼の目の前で生き絶えていった。
部下達への申し訳なさから、ローガンの頬を涙が伝った。だが今はそれを拭う暇もない。
一発の銃弾が彼の頬を掠める。掠った所から血が流れ出し、涙と混ざり合った。
「こんな所で死んだら、あいつらに顔向け出来ねえ……！
絶対に、生きて帰ってやる！」
路地裏を時々曲がりながら走り続けていると、開けた場所に続く道に出た。点灯している街灯のお陰で、周囲の状況も多少は把握出来るようになる。
幸いにも無線は使うことができる。武器も銃剣だけになったが、ローガンの実力があれば一度に二、三人程度なら相手取る事も可能だ。
無線で作戦司令部に救援を要請し、敵の火器を鹵獲して持ち堪える。成功率は低いが、今の彼に残されたカードの中で、最も成功する確率が高いのはこれだけだった。
「……もう少しだ！」
ローガンは限界を迎えそうな自身の身体に鞭打ち、全速力で路地の出口まで走る。後方からの銃撃は未だに止まない。

全力で走り続け、ようやく開けた場所に出た瞬間に、

「ガアッ!?」

彼の左胸を銃弾が貫いた。

そのままローガンは地面にうつ伏せに倒れ込む。左胸からジワリと生暖かい液体が広がっていく。先ほどの弾丸は彼の心臓を掠めたのだ。このまま行けば、持ってあと一、二分だ。

?「??????????????!」（アメリカ人を追い詰めたぞ！）

ローガンが倒れた事で、追いかけて来ていた男達も彼の元に到着する。男達はローガンが血を流して倒れているのを見て、歓喜の雄叫びを上げた。

すると彼等の内の一人――リーダー格であろう男が、突然ローガンの体を思い切り蹴った。

体を蹴られ、ローガンは小さく呻き声を漏らすが、体が自由に動かないためにどうすることも出来ない。それに蹴られた際の痛みも薄れてきていた。残されたタイムリミットは、彼が思っていたよりも短かいようだ。

「??? ?? ??????????????!」（気分はどうだ、アメリカ人め！）

そう言ってその男を始めとした男達全員は、倒れ込んで動かないローガンを何度も蹴り続けた。

しばらくすると、リーダー格の男は他の男達に蹴るのを止めるように指示する。何故、突然蹴りが止んだのか分からなかったローガンが顔を横に動かすと、懐からトカレフＴＴ―３３のコピーである中国製の５４式拳銃を取り出している男の姿が見えた。

その光景を見たローガンは確信する。この男はこの場で自分を殺すつもりなのだと。

ローガンはバレないように腰に手を伸ばし、何か武器が無いか手探りで探し始める。このまま何も出来ずに殺されてたまるか、という悪足掻きだ。

そして、ローガンはまだＭ６７破片手榴弾アップル・グレネードが２個残されているのを確認した。この手榴弾はセーフティ・レバーが外れた約五秒後に爆発するように設計されている。今のローガンの

状態ではレバーを外してから逃げるという事は不可能だ。これを使った時点でローガンの死は確定するだろう。
だがこのまま何もしなくても死ぬのみだ。このまま撃たれて死ぬか、一人でもいいから敵を殺して死ぬか、どちらを選ぶかは考える必要も無かった。
幸いにも拳銃を持った男は、何らかのトラブルで装填に手間取っているようだ。流石は粗悪な造りで有名な５４式拳銃だと、ローガンは心の中で嘲笑する。
ローガンは辺りを見回して周囲の状況を確認する。周りには三、四人ほど、同じような男がいた。さらに周りを見てると、アラビア語で『火気厳禁』と書かれたドラム缶がいくつか置いてある。ガソリンか、軽油か、どちらにしろ中身が可燃性の物質であることに間違いは無かった。
――死ぬ間際であるにもというのに、何故自分はこうも冷静に状況を判断しているのだろう。
ふと、ローガンはそんな事を思い浮かべる。自身の死を確信し、生き延びる事を諦めてしまったからだろうか。最期の時まで、海兵として相応しくあるために、冷静に行動しようとしているからだろうか。出来れば後者の方ならいいな、とローガンは一瞬だけ瞼を閉じ、小さい笑みを浮かべる。
カチャ、と拳銃のスライドを引く音がローガンの耳に入る。男が五四式拳銃への装填作業を完了したのだ。
このまま殺されてたまるか。やってやるぞ。そう決心すると、ローガンは片手で手榴弾の安全ピンを抜き、腹部に隠した。
「?????（おい、）????（何を）?????（した!?）？」
ピンを引き抜く音に気付いた男はローガンの体を足でひっくり返すと、途端に顔を真っ青にする。男の目の前には、セーフティ・レバーの外れた手榴弾が転がっていた。
「???（これ）??（は）?????（お返しだぜ、）, ｆｕｃｋ　ｙｏｕ（クソッタレ。）.」
ローガンはそう言って弱々しい笑みを浮かべる。
手榴弾が転がり、件のドラム缶の側で停止したのを見た男達は、恐

怖と焦燥の表情を浮かべイスラムの祈りの言葉を叫びながら先ほどの路地へと走り出した。
「……クソ、逃げたら駄目じゃねえか。」
ローガンは逃げていく男達の背中を見つめながら、悔しそうにそう呟いた。手榴弾が転がって行った方に目をやると、そこにはドラム缶以外に、様々な種類の弾薬箱や爆発物のマークが描かれた木箱が置いてあった。
このまま手榴弾が爆発すれば、この街の一区画全体が吹き飛ばされる可能性もある。そうなれば、当然ながらローガンの体は骨すら残らず灰燼と化すだろう。
「……ジャクソン、ロジャーズ……」
ふと、ローガンは自身の目の前で死んでいった部下達の名前を、掠れた声で呟き出す。
部隊を救う為に自らを犠牲にしていった、大馬鹿者の英雄達。そんな者達の名前を、ローガンは一人一人、弱々しい声で、噛み締めるように口に出した。
もう、耳も良く聞こえない。視界も大半が黒く染まってしまった。
――――嗚呼。死というのはこれ程までに冷たく、静かで、辛いものなのか。
こんなものを部下に味あわせた自分を、ローガンは殺したいほど恥じた。
……アイツらには、後で謝らないとな。
「……もうすぐ、お前らの……所に……」
そう言いかけた瞬間、手榴弾の雷管が作動し、爆発する。手榴弾の爆発は、そばに置かれていたＴＮＴ爆薬を誘爆させ、その周辺に置かれていたドラム缶、弾薬や爆薬が連鎖的に爆発した。
紅蓮の炎と共に膨大な量の熱波と爆風がローガンに直撃し、身体は焼け爛れ、四肢はバラバラに引き千切られ、皮膚が真っ黒に焦げ、細かな肉片になった。
最後にそこに残っていたのは、地面にこびり付いた焦げた体液のみだった。

イラク北部の都市におけるアメリカ海兵隊主導の強襲作戦：戦略的成功・戦術的失敗
作戦結果：敵反政府武装組織の幹部の死亡・アメリカ海兵隊武装偵察中隊及び海兵襲撃連隊統合特殊作戦部隊の全滅
生存者：０名

砂嵐のような酷い雑音で、薄らと意識が覚醒する。
目を開けると、酷いノイズで視界の大半が掻き消されていた。ノイズに覆われていない部分に目を凝らすと、淡い桃色に染まった空のようなものが見える。それでようやく、自身が仰向けに倒れている事を認識する。
ここは何処かと思い、身体を起こそうとする。異常に重くなっている身体は容易に言う事を聞かず、上半身を起き上がらせるだけでも精一杯だった。
半分以上がノイズに埋め尽くされている視界は、雪とも桜とも取れない何かが舞っているのを知覚した。
渾身の力を込めて立ち上がる。その眼前には――――
――――美しい、淡い光で染まった世界があった。
地平線のような境界は無く、只々花畑のようなものがどこまでも広がっている世界。その形容し難い美しさは、ノイズまみれの視界からも感じることが出来た。
ああ、ここが死後の世界という奴か。覚醒し切っていない意識の中でそんな事を考えていたローガンは、ふと何かの気配を察知し、そちらに目を向ける。
目を向けた先には、一つの人影が立っていた。眼を凝らし、その人

影が何なのかを確認する。
「――――――あ。」
それが何なのかを確認したローガンは、思わず声を漏らした。
――――女性だ。足元までである長い髪を垂らし、豪奢で華麗な着物を着たアジア系の美しい女性が立っていたのだ。
数々の死線を越え、並の事では驚かなくなっていたローガンですら思わず声を漏らしてしまう程、その女性の放つ雰囲気は特異なものだった。
ローガンの漏らした声に気が付いたのか、女性はローガンの方へと振り向く。
女性はローガンを見ると少し驚いた様子で眼を見開くが、すぐに何事もなかったかのように微笑みを浮かべた。
一体彼女は何者だ。そう思ったローガンは女性に接触するために一歩踏み出し――――
「――――――ッ!?」
――――――刹那、胸に走った激痛と共に大量のどす黒い血を吐いた。
ゴボ、と到底人間が出し得る筈のない音を伴ってローガンの口から溢れた尋常でない量の血液は、瞬く間に周りの地面を赤黒く染め上げる。激痛の余りローガンは膝をつき、うつ伏せに倒れ込む。
ローガンは意識を必死に保ち女性へと手を伸ばそうとするが、血の生暖かい感触と鉄錆のような匂いにローガンの意識は溶けるように薄れ、そのまま彼は意識を失ってしまう。気を失ったローガンの身体は、底無し沼に呑まれるかのように、血溜まりの中へと堕ちていった。
その様子を近くで見ていた女性――――両儀式は、ローガンが消えた血溜まりに歩み寄ると、そっと血溜まりに手を触れた。
「……そう。貴方のそれは、きっと大変な道のりなのでしょうね」
血溜まりに触れた式は、何か納得したような様子でそう呟く。その瞳には、寂しさとも慈愛とも取れない感情が孕んでいた。
「残念ね。時間があれば少しでもお話しをしてみたかったのに。
……気を付けてね、名も知らぬ兵隊さん。そして貴方達の旅路に、幸運がありますように」

ここは…何処だ…？

ローガンは闇の底から這い上がるように覚醒する。それはまるで、長い間留まっていた光のささない洞窟から久し振りに地上に戻ったような気分だった。

目覚めた所でまずローガンの頭には一つの疑問が浮かんだ。

何故自分の意識はこうして残っているのだろうか。確かに彼はあの時、爆発に巻き込まれ死んだはずだ。彼の脳にも、身体が一瞬で焦げるあの忌々しい感覚がくっきりと焼き付いているのだ。

そしてもう一つ。ローガンは何かを忘れてしまっている感覚を覚えた。

言うなれば、パズルの端にある、何も描かれていないようなピースが一つだけ抜け落ちているというような感覚だ。掛け替えのない大切なものではないが、心の片隅に残っているもの。

そういった何かが、一つだけローガンから抜け落ちていたのだ。

……だが、忘れてしまったものを思い出す余裕などローガンには無い。とにかく今は状況分析が先決だ。ローガンは現在の自身の状況を確認する為に固く閉ざされていた瞼を開いた。

薄らととだが目を開いたローガンの目の前には、アジア系の顔立ちの女性看護師がいた。目の前の看護師と特徴のあるツンとした匂いから、どこかの医療施設に搬送されたのかとローガンは予測した。

看護師の胸に着けられていた名札には日本語で名前が書かれている。これで益々状況が分からなくなった。日本語が使用されているという事は、日本に関係のある医療施設であるはずだが、ローガンの記憶ではイラクにそのような施設は無い。

首が上手く動かないため、目を動かして周りを見渡す。先程の看護師の名札以外にも、壁に貼られているポスターや設置されている設備

等、至る所に日本語が表記されていた。
ローガンは日本のＮＧＯに救助されたのかと考えたが、あり得ないと心の中で首を振った。彼のいた街はテロリストに占拠されていたのだ。民間の――――それこそラブ＆ピースを掲げるようなおめでたい組織が易々と入れるような場所ではない。それに重傷者を救助できるほどの設備をあの街からそう遠くない場所に彼等が保有しているとは、ローガンには信じられなかったのだ。
ふと、ローガンは自身の隣で小さな声がした事に気付く。動き辛い首をゆっくりと動かし、自分の側面に目を移した彼は、そこで驚くべきものを見た。
赤ん坊だ。赤ん坊が、彼のすぐ隣でスヤスヤと寝ていたのだ。
驚いた彼は飛び上がり思わず声を上げ――――る事はなく、体は縛り付けられたかのように微動だにしない。唯一、目だけが彼の感情を表すかのようにカッと開かれていた。
おかしい。どう言う事だ。死んだはずの自分は生きており、加えて身体は動かず、さらに隣には赤ん坊が寝息を立てている。ローガンは自身を取り巻く状況の異常さに軽く吐き気を感じた。
すると先程の看護師がローガンに近づき、ゆっくりと手を伸ばしたかと思うと、ローガンの体を苦もなく持ち上げ、歩き出した。
その瞬間、ローガンが心の奥底で感じた感情は驚愕でも困惑でもなく、恐怖だった。全く訳が分からない。一体何がどうなっている。短時間の内に理解不能な出来事が連続して続いたせいで、ローガンの頭はパンク寸前になっていた。
ローガンは看護師の腕の中から抜け出すためにもがこうとするが、看護師に抱きかかえられているであろう彼の体は1ミリたりともも動かなかった。身体の感覚はあるのに、当の身体がまるで動かないのだ。
自身の身体の異常に困惑していると、看護師は突然歩みを止め、すぐ側にあった姿見の方を向いた。
姿見に写った自身の姿を見た瞬間、ローガンは一瞬何も考えられなくなった。考えたくなかったのだ。

「はーい立香くん。パパとママのところに行こうね～」
ローガンは馬鹿らしさの余り笑い出しそうになったが、言う事を聞かない身体がそれを阻んだ。
これは何かの冗談で、これは悪質なドッキリではないのかと考えたが、今自分が知覚した光景は紛れもなく現実のものだとローガンは不本意ながら確信出来た。
「立香、今日から私達がママとパパよ」
ローガンの目の前に白人の男性とアジア系の女性が現れる。彼の顔を見つめる二人の瞳には、有り余るほどの愛と慈しみで溢れていた。
この二人を見て、ローガンはようやく自身がどういう状態にあるのか理解した。
理解したと同時に、彼の胸中には説明できない程の淀んだ感情が溢れ始め――――――――
――――――――ローガンは、絶叫した。
「ホギャアアアアアア！ホギャアアアアアアア！」
しかし彼の悲痛な絶叫は元気な赤子の産声に変換されてしまう。彼の本当の姿には気付く人間は、誰もいないのだ。
それから数秒の間も、ローガンは自身の心の中で、誰にも聞こえない事を知りながら咆哮し続けた。
しばらくして落ち着きを取り戻した時には、ローガンは自身の母親であろう女性に抱きかかえられ、頭を撫でられている。普通の赤子はこれで落ち着くのだろうが、彼の場合は全く安らぐことは無かった。
まず彼の脳内にあったのはこれからどうすれば良いのか、という不安の念だった。
彼は幾多の戦場を生き抜いてきたが、このような体験をした事は一度も無い。というか人類史上彼が初めてだろう。
ここまで非現実的で、前例のない事は彼の人生でも初めてだったのだ。
彼の第二の人生は、史上類を見ないほど最悪な始まり方となってしまった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．１『辞令は何時も突然に』

２０１５年１月２０日　神奈川県　横須賀市　防衛大学校

掲示板に貼られている数枚の大きな紙を、人々は食い入るように見つめていた。自分の番号を見つけた者は歓喜の声を、見つけられなかった者は落胆の声を上げる。

その中の一人、日本人らしい黒髪と珍しい碧眼を持つ青年は自分の番号を見つけると、満足したようにグッと拳を握り締めて小さく笑った。

そのまま青年はそこから抜け出そうと、掲示板の前に形成されていた人混みを掻き分けて歩き始める。

人混みから抜け出した彼は、懐からスマートフォンを取り出し、連絡先に登録されていた番号に電話を掛けた。

『もしもし？

……立香、どうだったの？』

数回のコール音の後に電話は繋がる。

スマートフォンのスピーカーから、落ち着いているがどこか不安そうな女性の声が聞こえた。

青年はその声を聞いて、一瞬顔を強張らせるが、すぐにフッと人の良さそうな笑みを浮かべた。

「……うん、合格したよ。母さん」

青年は出来るだけ優しい声で電話の相手にそう答えた。

『本当!?』

電話の相手は電話越しでも喜んでいるのが分かるほど声を弾ませた。

その声に青年は上手く行ったと心の中で呟き、ホッと胸を撫で下ろす。

「本当だよ。嘘なんかついてないって」

青年はそう言うと小さく笑った。

『良かった……おめでとう立香！　父さんが帰って来たら伝えておくわね！』

「うん、ありがとう。……それじゃあ、またね」
青年はそう言って電話を切りスマートフォンをポケットにしまうと、途端に顔を顰めて溜め息をついた。
そのまま彼はポケットから煙草を取り出そうとしたが、今の彼は煙草を持っていないどころか吸えない事を思い出して、先程より深い溜め息をついた。
「Ｓｈｉｔ（クソ）……やっぱり、ガキの真似ってのは難しいな」
彼の名前は藤丸立香。
１８年前、赤ん坊に生まれ変わったローガン・Ｋ・アダムス大尉に与えられた、新しい名前だ。
２０１５年のイラクで死を迎えた筈だった彼は、気付けば１９９６年の日本の、産まれて間も無い赤ん坊になっていたのだ。
このような出来事、俄かには信じられないだろう。ローガンも当初は、夢を見ているのか、天国にいるものだと考えていた。
「まあ、夢でも天国でも……地獄でも無かったんだがな」
立香は顔を上げ、少しばかり雲が掛かった空を見上げる。
――その青空の鮮やかさは、あのイラクの空と同じものだ。
立香が空を見上げてしばらくすると、スマートフォンが再び震え出した。
ポケットからスマートフォンを取り出し画面を確認すると、『Ｎｅｌｓｏｎ』という文字が表示されていた。
彼は通話ボタンを押し、スピーカーを耳に近づける。
「もしもし？」
『合格したんだな!?　やったじゃないか立香!!』
スピーカーから流れる声のあまりの大きさに、立香はキンと耳鳴りがするのを感じた。
「親父……いつも言ってるけど、そんな大声を出さなくても聞こえてるよ」
『っああ、すまん。思わず興奮してな……それよりもだ、合格したんだってな？』

「勿論さ。もう母さんから聞いてるだろ？」
電話に出た男は藤丸立香の父親、藤丸ネルソンだ。名前からも分かるように彼は欧米系、それもローガンと同じアメリカ人なのだ。
「肩の荷も降りた事だし、少しブラブラする予定さ。しばらくしたら家に帰るよ」
『ああ、母さんと2人で待ってるからな！』
「うん、分かった」
そう言って立香は電話を切ると、視線を足元に移し、先程のものよりも深いため息を吐いた。
勿論の事ではあるが、彼は両親に自分が生まれ変わった人間である事は伝えていない。
まともな感性を持つ人間であれば、自分の息子が突然自分は生まれ変わりだ、などと口走り始めたら精神病院に担ぎ込むだろう。伝えない方が良いのは丸分かりだ。
立香は、あの二人にそのような事をさせたくなかった。あの二人は彼にとっての本当の親ではないが、この体の――藤丸立香の親なのだから。
顔を上げた立香は後ろを振り向き、視線の先に建つ建物を見上げる。
「……それにしても……ハッ」
立香は自嘲気味な笑みを浮かべながら、小さく鼻で笑った。
「俺が自衛隊、か」
彼が合格――否、採用されたのは自衛隊幹部の教育・育成を目的とする防衛大学校。日本国自衛隊における士官学校だ。
自衛隊は、言わなくても分かるであろうが、日本の防衛を司る軍隊もどきの組織である。実質軍隊だ。
周知の事実だが、彼らの実戦経験はゼロだ。
「戦争で飯を食って来た男が、戦争をした事のない軍隊に入るってのは、中々に皮肉だな」
立香はクツクツと堪えるように笑うが、徐々にその顔から笑みは消えていった。

結局の所、彼は軍でしか生きる事が出来ないのだ。所詮は人殺しと言ったところか。
「……ん？」
立香が歩き始めた時、またもやスマホが鳴り出した。どうせ父か母のどちらかだろうと思いスマホの画面を覗いた彼は、画面に映った文字を見て動きを止めた。
画面には『非通知』という3文字が表示されており、誰が発信したのか分からないようになっていた。
立香はイタズラ電話だろうと自分に言い聞かせ、通話拒否のボタンを押した。しかし、スマホの画面から非通知の三文字が消える気配は一向にしない。通話拒否のボタンがまるで反応していないのだ。
「どういう事だ……？」
立香はその後も何度も通話拒否ボタンを押すが、バイブレーションが止まる気配は一向に無い。
「ああクソッ、一体何なんだ？」
吐き捨てながら立香は何度も連打するが、画面が変わる様子は一向に無い。
そのまま彼はしばらくの間スマホと格闘していたが、５０回ほど通話拒否を押した所で諦め、苦々しい表情で通話ボタンを押した。
「――――もしもし？」
立香は恐る恐る、けれどもドスの聞いた声で、スマホの向こうにいるであろう誰かに声を掛けた。
『藤丸立花くんかい？』
スピーカーから帰ってきた声は、まるで立香が警戒しているのを事前に知っていたかのように落ち着いたものだった。
「……アンタ誰だ？」
『まあそう警戒しないでくれ。別に君やその家族に危害を加えようだなんて思ってないよ』
電話の相手は、まるで上司が部下に指示するかのように淡々と話した。
「馬鹿言え、素性も知らない人間を信用なんざできるか」

『……ならこちらの要件だけを伝える。
本日の１４時までに防衛省正門前に来てくれ。勝手に帰ったりしないように』
「おい、まだ話は――――――」
『ああそうそう。
――――――採用おめでとう、立香くん』
「――――ッ、おい待て……Ｓｈｉｔ！」
プツリと電話の切れる音がする。立香はスマホを耳から離すと、既に暗転した画面を見つめ、悪態を吐いた。
急いで立香は通話履歴を確認するが、先程の通話の履歴は残っていなかった。
立香は何かを考えるような表情で顎に手を当てた。
先程の人物。あの人物は確かに防衛省と言い、立香が採用された事も知っていた。
これらの事柄から考察するに、掛けてきたのは恐らく防衛省の関係者。
だが、そんな人物が立香に何の用があるのか。立香は――――彼自身が認識している範囲でだが――――試験等で問題は起こしていないはずだ。
とはいえ無視していいような話では無いだろう。もし試験に関する事なら、今後の人生に関わりかねない。
「……百聞は一見に如かず、ってやつだな。」
立香は仕方ないという様子でそう呟くと、駅のある方向へと歩き出した。

１３時４５分　防衛省　正門前
「……少し早く来すぎたか？」
立香は正門前に自身と警備員以外は人っ子一人いない事を確認すると、やってしまったと言わんばかりに頭を掻き毟った。
はあと溜め息を吐いて顔を上げ、立香は腕時計で現在の時刻を確認

した。
「１　３　５　０……あと１０分か」
　こんな事なら、もう少し遅く来ても。
　そんな考えが頭に浮かぶのと同時に、正門のある方向から足音が近づいて来るのに立香は気付いた。
「藤丸くん……藤丸立香くん！」
　正門前から、立香を呼ぶ声が聞こえる。その声は、あの電話の声と同じものだ。
　声がした方に立香が目を向けると、陸上自衛隊の、それも幹部の制服を着た４０代前半ぐらいの男性が正門から出て、立香の方へ歩いて来ているのが見えた。
　その男性の肩に付けられている階級章を目にした立香は、心の中でひどく驚く。
　階級章には二本の線と、その上に三つの桜が描かれていた。
「待たせて悪かったね。私は並木涼介。陸上自衛隊一等陸佐だ」
「藤丸立香です」
　立香は脊髄反射的に敬礼しそうになるのを抑え、目の前の男――――並木に頭を下げる。
「電話ではすまなかったね。強引な手段を使ってしまって」
「いえ。気にしておりません」
　流石の彼でも、他国の佐官相手には口調が強張ってしまう。
「そうなのかい？」
　立香の言葉に並木は首をかしげる。だが急いでいるらしく、すぐに時計をチェックし出した。
「……とにかく、詳しい話は中でしよう。付いて来てくれ」

――――――――――――――――――――

　並木の後を付いて行った立香は、とある応接室に通された。内装は質素ながらも気品ある作りになっている。
　窓からは東京の街並みと赤坂御用地を一望でき、壁には額に入れられた様々な写真や絵画、表彰状。応接室には御誂え向きな部屋だった。

「……良い場所、ですね」
「そうだろう？　ここからの眺めは私も気に入ってるんだ」
並木は自慢気にニコリと笑う。
ああ、この人は良い人だな。立香はその笑顔を一目見てそう確信した。
「かけてくれ。コーヒーは飲めるかい？」
「はい。ありがとうございます」
そう言われた立香は、目の前にあった革製のソファにゆっくりと腰を下ろした。体重をかけられたソファのスプリングが、ギシリと小さく軋む。
並木は、どこからか持ち出したコーヒーカップにコーヒーを注いでいた。
「ミルクと砂糖は？」
「あ、ブラックで大丈夫です」
「分かった……はい、どうぞ」
そう言って並木は立香の前のテーブルにコーヒーを置いた。コーヒーからは香ばしい匂いが漂っている。
「ありがとうございます、一佐」
立香は小さく頭を下げる。並木はもう片方のコーヒーをテーブルに置くと、立香の向かいのソファに座った。
「――――それでだ。君を呼んだ件についてだが……」
ソファに座った並木は何かを言いかけるが、そのまま深刻そうな表情を浮かべて黙ってしまった。
そしてそのまま顔を上げ、立香と目を合わせる。
「……もし、自分に世界を救えるかもしれない力があるとしたら、君はどうする？」
「――――はい？」
「いや、もしもの話だよ」
「はあ……」
立香は口元に手を当てて、目線を下に向ける。しばらくすると彼は目線を並木に向け、ゆっくりと口を開いた。

「……自分としては、そのような力があるなら、最大限に活用させて頂きます。
この世界が、人類が今のように存続し、繁栄できなくなる……そういうのは、自分には受け入れられません。
ですから自分は……この世界の、人類の為なら、何だってやります」
これが彼の考えだ。
人類は確かに愚かで、滅ぶ必要があるのかも知れない。彼も２０年間、人間のそういう愚かな側面を見てきた。
だがそれでも、彼はこの世界を、自身の祖国（アメリカ）を、どれほど愚かでも、素晴らしい何かを生み出してくれる人というものを信じているのだ。
目の前の青年の思いも寄らぬ返答をを聞いた並木は、驚いた顔で立香を見る。
その様子を見た立香はやってしまったと言わんばかりにソファに座り込んだ。
「あ……すいません。こんな馬鹿みたいな持論を……」
「いや、いいんだ……うん、うん……藤丸君。やはり私は君に賭けてみようと思う」
「え？」
並木はソファから立ち上がると、何かを覚悟したような厳しい表情で立香の目を見た。
「単刀直入に言おう、藤丸立香君。君には、世界を救う力がある」
「……は？」
突然訳の分からない事を言い放った並木を、立香は怪訝そうな顔で見た。
あまりにも突拍子過ぎて、立香はこの男はヤク漬けになっているのではないかと一瞬疑う。
「いきなり何の話ですか？エイプリルフールはまだ先――――」
「私は至って真面目だよ。これは事実だ。……まあ簡単には信じられないと思う。私も初めて話を聞いた時はバカバカしい、ただの冗談だと思ったからね」
平然とした様子で語る並木の様子を見て、立香は訳が分からなく

なった。
世界を救うとは一体どういう風に吹き回しなのか。なぜ目の前の自衛官は突然そんな事を言い出したのか。それに、世界を救う力が立香にあるとはどういう事か。
頭の中が混乱する。脳がオーバーヒートを起こしかけているからか、こめかみに小さな痛みが走るのを立香は感じた。
「……一佐、ちょっと意味が分からないんですが」
「ああ、すまない。説明不足だったね。まず元々の話をしよう」
並木はソファから立ち上がると、窓の方へと歩き出した。
「……これから話す事は、各国政府のごく一部にしか知らされていない物だ。絶対に、他の人間には話しては駄目だよ」
「ええ、大丈夫です。そういうのには慣れてます」
「……そうか」
そう一言だけ呟き、並木は立香の方に振り向く。その表情は、先程よりも一層険しいものだった。
「……今年の初めに、国連隷下の組織から各国へ同時にある情報が通達された」
尋常ならざる雰囲気に立香も思わず息を飲む。国連隷下の組織、その一言で一気に話が真実味を帯び出した。
「その内容は――――」
国連隷下の組織。各国へ等しく通達されたある情報。立香にはただの機密とは考えられなかった。
「――――２０１６年１２月３１日をもって、人類は絶滅する。というものだ」
一瞬、ほんの一瞬。立香は目の前にいる男が何を言っているのか理解出来なかった。いや、思考が止まったと言った方が正しいだろう。
人類が、絶滅する。今から僅か二年足らずで。あまりにも馬鹿馬鹿しく、衝撃的な言葉だった。
窓から見えるあのいつも通りの世界が、あと二年も経たずに絶滅するのか。
「は、はは、ご冗談を。誤報では？」

立香は引きつった笑みを浮かべて並木一佐に尋ねた。こんな話、到底信じられるはずがない。人類が絶滅するなど、それほど突拍子も無い話なのだ。
だが一佐は何も言わず、小さく首を横に振る。
「……本当、なのですか」
無言のまま、一佐は首を縦に振る。
それを見た立香は下を向き、頭を抱えた。人類が滅ぶというのは馬鹿馬鹿しい嘘ではなく、事実であるという事なのだ。
「Ｈｏｌｙ（冗談）　ｓｈｉｔ（だろ）……」
信じたくなくともこれは紛れも無い事実なのだ。そう、彼の中に巣食う直感のようなものが確信を持った。
あと二年もしない内に、人類は滅びる。思わず素で英語が出てきてしまうほどに、衝撃的な話だった。
「……藤丸くん、聞いて欲しい」
動揺している様子を見た並木一佐はソファに戻ると、立香に声をかけた。その声を聞いた立香は、ゆっくりと顔を上げる。
「我々も、ただ人類が滅びるのを待っている訳じゃない。君が呼ばれたのも、人類の絶滅を防ぐためなんだ」
「……どういう事ですか？」
「今回の情報を通達した国連隷下の組織だが、彼等はこの件を解決するために、世界中からとある才能を持った人間をかき集めているんだ」
立香はその話と自分に何の関係あるのかと一瞬疑問を抱いたが、すぐにどういう事なのか気が付いた。
「……なるほど。それが、自分の、世界を救う力とやらだと？」
「ああ、その通りだ」
ようやく立香の中でも一応合点がついた。その組織は立香の世界を救う力とやらを欲しているのだ。
それと同時に幾つか疑問も浮かぶ。その組織は、なぜわざわざこんな平凡な一青年を招集するのだろうか。それ程までに事態は芳しくないのだろうか。

だが疑問に思っている暇はない。今やるべきなのは、自分がすべき事を確認する事だ。
「それで一佐、自分は一体何をすれば？」
頭をブリーフィングモードに切り替え、立香は並木に尋ねる。
「ああ、その事なんだが……」
「……？　何か問題でも？」
並木は何かを言おうとしたが、何を思ったのか俯いて口ごもってしまう。何かまずい事でもあるのだろうかと立香は推し測る。
「今年の8月に、君をアメリカまで連れて来てくれと言われているんだよ」
「8月……」
8月となれば、今から7ヶ月後――――立香が防衛大に入学してからなら4ヶ月後だ。
時期としてはあまりにも早すぎる。例え留学を言い訳にしたとしても、入学一年目の夏から留学なんていうのは怪し過ぎるだろう。
だが裏を返せば、人類はそれほどまでに追い詰められているという事なのだろう。
「勿論、君が嫌なら拒否してくれたって良いんだ。代わりの人間だっている。無茶してまで行かなくて良いんだよ」
「……」
このまま話を承諾し、本当かどうかも不明な人類の滅亡を防ぐ為にアメリカへ向かうか。話を断り、自衛隊の幹部候補生として安定したこれからを過ごすか。
大半の人間は後者を選ぶだろう。それが一番懸命だ。
しかし後悔の大きさで考えればどうだ。もし本当に、人類が危機に瀕しているのなら。もし自分がいなかったせいでそのまま滅んだら？
奇跡が起きない限り、過去には戻れない。後悔は、どちらの方が大きいだろうか。
立香の、彼の答えは明白だった。

「――――行きます」
覚悟などというものは、とうの昔に決めていた。これは今の自分に与えられた責務なのだ。
幾ら時が経とうとも、身体が変わろうとも、立香は――――ローガンは海兵だ。その精神（こころ）は、ローガン・K・アダムスという一人の海兵のものなのだ。
海兵なら、己に課せられた責務を果たすべきだ。
「本当に、良いのかい？」
並木は、確認するように立香に尋ねた。立香は無言で首を縦に振る。
「……分かった。詳しい日時が決まり次第、君に伝える。
だが決して、決して他の人には言わないで欲しい。出来るかい？」
並木の言葉に対して立香は、ソファから立ち上がり――――
無言の敬礼で応えるのだった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．２『Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｂａｔｔｌｅｆｉｅｌｄ』

２０１５年３月２０日　１５時３０分
東京都　新宿区　東京メトロ　市ヶ谷駅

「はあ……」
立香はホームの柱に寄りかかりながら、天井に向けてため息を吐いていた。
「今日は散々というか何というか……」
今日一日、立香には様々な出来事が起こり過ぎた。
防衛大学校に採用されたのは良いとして、防衛省にて並木一佐に、自身に魔術師の才能があると言われたのはもう驚くしかなかった。
だが今は最早、そんな事はどうでも良かった。立香はもっと重要な事を一佐から聞いていたからだ。
――２０１６年１２月３１日を以って、人類は絶滅する。
余りに突拍子も無い、衝撃的な話だ。しかし、並木一佐は事実だと言っていた。
普通の人間ならありえないと言って全く相手にしないだろう。だが立香には、一佐が嘘を言っているとは到底思えなかった。
「……俺が承諾したんだからな。今更一佐の所に戻って、この話を断ろうなんざ甚だ思ってないさ。」
立香は既に、自分が行くと一佐に言ったのだ。これが自身に課せられた責務だと信じて。
行く必要は無かったのかもしれないが、そんな事は立香の――ローガンの海兵としてのプライドが許さなかった。
自身に何かを達成できる力があるのなら、それを行使するのは当然の事だ。少なくともローガンは、そうやって来たのだ。
『まもなく　三番線に　埼玉高速鉄道線直通　浦和美園行きが　参ります。

ご乗車の際は　手荷物をドアに挟まれないように　ご注意下さい。』
ホームのスピーカーから、電車の接近を知らせる放送が流れる。
「もうそろそろか……」
立香は柱に寄りかかるのをやめると、ホームの黄色いブロックの前に移動した。
『市ヶ谷です。
三番線の電車は　浦和美園行きです。』
放送と共に、電車がホームに到着する。
平日の昼間という事もあってか、乗客は少なかった。座席もいくつか空いている。
立香は乗車すると、空いている座席に素早く座った。
しばらくするとスピーカーから、発車を知らせるメロディーが流れ出す。
『ドアが閉まります。手荷物をお引き下さい。』
その放送の直後、空気の抜けるような音と共に、電車のドアは閉じた。

電車が動き出すと、立香はスマホを開き、あるＳＮＳのアプリを開いた。
「……あいつ、また親バカ発揮してやがるな。」
一つのアカウントの投稿を見て、立香は苦笑いとも微笑みとも取れるような笑みを浮かべた。
黒人の幼い少女が笑顔でこちらを向いている画像と、その少女をベタ褒めする文章という、ありふれた投稿だ。しかしそれは、立香にとって極めて特別なものだった。
理由は至極単純。
これを投稿したアカウントの主が、彼の部下だからだ。
彼の目の前で殺されていった部下達。その部下達との思い出を思

い返すために、彼はこうして彼等の投稿に目を通しているのだ。
とはいえ、思い出すのはいい思い出ばかりでは無い。
「シンディ……ごめんよ。俺のせいで、あいつを……あいつを……！」
思い出したくもない、けれども思い出すしかない、あの時の忌々しい記憶。
握っていた手から零れ落ちるように消えていく体温。瞳孔が開いた瞳。傷口から流れ出る血。そして冷たくなり、何も物言わなくなった部下達。
思わず両手に力が入り、小さく震え出す。
「……っ」
左手に小さな痛みを感じた事で、彼はようやく自身が血が滲むほど手を握り締めていた事に気付いた。
「……ああ、やっちまった。」
赤い爪の跡が残っている掌を見つめながら、立香はため息を吐いた。
いつもこうだ。忘れようにも忘れられない。恐らくこの苦しみは、彼がこの人生を終えるまで付き纏うだろう。
今も彼の胸中には、部下達への申し訳なさが溢れていた。
『――――、――――です。』
気付いた時には、既に目的の駅は目前に迫っていた。立香はスマホをポケットにしまうと、座席から立ち上がってドアの前に移動する。
ドアが開くと同時に、立香は電車から降りて改札口に向かう。
１Ｃカードを使って改札口から出ると、立香は自宅へと続く道を歩き出した。

駅から１０分ほど歩くと、平均的な――――アメリカでは小さい方だが――――真新しい雰囲気の一軒家が見えてきた。塀に貼り付けられている表札には『藤丸』と書かれている。
どこにでもあるようなごく普通の家、それが立香の家だった。
立香は玄関に近づくと、そっとドアに耳をそばだてる。玄関の向こうからは、男女の話す声が聞こえた。

恐らく両親だ。立香がドアを開けた瞬間にサプライズ、などと考えているのだろう。
立香はハアとため息を吐くと、ドアノブに手を掛けてドアを開いた。
「大学合格おめでとう、立香！」
立香の予想通り、二人は玄関の前で待機していたようだ。クラッカーの鳴る音と共に、二人の声が聞こえる。
クラッカーの音に驚き、立香は思わず腰に手を回して身構えた。腰に手を回してはいるが、勿論今の彼は腰に拳銃など装備していない。
「……ビックリしたぁ。」
数秒の静寂の後、立香は少し間の抜けた声でそう言った。
クラッカーの音は銃の発砲音と酷似している事もあり、立香は警戒してしまったのだ。
立香の驚いた様子に、二人は嬉しそうな表情を浮かべる。
「……」
二人の顔を見ながら、立香は防衛省で自身が告げられた事を思い出した。
あと半年も経たない内に、立香はアメリカへ飛ぶ事になる。この世界を救うために。
不思議と、心はあまり痛まない。薄情な事だとは立香も理解していた。
だがそれも無理はないのかも知れない。二人はこの体（藤丸立香）の親であって、ローガンの親ではないのだから。
「……ただいま。あと、ありがとう。」
立香は目の前の二人に対し、精一杯の笑顔を浮かべた。
その後は至極普通な日常を送った。普通に大学の事を話し、普通に食事をして、普通に風呂に入り、普通の体現のような日常を過ごした。
数時間後の夜の１１時。部屋着に着替えた立香は部屋に入ると、ベッドに寝転がった。
「……普通っていうのは、こういう事を言うんだろうな。」
藤丸立香という青年は、彼自身が驚くほど普通な人間だ。かつての

彼とは比べ物にならないほど、平和で普通だ。
こういう人生も良かったかも知れない、と彼は思った。
「――――ん？」
立香は何か懐かしい気配を感じ、ふと机に目を向ける。机の上には、見覚えのない何かが置いてあった。
ベッドから立ち上がり、机の上にある何かを確認するために近付く。
机の上には、認識票――――所謂ドッグタグが置いてあった。
それを見た立香は不審に思う。彼には、認識票を基地祭で貰ったり購入したりした覚えが無かったのだ。
「一体なんでこんな物が――――なっ⁉？」
認識票を手に取った立香は刻印されている文字を見て、驚きのあまり目を見張った。
「なんで――――」
その認識票には――――
「俺の認識票が――――？」
――――彼の名前が刻印されていた。
その他にも彼の血液型・社会保障番号・所属（USMC）・ガスマスクサイズ・宗教という、彼に関する様々な情報が刻印されている。
正真正銘、彼の認識票だった。
「……クソ、訳が分からん。何だって俺の認識票がここにあるんだ？」
この認識票は立香が持っているはずのないものだ。それと同時に、ここにあるべきものでもない。
何故こんな物がここにあるのか、立香には全くもって分からなかった。
とはいえ、立香にはその認識票を捨てるつもりなど毛頭無い。何故ここにあるのかは不明だが、再び自身の認識票を見ることが出来て彼は嬉しかった。
立香は認識票を首に掛けると、そのままベッドに戻って行く。ベッドに倒れ込むと、立香は認識票を右手でそっと握り締めた。
「……懐かしいな。」

首に感じる金属の感覚は、彼が久しく感じる事の無かった物だった。
しばらくしてから、立香は微睡み始める。そのまま目を閉じると、立香の意識は深い闇の中に沈んでいった。

――――――――――――

――闇の中から、意識が急浮上し始める。
それと同時に、周囲から乾いた音や人間の声のようなものが聞こえてきた。
――ち――――、――――て――――さ――――
自身を呼ぶ声が聞こえる。それに応えるように、意識がハッキリとしてきた。
そうちょ――、――きて――ださ――――！
声は次第にハッキリと聞こえるようになってきた。意識が回復し、目を開くと――――
「――――曹長！アダムス先任曹長！起きて下さい！」
――目の前に見覚えのある黒人がいた。
「――――ジャクソン？」
彼は間の抜けた声で口から懐かしい名前を呼ぶ。それは彼の部下で、部隊の機関銃手を務めていた兵士の名前だった。そして彼が思わず発声した声は、懐かしい彼の本来の声だった。
「ええそうです！あなたの部下のアレックス・ジャクソン伍長です！ほら、しっかりして下さい曹長！」
ジャクソンに肩を揺らされ、やっと彼は自身が何者なのかを理解した。
今の彼はローガン・K・アダムス大尉その人だ。理由や原因は不明だが、何故か以前の彼に戻ったのだ。
「――――！　ジャクソン、状況は⁉？」
周囲に目を向けて、やっと自身が戦闘の真っ只中にいる事に気付いたローガンは、ジャクソンに現在の状況を尋ねた。

「状況は最悪です！　指定された回収地点（ランデブーポイント）への移動中に、クソ野郎共からの待ち伏せ攻撃を受けました！　曹長はＲＰＧ（ロケット砲）で吹き飛ばされてましたが――――フェルナンデス曰く大丈夫だそうです！」
「了解した、報告ご苦労！」
「それと、もう一つ報告があります！」
「何だ⁉？」
「我々を回収する予定だった陸軍のブラックホーク（ＭＨ－６０Ｍ特殊作戦用ヘリ）が撃墜されました！」
「クソッタレ！　最悪なニュースばかりだな！」
　あまりの状況にローガンは毒吐いた。空を見上げると、そう遠くない場所から、墜落したヘリのものであろう薄い黒煙が立ち上っている。
　墜落したヘリにも敵が向かっているだろう。ヘリに取り残されている乗員の安否が不明な今、ローガンは一刻も早く彼等の元へ向かいたかった。
「敵の人数は⁉？」
「詳しい数までは分かりませんが、確実に３０人はいます！」
「了解した！　作戦司令部には報告したか⁉？」
「はい！　４０分でブラックホークとリトルバード（ＭＨ－６汎用ヘリ）がそれぞれ２機ずつ、完全武装で迎えに来てくれるそうです！」
「そいつは上々！」
　ローガンは周囲を見て、部隊員達が無事である事を確認すると、大きく息を吸い込んだ。
「よし海兵！　あと４０分でヘリが迎えに来る！　それまでに敵の包囲を突破、墜落したヘリの乗員のところへ向かうぞ！　いいな⁉？」
『Ｓｉｒ，Ｙｅｓ　ｓｉｒ⁉？』
　７人の兵士はローガンの方を向いて一斉に頷いた。
　ローガンは起き上がり、傍らに置いてあったＭ４Ａ１カービンライフルを手に取る。コッキングレバーを引くと、排莢口から弾丸が排出された。
　遮蔽物となっている壁から顔を少しだけ出し、敵の状態を確認す

る。それと同時に、ローガンの顔のすぐ側を銃弾が通り過ぎた。
ローガンが目視で確認出来たのは８人。２０ｍ先の角に二人、４０ｍ先の通りに放置されているピックアップトラックの後ろに二人、２５ｍ先の土嚢等で作られたトーチカのようなバリケードに四人。
この程度、とローガンは鼻で笑った。
「交戦開始！」
Ｍ４Ａ１を構え、角から身を乗り出したローガンは、装着されているホロサイトを覗いて敵に照準を合わせ、トリガー（引き金）を引く。
高圧の燃焼ガスに押されてＭ４Ａ１から発射された５．５６×４５ｍｍＮＡＴＯ弾は、角から銃を撃っていた敵に一直線に飛んで行き、左目を撃ち抜き、頭部を貫通した。
敵は小さく仰け反ると、そのまま糸が切れたように倒れる。
「一人やった！」
既に何も物言わぬ肉の塊と化した敵はもう一人に引き摺られ、通りから消えていった。
ローガンは壁に張り付き、角からトーチカのようになっている銃座に視線を移す。銃座には中国製の８０年式機関銃が取り付けられており、ローガン達のいる場所に対して、機銃掃射を加えていた。
一際大きい銃声が止んだ事に気付いたローガンは、角から顔を出す。敵の射撃が止んでいるのを確認すると、ローガンは銃座に照準を合わせ、機関銃に付いていた敵に二発同時に発砲する。
銃弾をもろに喰らった敵はそのまま倒れたが、すぐに別の敵が銃座に付き、機銃掃射が再開された。
「あの銃座のせいで、我々はここに貼り付けられてるんです！」
「クソッタレ！　早く何とかしないと……」
ＳＭＡＷを使用しても良いが、割に合わなさ過ぎる。何か手は無いのか。角から少しだけ顔を出し、銃座を観察する。
どうやらあの銃座には天井のような物が無く、上部からの攻撃に対して何の対策も施していないようだ。
「それなら――――」
ローガンはプレートキャリアに付けられていたＭ６７破片手榴弾

を手に取り、そのまま安全ピンを抜いた。
「グレネード！」
その掛け声と共にローガンは銃座めがけてＭ６７を投擲する。
放物線を描いて銃座に落下して来たＭ６７を見つけた敵は叫び声を上げ、それとほぼ同時にＭ６７は銃座に着地、爆発した。
爆発音と共に土煙が上がり、敵が銃座から放り出されるように吹き飛ばされる。
「銃座を無力化！」
「了解！　やりましたね曹長！」
「よし、この調子で行くぞ！」
銃座に走って向かっている敵を見つけたローガンは、敵に向けて四発発砲する。銃弾は敵の腹部に命中し、敵は短い断末魔を上げて前のめりに倒れた。
これで銃座は完全に無力化出来ただろう。これの他に脅威になりうるであろう物はＲＰＧのみとなった。
「ジャクソン！　ＲＰＧはどこから飛んできたんだ⁉？」
ローガンは再び壁に張り付くと、すぐ隣でＭＫ４８　Ｍｏｄ０軽機関銃のバイポッド（二脚）を立て、敵に対して連続射撃を行なっていたジャクソンの肩を叩き、そう尋ねた。
「あの建物見えますか⁉？　あそこからです！」
ジャクソンは約３０ｍ先のアパートのような建物を指差す。建物の屋上には、いくつかの動く人影が見えた。
その内の一つ、肩に大きな何かを持った男が、こちらを向いているのにローガンは気付いた。
「――――ＲＰＧ！」
そう叫んだ瞬間、男が持っていた物から発射炎が生じ、ローガン達のいる方向へＲＰＧ―７の弾頭が飛翔する。ローガンはジャクソンの肩を掴み、角の奥へ引っ張った。
弾頭はローガン達がいた角のすぐ前に命中し、爆発による振動と轟音が響く。大量の土煙が舞い上がり、ローガン達の周辺を覆った。
「ゲェホッ、ゴホッ……大丈夫か⁉？」

手で土煙を払いながら、ローガンは周囲にいる隊員達の安否を確認する。
「こちらは無事です！」
「こちらも同じく！」
「こっちも大丈夫です！」
「死傷者はありません！　全員無事です！」
土煙の中から隊員達の声が聞こえる。全員無事という言葉に、ローガンは安堵した。
「ロジャーズ！　こっちに来い！」
「了解！」
ローガンが怒鳴るように名前を呼ぶと、ＭＫ１１　Ｍｏｄ０マークスマンライフルを手にした兵士が彼の元に駆け寄ってきた。
「あの建物の屋上から奴が顔を出したら、お前の鉛玉をプレゼントしてやれ！」
「分かりました！」
先程、ＲＰＧ―７が発射された建物を指差すと、ロジャーズは力強く頷いた。
「ピックアップの後ろから敵が三人出てきました！」
隊員の一人がそう叫び、ピックアップトラックのある方向を指差した。
「了解、射撃開始する！」
ジャクソンはＭＫ４８を構え直し、トリガーを引いた。連続で発射され７．６２×５１ｍｍＮＡＴＯ弾は三名の敵に命中すると、彼等の膝から下の部分を綺麗に吹き飛ばす。
足を吹き飛ばされてた男達の内、二人はすぐに生き絶えたらしく微動だにしなかったが、もう一人の男は生きていた。男は両足を喪失していながらも、腕を使って這いずるように移動している。
「……えげつないな。」
その光景を見たローガンは、軽く顔をしかめながら小さく呟いた。
直後に、ローガン達のＭ４Ａ１より一回り大きな銃声が響く。ロジャースが例の建物の屋上から顔を出したＲＰＧ射手を狙撃したの

だ。
７．６２ｍｍ弾を受けたＲＰＧ射手の頭部は弾け飛び、頭部を失った射手はそのまま仰け反る。それは彼がＲＰＧ―７のトリガーを引こうとしたコンマ１秒前の出来事だった。
しかし頭部が喪失して、体の動きが止まるという訳ではない。頭部が吹き飛ぶ前に脳から筋肉に向けて発せられた命令は、既に頭部を失った男の指がＲＰＧ―７のトリガーを引く事で遂行されたのだ。
発射されたＲＰＧ―７の弾頭はローガン達の方向――――ではなく、屋上の床に命中し、爆発する。爆発は側に置かれていた他の弾頭にも誘爆を起こし、屋上全体が吹き飛ぶほどの大爆発と化した。
「やりました曹長！」
「よくやったロジャース！　敵はＲＰＧを喪失！　いいぞ、大分有利になった！」
「よっしゃあ！　この調子で行くぞ！」
屋上の大爆発を目撃したローガン達は歓声を上げる。だが、その歓声は直後に鳴り響いた重い銃声に掻き消された。
彼等は何事かと銃声のした方向を見て、驚愕する。
一両のハンヴィーがこちらに向かって走行して来ていたのだ。
「Ｗｈａｔ（なんて）　ｔｈｅ（こった）　ｆｕｃｋ（た）！」
「恐らく鹵獲された代物だ！　クソッタレ！」
ローガン達はハンヴィーに向けて銃撃するが、既存の装甲キットと敵自ら取り付けたであろう鉄板のせいで、ハンヴィーには全くと言っていいほど効果は無い。手榴弾を投げるも、装甲に阻まれて効果は今一つだった。
それに加え、ハンヴィーには旧ソ連製のＫＰＶ１４．５ｍｍ重機関銃が装備されており、ローガン達に向けて発射されている。
「このままじゃジリ貧だ！」
「何か手は無いのか⁉？」
重機関銃から発射される銃弾から身を守るために、彼等は壁に張り付いた。だがこのままでは距離を詰められ、全滅するだろう。
この状況を打破するための方法は、一つだけだった。

「――――仕方がない、俺がＳＭＡＷを撃つ！」
ローガンは隊員達に対してそう叫んだ。彼等が保有する火器の中で、あのハンヴィーに対抗できるのはＳＭＡＷ（肩撃ち式多目的強襲兵器）ロケットランチャーだけだった。
とはいえこれは相当危険な事だ。彼等とハンヴィーの距離は既に３０ｍを切っている。今飛び出そうものならいい的だ。
「危険過ぎます！」
「そんなものは承知の上だ！」
隊員の一人が止めようとするが、ローガンはそう怒鳴ってＳＭＡＷにランチャー・チューブを装填する。
確かに、彼が今行おうとしている事がどれほど危険なのかは目に見えている。だがこれは誰かがやらなければいけない事なのだ。
「なら自分が行きます！」
「いいや駄目だ！　この中で一番ＳＭＡＷの扱いに長けてるのは誰だ⁉？　言ってみろ！」
「――――曹長です。」
「分かってるのなら止めるな！」
そう言ってローガンはＳＭＡＷを肩に担いだ。既に敵のハンヴィーとの距離は、２０ｍを切ろうとしていた。
「ＳＭＡＷを撃つ！　バックブラストに注意しろよ！」
ローガンは角に張り付き、顔を覗かせる。ハンヴィーは目の前だ。ここで決めなければ、間違い無くやられるだろう。
角から飛び出したローガンはハンヴィーに照準を合わせる。突然出て来た兵士にハンヴィーの銃手は驚いたらしく、ＫＰＶのトリガーを引くのが一瞬遅れてしまった。
「――――発射！」
その声と共に、ローガンはトリガーを引いた。
強烈なバックブラストと共に、ＳＭＡＷ対人・対装甲両用弾が発射される。発射されたロケット弾はハンヴィーのフロント部分を貫き、車内で爆発した。
ハンヴィーは穴という穴から火を噴き上げ車内の乗員を焼け焦げ

たミンチ肉に変え、その爆風と破片はハンヴィーのすぐ側にいた敵を殺傷する。
「――――撃破を確認！」
ハンヴィーは撃破した。だがまだ敵は残っている。二人の隊員がローガンを角に引きずり込んだ瞬間、ローガンが先程まで立っていた場所が集中砲火を浴びた。
「悪い、助かっ――――」
「曹長！　もうこんな馬鹿な事しないで下さい！」
隊員の一人が突然怒鳴った。突然の出来事に、ローガンは固まる。
「あなたがいなくなったら、一体誰が我々を率いるんですか⁉？」
もう一人もそう怒鳴る。
確かに彼等の言う通りだ。どれほど強力な部隊でも、それを纏める頭部――――指揮官がいなければ烏合の集になってしまう。ローガンもそれは分かっていた。分かってはいたが、それを疎かにしてしまっていたのだ。
「――――すまなかった。これじゃあ指揮官失格だな。」
ローガンはそう謝罪すると、立ち上がって彼等
「さあ、臨時の反省会はここまでだ！　とっとと墜落したヘリに向かうぞ！」
その言葉に、隊員達も立ち上がり始める。その光景を見たローガンは、無言で頷いた。
「Ｏｏ―Ｒａｈ！」（ウー―ラー！）
『Ｏｏ―Ｒａｈ！』（ウー―ラー！）
ローガン達は大声で掛け声を叫び、自分達を鼓舞する。彼等は各々が所持していた銃を構えると、今まで立て籠もっていた角から飛び出した。
「ジャクソンとロジャースは後方から援護射撃！　その他の連中は俺と共に前方で戦うぞ！」
『了解！』
彼等は遮蔽物へと走り、到着した所で敵に向けて発砲する。敵は数が多いとはいえ、結局は一般人に毛が生えた程度の人間の集まり。射

撃の精度も酷いものだ。
そんな彼等を殲滅する事など、ローガン達からすると、それほど苦になるような事ではなかった。
ジャクソンがＭＫ４８　Ｍｏｄ０の制圧射撃で敵を薙ぎ払い、それで仕留められなかった敵をローガン達が仕留めて行く。
「リローディング！」
「了解！　カバーする！」
圧倒的だ。だが敵は無謀にも、一歩も引こうとはしなかった。
「前方にＬＭＧガンナーだ！」
「確認した！　任せろ！」
一人、また一人と、着実に敵は減っていく。
そうして最後の敵を射殺した事で、辺りは静寂に包まれた。
「周囲の制圧完了しました！」
「よし、このまま墜落現場に向かうぞ！」
「了解！」
そう言って、ローガン達は黒煙が立ち上っている方向へと走り出した。

５分ほど移動すると、墜落現場である広場に着いた。
広場には、テイルローターが吹き飛ばされたブラックホークが黒煙を吹き上げながら墜落していた。とはいえ、衝撃があまり無かったからか、機体はそれほど損傷しておらず、原型を留めていた。
ブラックホークには四人の乗員が乗っているが、幸いにも四人全員が無事だった。彼等はヘリの残骸に身を隠しながら、接近して来る敵を護身用のＭ４カービンライフルで撃退していた。
「おい、陸軍（Ａｒｍｙ）！」
ローガンはヘリの乗員達に声を掛ける。
彼等はローガン達の姿を見ると、安心したのか表情を少し和らげた。

「――――海兵隊(Marines)か!?」
「おうとも、助けに来たぞ！」
　ローガン達は乗員の側に駆け寄った。
「アダムス先任曹長だ！　後少しで迎えが来るから、それまで援護してやる！」
「俺はパイロットのジョンソン准尉だ！　救援感謝する！」
　ジョンソンと名乗ったパイロットは、ローガンに手を差し出す。
　ローガンはその手を握り、握手をした。
「そちらの状況は!?」
「ガンナーの一人が、墜落の衝撃で右足を骨折した！　そのせいでこの場から離れられなかったんだ！」
　ジョンソンはすぐ隣にいた乗員を指差す。その乗員は、一見すれば大丈夫そうに見えるが、良く見ると右足が歪んでおり、かなりの量の冷や汗を流していた。
「フェルナンデス、このガンナーにモルヒネを投与してやれ！」
「了解です曹長！」
　隊の衛生兵であるフェルナンデス三等兵曹にローガンがそう指示すると、フェルナンデスはポーチからモルヒネの注射器を出し、ガンナーの太腿に刺す。
　痛みが薄れたおかげか、ガンナーの表情は先程よりも落ち着いたものになっていた。
「少しはマシになるだろう。もう少しの辛抱だぞ。」
「ああ……すまない……」
　ローガンはジョンソンにマガジンを渡すと、遮蔽物に張り付く。
「交戦開始！」
　ローガンがそう叫ぶと、隊員達が一斉に射撃を開始した。
　敵の頭部に照準を合わせ、射撃する。倒れたのを確認すると、また別の敵に照準を合わせ、射撃する。
　連続で敵を射撃するが、敵の数は一向に減らなかった。
「曹長、このままじゃ埒が明きませんよ！」
　あまりの多さに、ＭＫ４８　Ｍｏｄ０のバイポッドを立てて弾幕を

張っていたジャクソンが悲鳴をあげた。
「あと１０分経てばヘリが来る！　それまで何としてでも持ち堪えるんだ！」
　ローガンは射撃しながらそう答える。とはいえ、彼もこの数はかなり手厳しいと感じていた。
　敵はローガン達と比べて圧倒的に数が多く、じわじわと距離を詰めて来ていた。このままでは全員殺されてしまうだろう。
「こうなったら――――」
　ローガンは腰につけているＯＫＣ―３Ｓ銃剣とククリナイフを見つめた。
　そのままＯＫＣ―３Ｓを鞘から取り出し、Ｍ４Ａ１に取り付け、フォアグリップを外した。
「敵の後方に回り込んで、挟み撃ちにするぞ！　ダミアンとタナカ、アンダーソンは俺と一緒に来い！」
　挟み撃ちにする事でヘリに集まるヘイトを分散、そして二方向からの十字砲火（クロスファイア）で敵を撃破する、というものだ。
　敵は相当数密集している。それらに集中砲火を浴びせれば、効果は絶大だろう。
「「了解！」」
「よし、集まったな――――後方に回り込んだら、四人で一気にグレネードを投げる！爆発したら、一気に射撃を開始しろ！」
　ローガンに呼ばれた三人の隊員達が彼の元に集合する。ローガンは隊員達に作戦の詳細を伝えると、そのまま三人を引き連れ広場を飛び出し、敵が集中している場所の裏に回る。
　敵の真横に到着すると、こちらには一切気づいていない敵の姿を確認した。
「よし、チャンスだ。グレネードを投げ込んで、爆発した瞬間に制圧射撃を開始する、いいな？」
「了解。」
「連中のケツにぶち込んでやりましょう、曹長。」
　隊員の言葉にローガンは無言で頷くと、Ｍ６７を手に取る。隊員達

も同じく、Ｍ６７を手に取った。
「いいか。１、２、３で投げるぞ。」
ローガン達はＭ６７の安全ピンを抜く。
「１、２、３――――」
３と言ったところで、彼等は手榴弾の最後の安全装置である安全レバーを外す。
「――――投擲！」
その号令と共に、彼等はＭ６７を放り投げた。投げられた四つの手榴弾は、それぞれが敵のグループの足下に落下、その２秒後に爆発する。手榴弾をもろに食らった敵達は吹き飛ばされ、絶命し、あるいは重傷を負った。
「射撃開始！」
その瞬間、全員が一斉に射撃を開始する。肉の壁で手榴弾の被害を免れた敵も、十字砲火で次々と薙ぎ倒されていく。生き残った敵は必死になって隠れ、この銃撃が止むのを待った。
数秒間に及ぶ長い銃声が止み、敵の一人が顔を上げる。
その瞬間、彼の頭部に銃剣が突き刺さる。銃剣は彼の右目と脳幹を貫き、刺された男は絶命した。
「まずは一人！」
ローガンは死体を足で押し、銃剣付きのＭ４Ａ１を頭部から引き抜く。
突然に出来事に、刺された男の隣でへたり込んでいた男は、やっと目の前の男がどうなったのかを理解し、喚き散らしながら銃を手に持つ。だが、トリガーを引く前にローガンがＭ４Ａ１で彼の頭部を銃撃した。
「二人目！」
生き残っていた敵はローガンに向けて小銃を乱射する。とはいえ余りに出鱈目すぎる射撃のせいか、ローガンには全く当たらず、そのままローガンは遮蔽物に一旦隠れた。遮蔽物に次々と銃弾が命中する。
「さて、ここからが本番だ――――！」

銃声が止んだのを確認すると、ローガンは遮蔽物から飛び出す。そのまま一番距離の近い敵に銃剣を突き刺し、そのまま銃口を他の敵に向ける。Ｍ４Ａ１のセレクターをフルオートに変更してトリガーを引いた。

発射された銃弾は敵の身体を貫通し、他の敵に命中する。マガジンが空になったところで、ローガンは銃剣を引き抜いた。

「リローディング！」

「了解、援護します！」

ローガンが叫ぶと、後ろから近づいていた隊員がそう言って射撃を開始した。

新しいマガジンを装填し、ボルトストップを押してボルトを前方に戻し、弾薬をチェンバーに装填する。同時にローガンは腰の鞘からククリナイフを引き抜く。

敵の懐に潜り込むと、左手でククリナイフを突き刺し、ホルスターから引き抜いたＭ４５Ａ１ピストルで右側にいた敵兵二人にそれぞれ四発撃ち込む。そのまま突き刺したククリナイフを、敵の右脇腹を切り裂いて抜いた。

一人、また一人と敵を殺害していく。ローガンは戦闘狂や快楽殺人者ではないが、このような時はアドレナリンが多く分泌され、半分トリガーハッピーのような状態になってしまうのだ。

そのせいか、彼は自分の背後に、生き伸びている敵がいるとは気付きもしなかった。

背後からの銃声と共に、ローガンの左首筋を銃弾が抉った。

「あがっ!?」

ローガンは首筋を抑え、苦悶の声を上げる。敵はそのまま彼を仕留めようとするが、すかさず振り返ったローガンはＭ４５Ａ１のトリガーを引いた。

抉られた傷口から大量の血が流れ出てる。

頸動脈が損傷したのかもしれない。このままでは不味い。

そう考えたローガンは武器をしまい、隊員達を呼ぶとヘリの方向へと全速力で走り出した。

「曹長、その傷どうしたんですか!?」
ヘリの元に戻ったローガンの傷を見て、衛生兵のフェルナンデスが悲鳴をあげる。
「何でも無い、まだ大丈夫だ！　取り敢えず止血剤だけでもよこせ！」
「ダメです、処置します！　動かないで下さい！」
フェルナンデスがローガンの傷口に止血剤の染み込んだコンバットガーゼを傷跡に当てると同時に、無線機が無線を受信する。
『ヘルスカル、こちら第１６０特殊作戦航空連隊（ナイトスカーズ）、第１大隊、中攻撃ヘリコプター中隊のレイヴン１だ。後３分で到着する。支援攻撃が必要なら、フレアで指示してくれ。オーバー。』
「ヘルスカル了解！　到着次第残っている敵の掃討にも協力して欲しい！　オーバー！」
『レイヴン１了解。報酬はビール四本だ。アウト。』
交信を終了すると、ローガンは全員に情報を伝えた。
「ヘリは後３分で到着だ！　それまで持ち堪えるぞ！」
『了解!!』
その後はローガン抜きでの掃討作戦が開始された。
隊員がＳＭＡＷを敵に撃ち込み、多数の敵を吹き飛ばし、ジャクソンが制圧射撃を行う。敵は数は多いとはいえ、結局は訓練を少し受けただけの素人、総合的にはローガン達の方が上だ。
ヘリが到着するまであと１分となった所で、どこかからヘリのローター音が聞こえてくる。
「ヘリが来るぞ！　敵にフレアを投げろ！」
ローガンがそう指示すると、隊員の一人がフレアを取り出し点火させ、敵に向けて投げる。
『こちらデビルレイヴン１、フレアを確認！　これよりランデブーポイントの敵を排除する！』
広場上空に二機のリトルバードと一機のブラックホークが飛来する。舞い降りた３機の黒塗りの天使は、広場の敵に向けてＭ１３４ガトリングガンとＭ２３０機関砲を発射した。
それはまさに、モガディシュの戦闘の再現と言っても過言では無

かった。毎秒１００発の７．６２×５１ｍｍＮＡＴＯ弾とハイドラ７０ロケット、３０×１１３ｍｍ弾が降り注ぎ、敵はミンチか、全身穴だらけとなって行った。
凄まじい攻撃だ。特に３０ｍｍが直接命中した敵は、体の半分以上を吹き飛ばされているだろう。ローガンは思わず身震いした。
負傷者回収用のブラックホークにジョンソン以外のヘリの乗員が乗り込み、そのままヘリは上昇する。墜落したヘリは、ローガン達がＣ４爆薬で爆破した。
『こちらレイヴン１、これより回収に移る。』
「ヘルスカル了解。それにしても――――えげつない攻撃だったな、レイヴン１。」
辺りの様子を見回して、ローガンはそう言う。
『煙が散らないで良かったなヘルスカル――――まあ、うちのカミさんのビンタの方がよっぽどヤバいんだけどな。』
「……」
『……』
『……プッ、ハハハハハハハ！』
その冗談に、ローガンとレイヴン１のパイロットは一緒になって笑った。
「ハハハ……アンタのカミさんのためにも早く帰らないとな。感謝する、早く回収してくれ。」
『ハハ……了解、すぐに降下する。』
そう言ってレイヴン１は高度を下げ始め、着陸する。ローガンは首に巻かれた包帯にそっと触れた。
幸いにも血はすぐに止まった。ローガンは自身の化け物じみた生命力に心の中で感謝する。
着陸したヘリに隊員達は次々と乗り込み、ジョンソンとローガンの番が回って来た。
「感謝する、アダムス先任曹長。お前達が来なければ、我々は死んでいただろう。」
「そう硬くならないでくれ、ジョンソン准尉。我々はやるべき事を

やっただけだ。」
「――――そうだな。ありがとう。」
ジョンソンはこちらに手を差し出した。ローガンはその手を掴み、がっしりと握手する。
そしてジョンソンがヘリに乗り込み――――
「――――ジョンソンッ！」
乾いた音と共に、ジョンソンは撃たれた。
ローガン即座に振り返ってＭ４を構える。あの攻撃を生き残った敵が銃撃したのだ。このままではジョンソンが死んでしまう。
撃った敵はすぐ見つかった。だが、ローガンはトリガーを引くのを一瞬躊躇してしまう。

子供だったのだ。
まだ１０代半ばのような子供が、憎しみに顔を歪ませながらローガン達にに照準を合わせている。
ローガンに残された時間は僅かしか無かった。

奴は敵だ。撃たなければならない。
だが子供だ。撃つなどというのは人間として失格だ。
このままではジョンソンは死ぬ。撃たなければ。
どんな事があっても正当化できるものでは無い。撃ってはダメだ。
撃つんだ。
撃つんじゃ無い。
撃て
撃つな
撃て
撃つな
撃て
撃て
撃て
「俺は――――」

ローガンは――――トリガーを引いた。
銃弾はそのまま少年の頭を貫通し、少年はそのまま倒れる。その反動は、途轍も無く大きく感じた。
銃の反動も、銃弾の軌道も、倒れる少年の姿も、全てがスローモーションの様になっていた。
「……ア……ダ……ムス……」
苦しそうに息を吐きながら、ジョンソンはローガンに声をかけた。
その声にローガンはハッとする。
「……すまん、気にするなジョンソン。」
ローガンはジョンソンをヘリのキャビンに横たわらせ、自身もキャビンに座った。

その後、ローガン達はその功績を称えられ銀星章を、ローガンとジョンソンは戦闘での負傷によりパープルハート章を授与された。
もちろん、ローガンはそれを名誉な事だと思っている。その時も、そして現在も。その気持ちが変わる事は一切無いだろう。
祖国に、アメリカに与えられた責務なら、彼はどんな事でも遂行する。例えそれがどれほど道理からかけ離れたものだろうとしてもだ。
それが彼の義務（Duty）であり、なのだ。
ローガン・K・アダムスは、海兵隊なのだ。これまでも、そしてこれからも。

雀の鳴き声が聞こえる。立香が目を覚ますと、既に朝になっていた。
「……夢、だったのか。」
立香は首筋に触れるが、傷跡など全く無かったが、寝る前に身に付けた認識票は、今も彼の首にあった。
あの夢は、２００７年のイラクで彼が実際に体験した事だ。
時々、彼はこのような夢を見るのだ。

「……そうだな。俺は、海兵だ。」
あの夢は、彼が海兵だという事を自覚させ続ける為のものなのだろう。
「海兵なら――――義務は、必ず果たすべきだ。」
そう言って、立香は立ち上がり、自室を出た。
出発まであと五ヶ月。
覚悟は、既に出来ていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．３『旅立ちと歓迎』

２０１５年８月　　成田空港

「……」

立香は空港内に設置されているベンチに座りながら、顔を上げて天井を見つめている。

両親とは既に別れを告げており、今の彼は並木一佐と二人きりだった。

「搭乗時間まであと１０分か……藤丸くん、用意は出来てるね？」

腕時計を見ながら、一佐は立香に尋ねる。

「……はい、大丈夫です。」

「そうか。それじゃあ、ゲートに向かおう。」

二人はベンチから立ち上がると、搭乗口に向かって歩き出す。

しばらく歩いて、搭乗口に到着する。搭乗口の前には、アメリカへ帰国する者、日本から出国する者等、多くの人で溢れていた。

スタッフにチケットを掲示し、ボーディング・ブリッジを通り、機内に入る。

チケットの座席部分を見ると、そこはビジネスクラスと記入されている。それを見た立香は驚きのあまり、目を見開いてしまった。

「一佐、良かったんですか？　ビジネスクラスなんて……」

「良いんだよ。これはある意味仕事だからね。」

一佐は笑いながらビジネスクラスのある方向へ向かう。立香も苦笑いを浮かべながら、一佐に追従した。

チケットに記された番号を確認し、指定された座席を見つける。座席はエコノミークラスのものと比べると、広くゆったりとしている。見た目だけでも快適そうだ。

立香は座席に座り、備え付けられていた雑誌を取り出す。パラパラとページをめくっていると、ＣＡのアナウンスが聞こえて来た。

アナウンスは、この航空機がニューヨークのジョン・Ｆ・ケネディ国際空港に向かう事を告げている。

今回立香が留学するという設定の、ウェストポイント米陸軍士官学

校はニューヨーク州にある。よって、偽装のためにニューヨークまで向かうのだ。

旅客機が滑走路に進入する。暫くすると、離陸開始のアナウンスが入る。シートベルトを締め、座席に雑誌をしまう。旅客機は速度を上げ、飛び立った。

成田からＪＦＫまで約半日はかかる。眠れなければ相当暇だろう。だが幸いにも、ここはビジネスクラスだ。久しぶりにぐっすりと眠れるだろう。

機体が水平飛行に入ると同時に座席を倒し、備え付けられていた毛布を体にかける。これなら5時間は眠れそうだ、と期待しながら立香は目を閉じた。

成田空港を発ってから、１０時間ほど経った。

自身の予想とは裏腹に、立香は合計で8時間も睡眠を取る事が出来た。まさしくビジネスクラス様々という所だろう。エコノミークラスよりもサービスが充実していたこともあり、退屈することも無かった。

「……

Ｉ⊠ｍ（だ）ｈｏｍｅ（い）ま。ＡｎｄＡｎｄ（そしてお）ｇｏｏｄ（はよう）ｍｏｒｎｉｎｇ（、），ＵＳＡ（アメリカ）。」

窓からはマンハッタンとアメリカの繁栄の象徴である、エンパイア・ステート・ビルをはじめとする超高層ビル群が並び立っている――あの忌々しいグラウンド・ゼロも、その上にそびえる1ワールドトレードセンターも健在だ。

彼がこの光景を見るのは。、実に約２０年ぶりの事だ。祖国に帰ってきた、彼はそれだけでも十分嬉しかった。

しばらくすると、立香の元にＣＡが朝食を運んでくる。

最初に食事が運ばれてきた時、立香は大いに驚いた。なにせ彼にとって機内食と言えば、プラスチック製の容器に入った安っぽい物が全てであり、まさか皿に盛り付けられた料理が航空機の中で出されるとは夢にも思っていなかったのだ。

朝食を食べ終え、食器が片付けられる。それからしばらくして、着

陸準備のアナウンスが流れる。立香は座席を元に戻し、シートベルトを締めた。
一佐は隣の座席で寝ているが、既にシートベルトを締めている。起こす必要は無さそうだ。
旅客機は高度を下げ、着陸する。着陸すると同時に機体が揺れ、旅客機は徐々に速度を下げていき、停止する。
「一佐……並木一佐。」
立香はシートベルトを外すと、一佐の体を揺する。しばらく続けていると、小さな呻き声を上げて一佐は目を覚ます。
「……ぇあ？　藤丸くん、もう着いたのかい？」
「はい、降りましょう一佐。あまり時間はありません。」
背伸びして座席から立ち上がった一佐と共に、立香は出口へと向かった。
入国審査を通過し、預けていた荷物を受け取り、税関を通過する。ロビーに到着すると、一佐は立香の方を向く。
「……さてと、私の管轄はここまでだ。後は君をスカウトした機関が君を迎えに来る。」
「一佐とはここでお別れ、という事ですね。」
「ああ。しばらくするとその機関の人間が来るから、その人間に着いて付いていくんだ。」
「了解しました。」
「それじゃあ。」
立香と一佐は互いに敬礼すると、一佐はそのまま出発ロビーの方へと向かう。
ふと、何かを思い出したかの様に、一佐は立香の方に振り返った。
「藤丸くん。」
「？　何でしょうか？」
「――――気を付けるんだよ。」
そう言うと一佐はそのまま歩いていき、出発ロビーの方へと姿を消した。
「気を付けろ、か。」

ベンチに座った立香は、一佐が最後に言った言葉の意味を探る。ただの注意喚起の言葉か、それとも、何か別の意味があるのか。
「……考え過ぎか。」
そう言って、立香は天井を見上げ、一佐のあの言葉をただの注意と受け取る事にした。
「――――そういえば、そろそろだったな。」
ふと、ローガンはある事を思い出した。
「――――俺が死ぬのは。」
今から数日後に、かつての彼――――ローガンは、イラクで戦死する。
かつての自分が死んだ瞬間、自身はどうなるのだろうか。立香は生まれ変わってしばらくしてからずっと、その事を考えていた。
ＳＮＳには彼の部下のアカウントがあった。おそらくはローガンもこの世界にいるはずだ。
もしその時がやってきたのなら、立香はどうなってしまうのだろうか。
「……やめよう、今更こんな事考えるなんて。」
どんな結果が待っていようと、立香はそれを全て受け入れるつもりだ。
――――だが何故なのだろうか。何故、彼だけがこうなってしまったのか。何故彼だけ取り残されたのか。何故――――自分を殺してくれなかったのか。
もし神がいるのなら、彼はこう問い質しただろう。
それに、彼にはもう一つ。知りたい事があった。かつて彼が死なせてしまった部下だ。
部下達は自身をを恨んでいるのだろうか。いつもそれが気になっていた。
彼は今尚自責の念に囚われていた。もしあの時、ああしていれば……だが現実はこうだ。
歴史にたら・ればなど無い。どれ程後悔しようとも、今は変えられないのだ。

彼もその事は理解していた。だからこそ後悔しているのだ。自分が間違えなければ、あんな事にはならなかったと。
ふと、立香は自身に近づいて来る複数の足音に気付いた。
足音の聞こえる方に目をやると、3人の男が立香の方を見ていた。
「君が藤丸立香、だね。」
「……アンタらが例の機関の人間か？」
「そうだ。待たせてすまなかったね。」
男の内の一人、リーダー格と思われる男が、立香に手を差し出す。
立香は立ち上がってその男と向き合い、笑顔で差し出された手を握った。
立香とて、目の前の男達を信用している訳では無い。だが、彼等がどういう組織なのか、どの様な力を持っているのかも分からない状態では、ある程度友好的な関係を保った方が良いと感じたのだ。
「さあ、こちらへ。」
そう言って、男達は立香を連れ、ターミナルの出口へと向かう。
ターミナルを出ると、彼等の物であろう黒塗りのセダンが止まっている。立香を含めた四人が車に乗ると、車はエンジンをかけ、動き出した。
「これを飲むといい。」
隣に座った男は、立香にペットボトルに入った水を渡す。
「……ありがとうございます。」
立香は会釈すると、恐る恐るペットボトルに口を付け、水を飲み出す。
飲んだ印象としては、何の変哲も無い水で何も味はせず、おかしいという訳ではなかった。
立香がそのまま水を飲み干すと、男達は驚いた表情を浮かべた。
「どうかしましたか？」
「っあ、いや、別に、何でもないよ。」
男はそう言ったが、明らかに何か焦っている様な様子になったのに立香は気付いた。
一体何を隠しているのだろうか。まさか、さっきの水に何らかの細

工でも仕掛けていたのか。
立香は彼等への疑いの念をさらに強める。その様子に気付いたのか、男は深刻そうな表情を浮かべた。
「すいません。目的地を聞いていなかったのですが――――――」
立香が目的地を問おうとした瞬間、隣の男が掌をこちらに向ける。
「Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ），Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ），Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ）……」
男がドイツ語で何かを呟き始めた瞬間、立香は自身の意識が遠のき始めるのを感じた。
そのまま立香は意識を失いかけるが、右手を噛む事で何とか堪える。
「あっ……はっ……貴様……一体何を……！」
「っ！　Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ）！　Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ）！　Ｓｃｈｌａｆｅｎ（眠れ）！」
男は怒鳴る様に先程の単語を唱え始めると同時に、意識が再び遠のき出す。
『……すまないね、藤丸君。これも必要事項なんだ。』
「――――――クソッ――――――！」
その言葉を最後に、立香は意識を失った。

――――――

赤ん坊の泣き声がする。しかしその泣き声は、普通のそれよりも遥かに弱々しいものだ。
『所長、遂に成功しましたね。』
整然とした女性の声が聞こえた。
『ああ、これで我々の――――――計画もやっと始動できる。これから頼むぞ、――――――。いや、――――――。』
次に聞こえて来た男性の声には所々ノイズのようなものがかかり、うまく聞き取れなかった。
『さて、次は融合に使う――――――の召喚だな。目星は――――――』
『はい、既に――――――で決定しています。』

『そうか――――――――すぐに召喚を――――――――――――――――――』

ノイズは更に酷くなり、遂には何も聞き取れなくなる。

そのまま、その声は消えてしまった。

――――それにしても、こんなただの一般人が、お前の睡眠魔術を耐えるとはな。

――――ああ全くだ。こいつ、本当にただの一般人なのか？

――――身辺調査は怠ってないさ。何の変哲もない、ただの一般人だ。

――――へえ、それでいてあれか、末恐ろしい奴だな。

聞き覚えのある声が聞こえた事で、立香の意識は再浮上し始める。

「――――あ――――ここ、は？」

立香は目を覚ますと、目の前に自身を眠らせた男が座っていた。

「――――！　お前は――――！」

「落ち着いてくれ、藤丸君。落ち着いて、我々の話を聞くんだ。」

男はそう言ったが、立香は目の前の男に飛び掛かろうとする。だが、立香は椅子に縛り付けられるようにシートベルトを締められていたために、動くことが出来なかった。

男は指を一本立てる。

「まず一つ目。手荒な真似をしてすまなかった。機密保持のためだったんだ。」

「……ハッ。その手荒な真似のせいで、アンタ達の信用度は地に堕ちましたけどね。」

男の説明に、ローガンは毒吐く。

その態度が気に食わなかったのか、男は眉をピクリと動かすが、表情は変えずにそのまま話を続けた。

「そして二つ目。計15時間のフライトは、もうすぐ終わる。」

男は指を二本立てる。

「……そういえば、ここは……」

そう言って立香は辺りを見回す。見覚えのある狭いキャビンに、

ローターの音が響く。窓から外を見ると、主翼の先につけられた大きなローターが見えた。
立香は、この航空機を知っている。
「……オスプレイ？」
「ほう、よく分かったね。」
そう、ここはＶ―２２垂直離着陸機、通称オスプレイのキャビンだ。
両翼端にあるローターの向きを変えることで、垂直離着陸を可能にするティルトローター機と呼ばれる航空機であるオスプレイには、様々な任務への兵員輸送の為に彼も何度か乗ったことがあった。
立香はこの狭いキャビンに、懐かしさを覚える。
「そして三つ目。」
男は右手の指を三本立てる。
「外を見てみるといい。」
「……なっ⊠」
立香は窓に目をやり、そして目を見張る。
その様子を見た男は、得意げな様子で手を広げる。
「ようこそ、人理継続保障機関　フィニス・カルデアへ。」
外には、雪山の中に巨大な白い建造物があった。その建造物は、山に半分埋まっているような形状になっている。その内の露出している部分だけでも、米国防総省（ペンタゴン）の半分程の大きさだった。
少なくとも、ここがアラスカやヒマラヤでない事は立香にも理解できる。こんな施設がある雪山など、公には知られていない。
「私はハリー・茜沢・アンダーソン。君をスカウトした張本人だ。茜沢と呼んでくれ。」
「……どうも、ミスター茜沢。」
茜沢名乗った男は、座席から立ち上がって立香に手を差し出す。立香は渋々その手を握る。
「もうじき着陸するので、座席に戻ってシートベルトを締めて下さい。」
操縦席に座っていたパイロットが、キャビンにいる立香達に向けてそう伝える。茜沢は座席に戻ると、シートベルトを締めた。

「藤丸くん、これを。」
隣にいた男が、立香に防寒用のジャンパーを渡す。
「着ておくといい。」
確かに外は猛吹雪だ。この様子では、氷点下１０度を下回っているのは確実だろう。
立香がジャンパーを着ると同時に、オスプレイはぐらりと小さく揺れた。
「ＶＴＯＬ（垂直離着陸）モードへの変更完了。このまま降下、着陸する。」
パイロットがそう告げると、機体は緩やかに降下し始める。そのままオスプレイは高度を下げ続け、着陸した。
「着陸完了、ランプドア開放開始。」
パイロットの言葉と共に、ランプドアを開け始める。
開くと同時に強烈な冷気が飛び込んでくる。まるで死神の鎌だ。何の準備も無しでは、即座に命を刈り取られしまうだろう。
立香はシートベルトを外すと、ランプドア――――ではなく、操縦席の方へと向かう。
「お勤めご苦労様です！」
立香はそう言うと、パイロット達に向かって敬礼する。パイロット達は一瞬ポカンとするが、すぐに敬礼を返した。
敬礼し合ったのを確認した立香は小さく笑うと、そのままランプドアの方へと向かう。
その様子を見ていたパイロット達は、顔を見合わせながら首を傾げた。
「こっちだ！」
オスプレイから降りた四人の内、一人が先導するように歩き出し、茜沢や立香達もそれに追随する。
それと同時に、ローターと主翼をたたんだオスプレイが、突然地面の下に消える。
「なんだ……？」
立香が地面の方を見ると、ヘリポートと思しきものがエレベーターの様に下降していくのが見えた。

「へえ、なるほど……中々ハイテクじゃないか。」
おそらく地下に格納庫があり、そこにオスプレイが保管されているのだろう。
「あ？　あの連中は一体どこに行った？」
三人の事を思い出し後ろを振り返ると、立香が見ていない内に３人の姿はすっかり遠のいていた。慌てて追いかけると、例の建物の外壁と、施設への出入口らしき、ゲートのようなものが見えて来る。
戦車でも入れるほど巨大なゲートは重々しい隔壁で閉じられている。Ｃ４爆薬を１０ｋｇ以上使用しても、この壁はビクともしないのだろうと立香は考えた。
先導していた男がゲートの側に何かをかざすと、ゲートは音を立てながらゆっくりと開く。彼の腕をよく見ると、腕時計の様なものが装着されている。
「さあ、入るんだ。」
専用の端末なのだろう。立香はそう考えながら、他の三人について行った。
「……暗いな。」
中は照明が付いておらず、開いたゲートから入る光で、足元ぐらいしか見えなかった。暫くするとゲートが閉まり出す。ゲートが完全に閉まると、暗闇が辺りを包んだ。
ローガンは暗闇があまり好きでは無い。ゲリラはこの様な暗闇を味方に付け、襲って来る。暗視装置無しでは何処に何が居るかも分からないのだ。
ゲートが閉まってから1分もしない内に、突然照明が点いた。状況確認の為、辺りを見回す。四方の壁は清潔そうな白色で統一されており、前方には後ろのそれと同じ様なゲートがあった。ゲートの側には何かの装置が取り付けられている。
「それじゃあ藤丸君。我々が先にゲートを通る。手順は、あの装置に手を入れるだけで良い。
我々が行った後は1人になるが、大丈夫かい？」
「ええ、大丈夫です。」

「分かった。後の事は装置から渡される端末で指示される。それじゃあ我々はこれで…」
そう言って3人は順にゲートに入って行った。
「……さてと、装置に手を入れるだけか。さっさと済ませて中に入るか。」
立香はゲートの側に近づくと、装置に手を入れる。短い電子音が鳴り、認証が始まる。
『――――塩基配列　ヒトゲノムと確認
――――霊器属性　中庸・秩序――――――――訂正　善性・中立と確認』
霊器属性、という物は如何なるものか。立香には分からなかった。認証はまだ続いている。
『ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。
ここは人理継続保障機関　カルデア。』
人理保障継続機関――――一度も聞いた事もない機関名、どのような機関かも分からない。
自分でもよくこんな所に来ようと思ったのか、立香は不思議でならなかった。
『マイクに向かって名前を言って下さい。』
そう発したスピーカーの隣を見ると、『Ｍｉｃｒｏｐｈｏｎｅ』の文字の下にピンポン球くらいのマイクがあるのを見つけた。
「……藤丸立香だ。」
立香はマイクに向かってもう一つの名前を発する。結果は――――
『認証しました。』
どうやら大丈夫なようだ。立香は安心するようにため息を吐く。
『指紋認証　声帯認証　遺伝子認証　クリア。
魔術回路の測定……完了しました。』
魔術回路、これが例の魔術師の才能というものだろうか、と立香は自身の手を見つめる。
魔術とは基本的に非現実的なものだ。立香も並木一佐にそれを知

らされるまでは、つゆほど信じていなかった。
『登録名と一致します。貴方を霊長類の一員である事を認めます。
はじめまして。貴方は本日　最後の来館者です。どうぞ善き時間をお過ごし下さい。』
装置から手を出すと、腕時計型の端末が装着されていた。
その端末は、どこからどう見ても、林檎のマークの会社の物ではあるが――――気にしたら負けだと思い、立香は心の奥底にその疑問を押し込む。
更に稼動音が聞こえた為、直ぐ横を見ると、何か――――白い服の様なものが、壁から突出した引き出しの中に入っていた。
「これを着ろって事か？面倒だな……」
軽く舌打ちすると、立香は服を着替え始める。認識票はそのまま付けておくつもりだ。
立香は嫌がらせにと、私服を乱雑に突っ込むが、引き出しは御構い無しに壁に引っ込んだ。
認証が終わり、ゲートが開く。ゲートの向こうに行くと、エレベーターが見える。扉は……閉まっていた。
『……申し訳ございません。入館手続き完了まであと１８０秒必要です。』
予想外の足止めを食らった立香は、はあと面倒臭そうにため息を吐く。
彼自身、待たされる事自体は苦ではなかったが、ここまで来て足止めを食らうとは思わなかったのだ。
『その間、模擬戦闘をお楽しみください。』
「……ん？」
突然流れた模擬戦闘という言葉に、立香は思わず聞き直してしまう。
「模擬戦闘って一体何の――――」
『レギュレーション：シニア
契約サーヴァント：セイバー　ランサー　アーチャー』
「おいおいおいおいちょっと待て！」

『スコアの記録はいたしません。
どうぞ気の向くまま、自由にお楽しみください。』
立香が慌てている間にも「模擬戦闘」の準備は着々と進んでいる様だった。
彼の周辺が、電子的なもので包まれ始める。
『英霊召喚システム　フェイト　起動します。１８０秒の間、マスターとして善い経験ができますよう。』
「待てって言ってるだろうがぁ！」
叫び声も虚しく、立香は白い光に包まれた。

「……ああクソ、一体何が――――⁉？」
立香はゆっくりと目を開き、驚愕する。
真っ白な部屋は見渡すかぎりの大草原へと変わっていた。
「一体何が――――ん？」
そこで立香は、前方に四つの人影がある事に気が付く。
「誰だ……あいつら？」
四つの人影の内、三つははっきりと確認出来た。
弓を持った中東系の男に、赤い槍を持った半裸の男。そして、鎧を着た中性的な顔立ちの少年騎士…では無く少女。
３人は各々の武器を構えながら、もう一つの人影と退治している。
その人影は……いや、あれは人ではない。巨大な体躯とそれを覆う岩の皮膚。
「なんだ、あれは……⊠」
まるで神話に出てくる怪物だ。特殊部隊として世界中を回って来た彼でも、あんな物は見た事も聞いた事も無かった。
更によく見ると、それの頭上には『訓練用ゴーレム』という文字が浮かんでいる。どうやら、これが模擬戦闘というものらしい。
だが、あんな化け物をどうやって倒せばいいのか。今の立香には、ＡＴ―４どころかナイフすらない。丸腰である。
「クソ！　一体どうする――――？」
立香が焦っていると、腕に付けられた端末から再び音声が聞こえ

る。
『模擬戦闘を開始します。３騎のサーヴァントに命令を出して下さい。』
「――――サーヴァント？　あの３人の事か？」
立香はもう一度三人の方を見ると、彼らの上にも文字が浮かんでいるのを見つけた。
少女にはセイバー、半裸の男にはランサー、弓を持った男にはアーチャーと、それぞれ別々の文字が浮かんでいる。
弓兵（Archer）に槍兵（Lancer）、そして剣騎（Saber）。
彼は中世の戦闘教義（ドクトリン）や戦術は知らなかったが、やるしか無かった。殺らなければ死ぬ、彼は戦場でそれを嫌という程思い知っていた。
立香は頭の中にある、火器類無しの状態における白兵戦の戦術を次々引っ張り出す。その内の一つを、なんとか思い出す事に成功する。
「……よし！　ランサー、敵と正面からかち合え！　アーチャーは後方から援護！　セイバーは……敵が怯んだところに叩き込め！」
立香の指示を三騎は無言で了承し、跳躍する。
ゴーレムの懐に入り込んだランサーは、残像が見える程の速さで槍を何度も突き出す。
アーチャーの矢の威力も凄まじい。矢の一本一本が、Ｍ２重機関銃から発射される１２．７×９９ｍｍ徹甲弾の様に、ゴーレムの皮膚を削っている。
最も凄まじいのはセイバーだ。彼女が剣を振るうごとに、ゴーレムの皮膚がクッキーの様に砕かれて行く。
ゴーレムも攻撃を繰り出すが、ダメージを受け弱っているのか、空を切るばかりだ。
だが、当たればひとたまりも無いだろう。その証拠に、拳を振るわれた地面は直径１ｍ程のクレーターが出来ていた。
しかしいくら傷つこうとも、ゴーレムは血を一滴も流す事はない。あの岩の皮膚はゴーレムの構成物であって、本体ではないようだ。だが動く物なら必ず弱点がある。戦車の上面・底面装甲や、人間の脳や

心臓の様にだ。
立香はゴーレムの弱点を、最も装甲の厚いであろう胸部――――その中心だと予想する。人型であるなら、弱点も体幹部にあるはずだと考えたのだ。
「アーチャー！」
呼ばれた弓兵が立香の方向を振り向く。
「あいつの中心部に一番強い奴をぶち込め！　セイバー！　お前はアーチャーの攻撃後に、その剣をぶち込んでやれ!!」
アーチャーは頷くと弓を引いて力を貯め始める。弦を最大限まで伸ばしたアーチャーの周りからは、奇妙なオーラが出現している。
攻撃が来ると察したであろうゴーレムも走り出し、アーチャーに向かって突っ込んで来た。
「アーチャー、逃げろ！」
立香がそう叫ぶがアーチャーは動かず、ゴーレムに照準を合わせ続けている。
ゴーレムがアーチャーとの距離を詰め、あと５ｍとなった瞬間、アーチャーが矢を放った。
音の壁を突破した矢は、凄まじい音を上げてゴーレムに着弾する。
皮膚が砕かれ、晒された体内には直径２０ｃｍくらいの光る結晶の様なものが見える。
あれが急所だ。立香はそう確信した。
「セイバー、今だ！　殺れ！」
急所を晒された事でヤケになり、御構い無しに突っ込んで来るゴーレムの正面に少女は飛び出し、剣を振り上げる。
振り上げた剣に、光る粒子のような物が集まる。
剣が粒子で満たされ、黄金に輝いた瞬間、セイバーは何かを叫びながら、剣を振り下ろした。
「――――――――！」
剣からは金色の光線が、ゴーレムに向けて打ち出される。その光線をもろに受けたゴーレムは蒸発し、光線はそのまま天高く上がった。
「……すげえ」

その光景に、立香は思わず感嘆の声を上げる。まさか剣一本からあんな光線が出るとは、誰が予想できようか。
あれ程の威力を人間が生み出すには、Ｍｋ８２汎用爆弾（５００ポンド爆弾）を満載したＢ―５２戦略爆撃機を持って来ないと再現できないだろう。
そのまま感嘆していると、立香は再び自分の意識が薄れて行くのを感じた。
また何かされたのかと立香は考えたが、今回のそれは麻酔とは少し違うものだった。
『模擬戦闘、終了しました。』
その言葉と同時に、ローガンは意識を保てなくなった。

―――――――――――――――――――――

「フォウさん……待って下さい。」
ここはカルデア内部。とある廊下にて、少女は自分の前を走る白い小動物を追いかけている。
目の前の小動物は一体どこへ向かっているのだろうか、そう考えている内に、彼女は小動物を見失ってしまった。消えていった方へ向かうと、既に走るのをやめて、傍にある何かを舐めている件の獣がいた。
「フォウ……？キュウ……キュウ？フォウ！フー、フォウ！」
よく見てみると、その小動物が舐めているものは倒れている人だった。年齢は彼女より少し上のようで、カルデアの魔術礼装を着ている。
暫く観察していると、その青年は小さく呻き声を上げ瞼を開け始めた。

意識が急浮上する。立香は冷たい床に倒れていた。
確か、模擬戦闘が終了した直後に、自分は気を失った。その前後は――――思い出せない。
立香は模擬戦闘の事は覚えていたが、それその前後の記憶がポッカリと無くなっていたのだ。彼は覚醒しきっていない［［ｒｂ：自分の身体　＞　ふじまるりつか］］に鞭打ち、顔を上げる。

その直後に、立香は自分を観察していた少女と目が合う。しかし彼の脳は覚醒しきっておらず、すぐには状況を飲み込めなかった。
彼と目が合った少女は、落ち着いた様子でゆっくりと口を開いた。
「……あの
朝でも夜でもありませんから、起きてください、先輩。」

――――これが、彼と少女の物語の始まりだった。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．４『人理継続保障機関』

「……あの

朝でも夜でもないので、起きてください、先輩。」

少女は廊下に倒れていた青年――――藤丸立香に向かってそう言った。

立香――――もといローガンは何の事だか理解出来なかったが、それが自分に向けられた言葉だと気付いた。

だが頭より先に体が動いた。

「うおっ⁉？」

情けない声を上げて彼は反射的に後ろへと飛び退く。しかし覚醒したばかりの身体は言う事を聞かず、尻餅をついた。

幸いにも少し距離をとった事で、目の前にいる少女の姿を確認する事が出来た。

薄い桃色の髪、ワンピース風の服の上に安っぽいパーカーと赤いネクタイを着ている。片目は髪で隠れており、眼鏡からは曇りのない瞳が覗いていた。

１秒遅れて立香の脳は情報の処理を始める。まず最初に根本的な疑問が浮かぶ。彼女は誰なのか。

「君は……？」

そう彼女に問い掛ける。それを聞いた少女は顎に手を当て考える仕草をし始めた。

「いきなり難しい質問なので、返答に困ります。名乗るほどのものではない――――とか？」

「……は？」

予想だにしない答えに、立香は思わず呆けた声を出す。

「いえ、名前はあるんです。名前はあるのです、ちゃんと。でも、あまり口にする機会がなかったので……印象的な自己紹介ができないとうか……」

……どうやら名前は聞き出せそうにないらしい。

そう思い、立香はもう一つの疑問を彼女に聞こうと考えた。

「……それじゃあ、ここは？」
もう一つの疑問、それはこの施設の事だった。今の立香は、模擬戦闘前後の記憶がスッポリと抜け落ちている。その模擬戦闘すらも、記憶があやふやになっているのだ。
「それなら簡単です。」
そう言って少女は先程とは打って変わって冷静になった。
「ここは、人類の未来をより長く、より強く存在させる為の観測所――――――人理継続保障機関　　カルデアです。」
カルデアという単語を聞いて、立香はようやく記憶を取り戻した。防衛省にて、並木一佐に伝えられた事、ニューヨークで気絶させられ、ここまでオスプレイで運ばれた事。そして、サーヴァントを指揮して勝利した模擬戦闘の事。
何故これ程の出来事を忘れていたのか、立香は不思議でならなかった。
「とりあえず、この先にベンチがあるので移動しましょう。先輩を床に座らせたままではいけません。」
「……っあぁ、分かった。」
そう言って歩き出した少女の後に、立香は追従していった。
彼女の後を追いながら、立香は現在の状況を整理し始めた。
ここはカルデア。人理継続保障機関という胡散臭い名前だが、最新鋭の垂直離着陸機であるオスプレイを使用している事から、かなり巨大かつ影響力の高い組織であると、立香は予想している。
何より、こんな文明から隔絶されたような雪山の中に所在している時点で、普通の施設ではないのは誰の目にも明らかだった。
これ程の施設が衛星等に発見されない理由は、立香には簡単に想像がついた。国連や各国が揉み消しでもしたのだろう。
そうでもしなければ、今頃この施設は安っぽいオカルト雑誌の一角どころか、明日の朝刊の一面をを飾る事になる。
「……先輩、もうすぐ着きます。」
あれこれ考えながら歩いていると、少女がそう言って前方を指差す。そこには、白いベンチが置いてあった。

ベンチの側には観葉植物と自販機が置いてあり、壁に設置されている液晶画面には太陽系の惑星軌道のような映像が流れている。
「何か飲み物を買っていいか？」
「飲み物ですか？それなら、そちらの自販機を自由に使って下さい。」
そう言って、少女は近くに設置されていた自販機を手で指す。
「ああ、済まない。」
立香は少女に会釈すると、その自販機に向かう。
支給された服のポケットに入れて置いた1ドル札を自販機に二枚入れて、ミネラルウォーターのボタンを押す。それと同時にガコンと音を立て、ペットボトルが出てきた。
ミネラルウォーターを取り出し、少女の隣に腰掛ける。栓を開けて水を飲むと、ボンヤリとしていた意識が少しハッキリした。
「落ち着きましたか？」
「悪いね。ここに入る時に、模擬戦闘を受けた事までは覚えているんだが……」
「[[ｒｂ：霊子　＞　りょうし]]ダイブですね。慣れていないと脳に負担が掛かるそうなので……」
霊子ダイブ、というまた聞いた事のない単語が現れた。恐らく魔術関連の言葉なのだろう。立香はそう思い、深く追求しようとは思わなかった。
「なるほど、それで俺は通路のど真ん中で爆睡してた訳か。」
「はい、すやすやと。教科書に載せたい程の熟睡でした。」
「……お恥ずかしい限りだ。くそ、まだ頭の奥がガンガンする。」
立香は痛そうに頭を抱えた。覚醒してからしばらく経ったのにも関わらず、立香の頭は未だに鈍い痛みに襲われていた。
「表層意識が覚醒しないまま行き倒れになった所を、フォウさんが見つけた……といった経緯でしょうか？」
「……フォウさん？誰だそれ？」
「フォウ！キュー、キャーウ！」
そう少女に聞くと、足元から可愛らしい鳴き声が返ってくる。声の聞こえた方向を見ると、白い小動物がちょこんと座っていた。

「……失念していました。あなたの紹介がまだでしたね、フォウさん。」
「フォウさん？こいつがそのフォウさんって奴か？」
フォウさんと呼ばれたその小動物は、ベンチを器用に使って少女の顔に飛びつき、そのまま肩に乗ってしまう。顔に飛び込まれた時に何かあったのか、少女は少し痛そうに鼻を摩っていた。
「大丈夫か？」
「はい。こちらのリスっぽい方がフォウさん。カルデアを自由に散歩する特権生物です。」
彼女はそう言うと、指でフォウを撫でる。
「わたしはフォウさんに誘導されて、お休み中の先輩を発見したんです。」
直後にフォウは少女の肩から、立香に飛びつく。
「うおっと！」
立香は反射的に払い除けようとするが、それよりも先にフォウは降りて何処かに行ってしまった。
「…あのように、特に法則性もなく散歩しています。」
「見たことのない生物だったな…」
「はい。わたし以外にはあまり近寄らないのですが、先輩は気に入られたようです。」
「え？」
気に入られた、という言葉に立香は少し戸惑った。
「おめでとうございます。カルデアで二人目の、フォウさんのお世話係の誕生です。」
「…あ、ありがとう。」
ハハハ、と立香は苦笑いを浮かべながらそう言った。ここに来て初めて任命された仕事が、まさか謎の小動物の世話とは夢にも思っていなかった。
もちろん、冗談の類だとは思うが。
「ところで、先輩もレイシフトのために集められたマスター適性者のお一人なんですか？」

どうやら彼女は立香について知りたいようだ。彼はどうしようかと少し考えた。
彼女とは初対面であり、まだ名前も知らない。この状況で信用しろと言われても、無理な話だ。
だが彼女は普通の人間とは明らかに違っている点があった。
目だ。一点の曇りもない純粋な目。世界の、人間の残酷さを知らない赤ん坊のようなその目を、彼は信じる事にした。
「そうらしい。日本の士官学校に合格した時に言われたんだ。君には世界を救う力があるとな。
最初はとても困惑したが、世界を救うという目的に賛同したんだ。若気の至りって奴かもな――――ところで、レイシフトってのは何なんだ？」
その言葉を聞いた少女は、酷く驚いたように見えた。レイシフトというのはそれほど重要なものなのだろうか。
「まさか、何をするのか分からないままここへ？」
「そうなんだよな……俺にしか出来ないって聞いたら是が非でも行かなければって思ってな。」
「なるほど。斬新ですね。」
「はは…そうか？」
少しの間の後、少女は真剣な顔立ちになり、この施設の事を説明し始めた。
ここカルデアは、人類史をより長く、強く存続させるために魔術・科学の区別なく研究者が集まった研究所にして観測所だ。
その研究の最たるものが、擬似地球環境モデル・カルデアスの開発。星に魂があると定義し、その魂を複写して作成された擬似天体、簡単に言うと極小の地球のコピーだそうだ。
このカルデアスに文明の光が灯っている限り、人類史は１００年先の未来を保障される。しかし半年前、突然その光が不可視状態になったのだ。
光が途絶えた、つまり文明が途絶えたという事。
観測の結果、人類は２０１６年１２月をもって絶滅する事が証明さ

れてしまった。
　言うまでもなく、たったの一年半で人類が絶滅するなどという事は物理的に不可能だ。全面核戦争や地球規模の自然災害でも、一瞬で人類を死に至らしめる事は出来ない。
　カルデアは今回の事件の原因が過去にあると判断。
　過去２０００年まで情報を洗い出した結果、空間特異点Ｆ――――２００４年の日本のとある地方都市に、２０１５年までの歴史に存在しなかった〝観測できない領域〟が発見された。
　カルデアはこれを人類絶滅の原因と仮定し、霊子転移（レイシフト）実験を国連に提案、承認された。
　レイシフトとは人間を霊子化させ、過去に送り込み、事象に介入する行為――――簡単に言えば、過去へのタイムスリップだそうだ。
　そうして過去にタイムスリップし、未来消失の原因を究明・破壊する。
「――――というのが、今回カルデアが行おうとしているレイシフトの概要です…先輩？」
「…っああ、悪い。話の規模がデカすぎてボーッとしてた。」
「驚きましたか？」
「勿論さ。あと一年半で人類が絶滅するなんて、まともな奴が聞いたらすっ飛ぶぞ。
　……それにしても国連とはな。我ながらえらい話に関わったもんだよ。」
　やはり人類絶滅というのは誰であろうと防ぎたいのだ。そこに国境などというものは無い。無能と言われる国連でも、このような事ができるのだ――――裏を返せば、このような事態が起きない限り人間は団結できない、ということの証明にもなるが。
　例を挙げるとするなら、第二次大戦時の連合国だ。ナチスがいる間は協力しあっていたが、その後どうなったかは言わなくてもわかるだろう。
「――――あ、そうだ。」
　天井を向きながら思考していた立香は、何かを思い出したかのよう

に少女の方を向き、そっと手を差し出す。
「え……？」
「自己紹介、まだだったろ？　俺は藤丸立香。印象的な自己紹介じゃないが……よろしく頼む。」
立香は右の右端を釣り上げ、そういった。
少女が恐る恐る手を出すと、立香はその手を掴み、ガッシリと握手する。握手された少女は驚いた表情を浮かべ、一言も喋ろうとしなかった。
「……嫌だったか？」
立香は手を離した後も、手を見ながら黙りこくっている少女を心配し、声を掛けた。それを聞いた少女は、ハッとしたように顔を上げた。
「いえ……こういうのは初めてだったので、ちょっと感慨深かったと言うか……」
「……やっぱり面白いな、アンタ。」
彼女が少し微笑んだのを見て、立香も思わず口元が緩んでしまう。
もしもかつての彼に子供がいたら、彼女ぐらいの歳になっていただろう。彼は少女の事を、いる筈のない娘と重ねる。
「ところで、アンタはここに来て何年経つんだ？」
「……2年です。」
「なんだ、それならそっちが先輩じゃないか。」
「いえ。私からすると皆さん先輩なので……」
何か不味かったのか、少女は少し焦るように言う。立香は少女が、何か隠しているようにも感じたが、人間誰しも大なり小なり隠し事があるものだ。
そこに彼が介入する権利はない。そう思い、彼女のことを詮索するのは止めた。
「……それじゃあ最後に一つだけ、アンタの名前は？また名乗る程の者ではない、とかはやめてくれよ。」
そう聞くと、彼女は酷く困ったような表情をして、少し視線を下げた。
「――――――私の、名前――――――」

「マシュ」
突然、何者かの声が聞こえる。突然の出来事に立香は素早く振り向く。振り向いた先にはこちらに向かって歩いてくる男性がいた。
身長は立香より一回りほど高く――――昔の彼よりかは低いが――――緑を基調とした１９世紀の英国紳士風のスーツに身を包んでおり、人の良さそうな表情を浮かべている。
「あ、レフ教授。」
呼ばれたであろう少女――――マシュはその男をそう呼んだ。教授という肩書きのようだが、この施設は教育機関も兼ねているのだろうか。
「マシュ・キリエライト、そこにいたのか。
だめじゃないか、断りもなしで移動するなんて。そろそろ、マスター適性者のブリーフィングが始まる。急いで管制室に……」
レフと呼ばれた男はこちらに近づきながら言葉を続けようとしたが、立香の姿を見るとなぜか足を止める。
「君は……？」
彼は腕の端末を起動すると、何かを調べ始める。
「ナンバー４８……そうか、一般採用の新人さんだね。私はレフ・ライノール。ここで働かせてもらっている技師の一人だ。」
レフはそう言って、立香に小さく会釈した。それを見た立香も同じように会釈する。
「藤丸立香君だね。ようこそカルデアへ。歓迎するよ。早速だけど、訓練期間はどのくらいなんだい？」
「…お恥ずかしながら、訓練らしい訓練は一度しか受けていません。」
訓練、と聞いて思い浮かぶのは入館時に受けた模擬戦闘のみだ。彼が受けた訓練は実質それだけという事になる。
その旨を伝えると、レフは小さく驚いたような表情を浮かべる。
「という事は、まったくの素人なのかい？」
そう言うとレフは何かを思い出したようで、はっとした表情になった。
「そういえば、一般採用は数合わせのための手段だったな……申し訳

ない、配慮に欠けた質問だった。」
「お気になさらないで下さい。そういうのには慣れてますんで。」
彼はかつて、一兵卒から士官に登り詰めた。そのため、一部の士官学校卒業者から影で色々と言われる事も少なくなかったのだ。
「そうかい？まあ悲観しないでくれ。今回のミッションには君たち全員が必要なんだ。」
レフはそのまま話を続ける。
「魔術の名門から３８人、才能ある一般人から１０人……なんとか４８人のマスター候補を集められた。
これは喜ばしい事だ。この２０１５年において霊子ダイブが可能な適性者すべてをカルデアに集められたのだから。それはそれとしてだが……」
彼は立香達の方を見ると、少し心配そうな顔をした。
「急がなくても良いのかい？」
「何がですか？」
「ブリーフィングだよ。遅刻したら、一年は所長に睨まれるからね。今後、君が平穏な職場を望むなら急いだ方がいい。」
「はあ⁉？」
突然舞い込んできたブリーフィングの話に立香は困惑した。しかも遅刻したらここの最高責任者であろう「所長」に睨まれるというオマケ付きだ。
新兵が配属初日から遅刻してきたら、上官からの印象も悪くなる。そうなると何が起こるか、言わなくても分かるだろう。彼としてもそれだけは避けたかった。
「レフ教授！　そのブリーフィングってどこで――――」
「こっちです！」
「おわっ⁉？」
マシュは彼の腕を掴むと素早く走り出した。しばらく走っていると、エレベーターのドアが見えてきた。
「ここからなら、ブリーフィングが行われる管制室まで最短で行けます！」

彼女が立ち止まってボタンを押すと、すぐにエレベーターはやって来た。
「早く行きましょう、先輩！」
「あ、ああ。」
エレベーターの中に駆け込み、ボタンを押すと同時にレフが閉まりかけのドアから入り込んで来た。
「…頼むから放って行かないでくれよ。」
彼は額を拭うとホゥとため息をつく。彼には申し訳ないが、マシュは彼の事を完全に失念していたようだった。
扉が閉まると、エレベーターは下降し始める。どうやらその中央管制室は地下にあるようだ。地下にも施設はあると予想はしていたが、まさかここまでの規模とは立香も予想できなかった。
このような巨大な建造物を建造し、そして隠し通すのに一体どれだけの労力を費やしているのか。あまりに途方も無いであろう努力に、立香は心の中で感心する。
「レフ教授。私もブリーフィングへの参加は許されるでしょうか？」
唐突にマシュが口を開く。その言葉を聞いた立香は疑問を抱く。
彼女はここの職員の筈だ。それなのに何故、ブリーフィングの参加に許可が必要なのだろうか。
「うん？　まあ、隅っこで立っているぐらいなら大目に見てもらえるだろうけど……なんでだい？」
レフも聞き返す。しかし、彼女が参加するのには許可が必要、というのが前提の話だが。ここでの彼女の立場は、それ程低いものなのだろうか。
「先輩を管制室まで案内すべきだと思ったので。途中でまた熟睡される可能性があります。」
それを聞いたレフは少し苦々しい表情を浮かべながら、頭を掻く。
「……君をひとりにすると所長に叱られるからなあ……結果的に私も同席する、という事か。」
立香は、彼女とここの所長は相当険悪な仲なのかも知れないと考えた。しかし彼女はそれ程悪い人間には思えなかった。問題があると

したら、それは所長の方だろう。
「まあ、マシュがそうしたいなら好きにしなさい。藤丸君もそれでいいかい？」
二人の視線が一気に立香に向けられる。
彼自身、連いて来てもらう事には何の問題もなかったため、断る理由も無かった。
「はい。自分は全く問題ありません。」
そうは言ったものの、彼には一つ気になることがあった。
「……一つ聞きたいんですけど、彼女は何故自分を先輩と？」
マシュの先輩呼びの事だ。その事について聞くと、彼女は少し顔を赤らめる。
「ああ、気にしないで。彼女にとって、君ぐらいの年頃の人間はみんな先輩なんだ。」
自分ぐらいの年頃はみんな、と聞いた立香は不思議に思った。彼女はここに来るまで、人付き合いというものをした事が無かったのだろうか。
「でも、はっきりと口にするのは珍しいな。いや、もしかして初めてかな。」
レフも彼女の先輩呼びはあまり聞いた事がないらしい。彼は面白そうに笑みを浮かべる。
「私も不思議になってきたな。ねえマシュ。何だって彼女が先輩なんだい？」
そう聞かれた彼女は困ったような表情を浮かべ、何かを考え込んでいるようだった。
「…先輩は…人間です。」
「？」
謎の返答に、男二人は顔を見合わす。
立香が人間なのは当たり前の話だ。彼女はどういう意味で人間だと言ったのか、すぐには理解できなかった。
「……訂正します。正しくは人間らしい、です。」
その言葉を聞いた立香は、酷く驚いた顔をして体の動きを止める。

「ふむ。それは、つまり？」
レフがそう聞くと、彼女はそのまま言葉を続ける。
「ここにいる方々とは少し違うような気がします。全く脅威を感じません。
ですので、敵対する理由が皆無です。」
「なるほど！確かにカルデアの人間は一癖も二癖もあるからね！」
そう言って彼も彼女の意見に賛同する。しかし、当の本人は下を向いて何かを堪えるように震えていた。
「レフ教授が気に入るということは、所長のが一番嫌うタイプの人間という事ですね……先輩？」
その様子に気づいたマシュが声をかけると、立香は笑いを堪えるように、口元を覆った。
「フ、フフフ……俺が、人間？　……面白いな、アンタ。」
祖国のために悪魔の犬になると決心し、ひたすら任務を遂行してきた彼からすると、人間らしい、などという言葉は全く相応しくないものだった。
いや、ある意味相応しいかもしれない。冷酷で、残忍――――己の手を血で染め上げた彼は、正真正銘の人間だろう。
彼は心の中で笑う。その笑いは自分を人間らしいと言った少女への冷笑ではなく、残酷な本性を宿している自身への嘲笑だった。
「……失礼。気にしないでくれ。」
本人はそう言ったが、当の彼女は気にせずにはいられない。彼はなぜ、面白い、などと言ったのか、彼女には分からなかった。
その後の場の空気は最悪だった。場の空気を殺してしまった事を、立香は心の中で申し訳なく思う。皮肉は控えるべきだな、と立香は心の中で呟く。
エレベーター内にこのような空気が充満して、５分ほど経つ。やっとエレベーターが停止し、ドアが開いた。
「管制室までもうすぐだ。時間も無い。早く行こう。」
そう言ってレフが先導する。立香とマシュも彼についていく。無機質な廊下をしばらく歩いていくと、入館時に見たものと同じゲート

があった。そのまま近づくとゲートは自動的に開いた。
「ここが中央管制室です。先輩の番号は……一桁台、最前列ですね。」
突然、立香の視界が暗くなる。どうやらまだ完全に脳が覚醒した訳では無いらしい。
「一番前の列の空いているところをどうぞ。所長の真正面とは、素晴らしい悪運です。
……先輩？顔の色がすぐれないようですが？」
どうやら彼女も、彼の異変に気付いたらしい。彼の様子を心配して声を掛けた。
「……悪い、まだ頭が……」
立香は頭を押さえて、気怠そうな声でそう言う。
「シミュレーターの後遺症ですね。すぐに医務室にお連れしたいのですが……」
彼女は座席の前方、壇上にいる女性に目を向ける。年は立香と同じぐらいで容姿はそれなりに整っていたが、目つきは歴戦の指揮官のようの厳しい。
その女性はこちらを見るとキッと睨みつけた。
「どうやら無駄口は避けた方がよさそうだ。これ、もう始まってるようだからね。」
「……そうですか。」
それを聞いたマシュは残念そうに俯いた。
彼女にはここまで付き合ってくれた恩がある。立香もそれを蔑ろにするほど腐ってはいない。
「マシュ。」
彼はそう言って彼女を呼び止めて近づいた。
「ありがとう。それとさっき悪かったな。気に病まないでくれよ。」
そう言って立香は前方の座席に向かった。他の参加者からの睨むような視線が彼の背中に突き刺さるが、立香は気にせず進んだ。
空いていた席に座ると、女性は溜息をついて姿勢を正す。
「……時間通りとはいきませんでしたが、全員揃ったようですね。」
また視界が曇る。なんとか耐えているが、立香も限界が近かった。

もう何度も瞬きを繰り返している。
そんな事は御構い無しに、目の前の女性は話を続ける。
「特務機関カルデアにようこそ。所長のオルガマリー・アニムスフィアです。」
驚いた事に、ここの所長は女性だった。立香は壮年の高慢そうな男をイメージしていたが、全く正反対の――もっとも、高慢なのは予想通りだったが――人間だった事に驚いた。
あの年でここの所長となったのなら、それはもう天才と言われるほどの人間なのだろう。だがこれほどの組織のトップともなれば、相当の重責がのしかかる。高慢な態度になるのも頷けた。
「あなたたちは各国から選抜、あるいは発見された稀有な才能を持つ人間です。
才能とは霊子ダイブを可能とする適性の事。魔術回路を持ち、マスターになる資格を持つ者。
想像すらできないでしょうが、これからはその事実を胸に刻むように。
あなたたちは今まで前例のない、魔術と科学を融合させた最新の魔術師に生まれ変わるのです。
とはいえ、それはあくまで特別な才能であって、あなたたち自身が特別な人間という事ではありません。
あなたたちは全員が同じスタート地点に立つ、未熟な新人だと理解なさい。
特に協会から派遣されてきた魔術師は学生意識が抜けきっていないようですが、すぐに改めるように。
ここカルデアは私の管轄です。外界での家柄、功績は重要視しません。
意見、反論は認めません。あなたたちは人類史を守るためだけの、道具にすぎない事を自覚するように。」
その言葉に、立香以外の参加者たちはざわつく。
魔術の世界において家柄とは基本的なステータスであり、他の魔術師とは違うという誇りでもある――簡単に言うと、民族主義のよ

うなものだろう。
それを無視されるのはプライドの高い彼らにとって、存在意義を否定されるような物だ。
「……騒がしいですね。異論は認めないと言ったばかりですが？」
騒がしくなった参加者達を、彼女は黙れと言わんばかりに睨みつける。これで一応は静かになったものの、彼らは不満そうな態度を隠そうともしなかった。
「そこの君。さっき遅れてきた君よ。いま話した心構えについて、何か不満があるのかしら？」
気が収まらなかったからか、彼女の話の矛先は、目の前にいた立香に向けられた。
しかし当の本人は下を向いたまま、一言も喋ろうとしなかった。
「……えっと……目の錯覚……それとも疲れ目かしら……寝てる……なんてないわよね、いくらなんでも……」
困惑しながらも、確かめようと近づいた瞬間、一人の女性新入員が座席から立ち上がった。
「なによそれ、話が違うわ！　私たちは才能を評価されて集められたエキスパートです！　どうしてもと言うからこんな山奥までやってきたのに、絶対服従とかバカじゃないんですか⁉？」
「その通りだ、愚弄するにも限度がある！」
その女性に続いてもう一人、他の男性新入員も声を荒げる。
「魔術師にとって血筋は重要視されるものだ、それをないがしろにするなんて！
」
その言葉で会場内の不満が爆発する。大半の人間がオルガマリーに対して集中砲火を浴びせる。その姿はまるで高い金を出して手に入れたおもちゃを馬鹿にされた、金持ちの子供のようだった。
「静粛に、私語は控えなさい！　それだから学生気分が抜けていない、なんて言われるのよ！」
彼女も負けじと声を張り上げる。しかし一度火をつけられら彼らの勢いは止まらない。

「私は現状を打破する最適解を口にしているだけ、納得がいかないのなら今すぐカルデアを去りなさい！」
その直後に、彼女はニコリと意地の悪そうな笑顔を浮かべた。
「…もっとも、あなたたちを送り返す便はないけどね。標高６０００ｍの冬山を裸で降りる気概があるのなら、それはそれで評価しましょう。」
その言葉に彼らは一瞬で静かになる。ここの所長は彼女、つまりここでの彼女の権限は絶対なのだ。彼女がその気になれば、それこそ彼らにこの雪山で全裸下山チャレンジをさせる事など簡単だろう。
「結構、脱落者はいないようね。まったく、くだらない事に時間を使わせないで。」
面倒臭そうにため息をつくと、先程までの厳しい表情に戻り、話を続ける。
「わたしたちの、いえ、人類の置かれた状況がそれほど切迫しているものだと理解してほしいものだわ。」
本題はそこだ。人類の未来を守るという偉業。それを達成するためには血筋も何も関係ないはずなのだ。
「ほら。そこの彼を見習いなさい。反論も意見もない。従順で結構です。」
そう言って彼女は立香を指差した。それを聞いているであろう彼は先程と同じように顔を俯かせていた。
「……では話を続けます。いいですか、今日というこの日、我々カルデアは人類史において偉大な功績を残します。」
そうして、ブリーフィングが始まる。
その説明の内容は、マシュが立香に語った概要に演説用の話を付け加えたものだった。
演説を、誰もが静かに、しかし不機嫌そうに聞く。先程、彼女に言われた事を未だに根に持っている者が大半だった。
「さて――――ここまで説明すれば分かるでしょう。あなたたちの役割はこの特異点Ｆの調査。
今から１２年前の過去の日本に転移し、未来消失の原因を究明、こ

れを破壊する。
この作戦はこれまで例のないものです。何が待っているかは予測できません。
ですが世界各国から選抜されたあなたたちなら十分に可能だろう、と多大な期待が寄せられています。
上層部は一刻も早い原因究明を求めています。無駄に使う時間はありません。
これより一時間後、初のレイシフト実験を行います。仮想訓練はもう十分でしょう。
第一段階として成績上位者８名をＡチームとして、特異点Ｆに送り込みます。」
オルガマリーがある方向に手を向けると、そこには８人の男女が整列していた。先程彼女が言っていたＡチーム、それが彼等だった。
「後発組には伝えてありませんが、彼等はカルデアから選抜されたマスター適性者です。
Ａチームは一ヶ月前からチームとして機能しています。一人前の兵士、と言ってもいいでしょう。
彼等Ａチームが先行し、特異点Ｆにてベースキャンプを築き、後に続くあなたたちの安全を保証する。
Ｂチーム以下は彼等の状況をモニターし、第二実験以降の出番に備えなさい。
では人間を霊子に変換し過去に転写する量子の筐……クラインコフィンの個人登録に移ります。」
カルデアスの真下のプールのような場所から、空気が抜けるような音と共に筒状の装置が床から出現する。
装置は高さ３ｍ、幅は５０ｃｍから６０ｃｍ程で、人ひとりがやっと入れるようなスペースがあった。
「あれは一人一基のものですから換えはききません。各自、慎重に、丁寧に扱うように。
ＢからＤチームは登録が済み次第、コフィン内にて待機。Ａチームに問題が発生した場合に備えます。」

演説が終わると、彼等は徐々に喧しくなる。彼女の高圧的な態度への不満や、これからどうするかなどの疑問などを、皆口々に喋りだしたのだ。

「――――何をしているの。やるべき事は説明したでしょう。」

そう言って彼女はまたも騒がしくなった新入員達を、苦々しそうな顔で睨みつける。

「マスター適性者として招集に応じた以上、あなたたちはもう軍人のようなものなのよ。

命令には従う。どんな時でも戦いに順応する。いちいち言わせないで、こんなこと。」

厳しい表情で声を張り上げると彼等は渋々黙る。

ここで彼女を弁護する訳ではないが、彼女も必死なのだ。

彼女の立場とある事情、そして今回の騒動における上層部からの期待という名の圧力。最早彼女は一杯一杯なのだ。新入員達に厳しい声を上げるのも無理はなかった。

「それとも、まだ質問があるの？ほら、そこの君！　君よ、遅刻した君！」

彼女はまたも立香を名指ししてきた。彼は彼女のお気に入りのサンドバックにでもなってしまったのだろうか。

しかし彼は変わらず、何も喋らずにずっと下を向いている。少し首を傾けているが、それ以外は微動だにしなかった。

「特別に質問を許してあげます。首をかしげているけど、何が不満なの？」

どうやら彼女は未だに彼の様子がおかしいことに気が付いていないようだ。

数刻遅れて、立香はゆっくりと顔を上げる。その表情は若干やつれているようにも、寝ぼけてるようにも見えた。

自分を指名されていることに気付いた立香は、悩ましそうに頭を掻いた。

「……それじゃあ一つ質問を。タイムスリップなんて本当に出来るのか？」

それを聞いたオルガマリーは呆気に取られる。
「……あなたね。特異点、と聞いてわからないの？」
彼女はそう言ったが、その時には既に立香は俯いていた。しかしまたしも彼女は気づかなかったようだ。
「今回発見された特異点は、これまでの観測記録にはなかったものなの。
ようは突然現れた穴と同じってコト。穴自体は正常な時間軸から切り離されているのよ。
２００４年の特異点は過去と未来から独立している。前後の辻褄を合わせる必要はないの。
通常の時間旅行より安定してシフトできるし、どのように改変を行なっても時間の復元力で影響はないわ。」
――――――特異点とは数学と物理学において、ある基準の下で、その基準が適用できない点の事を指す。説明するのは難しいが簡単に言うと、ある一定の法則が成り立たないイレギュラーのようなものである。
オルガマリーが言っている特異点も、正常な時間軸から外れたイレギュラーの事だ。それは歴史という公式が成り立たない方程式、つまりは完全に独立している解なのだ。その為、特異点を消去しても何も問題はないという結論に至る。
「この特異点Ｆは人類史というドレスに染みついた、小さな汚れのようなものよ。
あるだけで美しさを損なう毒。あなたたちはこの毒を摘出するだけでいいの。
それで人類史はもとの、以前から観測されていた正しいカタチに戻るんだから。」
そう言い終えると、彼女はまたしてもため息をつき、呆れた表情で立香のことを見た。
「……まったく。こんな時空論も知らない人間をよこすなんて、協会は何を考えているのかしら。
この作戦は冠位指定（かんいしてい）、魔術世界において最大級の義務と同じなん

だって進言したのに……まあいいわ。君はどこのチーム……ちょっと。ＩＤ、見せて。」
なにか異変に気付いたのか、彼女は立香が所持していたＩＤをチェックした。
「なにこれ、配属が違うじゃない！　一般協力者の、しかも実戦経験も仮装訓練もなし⁉？」
彼女は酷くご立腹だ。立香はマスター適性者としてマシュに連れられここに来たのだが、配属先が違っていたのだろうか。
「私のカルデアを馬鹿にしないで！　あなたみたいな素人を入れる枠なんてどこにもないわ！」
そう言って彼女は上を向き、大きく息を吸い込み声を荒げた。
「レフ！　レフ・ライノール！」
空気がビリビリと震えるほどの声で彼女はレフを呼ぶ。その声を聞いた彼は直ぐに彼女の側へと駆け寄った。
「ここにいますよ所長。どうしました、そんな声高に。なにか問題でも？」
彼はオルガマリーの側によると、落ち着いた様子でゆっくりと声を掛けた。
「問題だらけよ、いつも！　いいからこの新人を１秒でも早くわたしの前から叩き出して！」
そう言って彼女に指差された立香を見て、レフは大体の事情を察っする。
「あー……そういう事ですか。ですが所長、彼も選ばれたマスター候補です。
確かに他に比べて経験はないのでしょうけど、そこまで邪険に扱うこと自体が問題というか……」
レフはそう言って落ち着かせようとするが、興奮した彼女には効果はあまり無かったようだ。
「なんの経験もない素人を投入するコト自体が問題よ！　わたしのカルデアスに何かあったらどうするの⁉？
いいからロマニにでも預けてきて！せめて最低限の訓練を済ませ

てきなさい！」
　オルガマリーは立香の腕を持って立ち上がらせようとするが、立香は俯いたまま微動だにしない。
「……まさか。あなた本当に寝てるの⁉？」
　そこでオルガマリーは漸く彼の異変に気が付いた。それと同時に彼女の内側には怒りがこみ上げる。自分の演説を、説明を聞かずにこの男はずっと寝ていたのだ。
　気付けば彼女は手を振り上げていた。それと同時に立香は目を覚ます。
「……あ？」
　意識が回復した立香が最初に目にしたのは、自分に振り下ろされる掌だった。
　バシンと気持ちのいい音が響き、オルガマリーのビンタは立香の頬にダイレクトヒット。その衝撃によって彼は軽い脳震盪を起こし、ただでさえ不明瞭だった演説の記憶は宇宙の彼方へ吹き飛んでしまった。
　そのままふらついて倒れそうになった彼を、すんでのところで受け止めたレフが、困り果てた顔で呟いた。
「……むう。これは嫌われたものだね。仕方ない、とりあえず命令には従うか。マシュ、藤丸君を個室に案内してくれ。」
　立香がビンタされた時点で駆けつけていたマシュに、レフはそう言った。
「了解です、お話は聞いていました。先輩を個室までご案内すればいいのですね？」
「すまないね。私はレイシフトの準備があって同行できないんだ。何、今回の実験は2時間程で終わる。その後に部屋を訪ねさせてもらうよ。」
「……申し訳ございません、レフ教授。ご迷惑をお掛けしてしまって。」
　意識が正常に戻った立香は、そう言って彼に頭を下げた。
「……なに、気にすることはないさ。君は本当に運が良いからね。」

運が良い、という言葉に不信感を抱いたが、その時の立香には気にする余裕はなかった。
「それでは先輩、こちらへ。先輩用の先輩ルームにご案内しますので。」
「ハハハ、何だよ先輩ルームって…」
マシュは立香の腕を肩へ回すと、ゲートの方へと歩き出す。立香もそれに合わせて歩調を合わせる。その2人の後ろ姿を見つめながら、レフは誰にも見えないように小さく笑みを浮かべた。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ『Ｆｌａｍｅ　ｐｏｌｌｕｔｅｄ　ｃｉｔｙ　Ｆｕｙｕｋｉ　／　炎上汚染都市　冬木』
Ｍｉｓｓｉｏｎ．５『戦いの前哨』

中央管制室から少し離れた廊下を2人は歩いている。
管制室を出る時点では、立香はマシュの肩を借りている状態だったが、現在は既にマシュの肩を離れ、自分で歩いていた。
「所長の平手打ちで完全に覚醒したようで何よりです。」
ここカルデアの所長、オルガマリー・アニムスフィアに強烈なビンタを食らった立香の頬には真っ赤な手形が付いていた。お陰で脳が完全に覚醒した訳なので、立香は彼女に少し感謝していた。
「ああ、全くだ。あれは凄い。銃弾みたいな速さだったよ。」
そう言って立香は茶化すように自分の頬に銃弾が当たる真似をする。それを見たマシュはクスリと小さく笑った。
「……それで、俺はファーストミッションから外されたって訳か。」
立香は一気に真顔になり、重いトーンで話し出す。
「……はい。先輩は自室で待機、という事になりました。」
「そうか……まあ、クビにならなかっただけマシと考えよう。」
ここに来る途中に利用したエレベーターに再び乗り込むと、今度はマシュが話し出した。
「魔術の世界では実力は勿論のこと、家柄がモノを言います――――――」
カルデアの所長、オルガマリー・アニムスフィアは名門と言われるアニムスフィア家の当主。血筋に強いこだわりを持っているのは確かだ。
実験段階だったレイシフトを実用に移すには、多くのマスター適性者が必要だった。しかし、所長やレフが言っていた通り、適性がある者はほんの一握り。
その為彼女は不服ながらも、一般人だった立香のような人間も勧誘したのだ。

「――――これがカルデアの事情です。それで……先輩は、カルデアを去りますか？」
難しい質問だと感じた。確かに彼がここにいる理由は存在しない。だが、クビになった訳ではないのだ。
彼も何も成し遂げずに第二の生を終わらせるつもりは無い。それに、今帰れば並木一佐や彼の父、更には彼が死なせた部下達に面目が立たない。
「……まだ決めてはいないが、しばらくはここに居るだろうさ。」
ここに残る。それが今の自分に出来る最善の選択だと彼は感じた。
マシュの話を聞いて居るうちに、２人は最初に出会った窓のある廊下に着く。そのまま歩いていると、突然マシュが窓の方を向いて立ち止まる。何事かと思い窓を見るが、そこからは猛吹雪に見舞われている山々しか見えなかった。
「ここは地上よりずっと高い場所にあるのに、ちっとも青空が見えません。」
「……青空か。」
マシュの発言から推測するに、この山脈は常時吹雪に見舞われているのだろう。カルデアのような施設を秘匿するには、もってこいの場所だと判断されたのも頷ける。
「まあ、２年もここに居たら、見る機会なんぞほとんど無いな。」
そう言って立香は彼女の方を見る。そこには、どこか悲しそうな目で窓の外を見つめる彼女の姿があった。
彼女は立香が自分を見ている事に気づくと、顔を赤らめる。
「……すいません。先輩を個室へお連れするのを忘れてました。」
マシュはそう言うと再び歩き始める。恥ずかしさを紛らわす為か、マシュは先程より少し歩くペースを上げた。
しばらく歩いていると、とある扉の前でマシュは停止する。扉の側にはローマ字表記で『Ｒｉｔｓｕｋａ　Ｆｕｊｉｍａｒｕ』と書かれたプレートがあり、そこが立香の部屋である事がはっきりと示されていた。
「こちらが先輩の個室です。」

「悪かったな。ここまで案内してくれて。」
「なんの。先輩の頼みごとなら、昼食をおごる程度までなら承りますとも。」
「そこまでしなくて良いんだが……そういえば、お前もミッションに参加するのか？」
「はい。ファーストミッション、Ａチームです。」
　それを聞いた立香は心底驚いた。目の前の、今の自分より幾ばくか年齢の低い少女が、今回の作戦の先行部隊に所属しているのだ。
　どうやら自分は彼女の事を舐めていたようだ。そう思い、立香はマシュへの認識を改める事となった。
「へえ、凄いじゃないか。」
「……ありがとうございます。それでは、私はこれで。」
　マシュは立香に向かってお辞儀をすると、後ろを向いて走り出した。
「マシュ！」
　立香に呼び止められ、マシュは彼の声が聞こえた方に振り向く。そこには、気をつけの体勢で彼女の方を向いている立香の姿があった。
　マシュがこっちを振り向いた事を確認すると、立香は一糸乱れぬ動きで敬礼した。
「……健闘を祈る。」
　突然の敬礼にマシュは少し困惑したが、それに応えるように笑顔で小さく手を上げた。すぐにマシュは走り出し、姿は見えなくなった。立香は敬礼を止めると、自分の右手を見つめた。
「……面白い奴だったな。」
　そう静かに呟くと同時に、立香は何かの気配を感じ、すぐさま振り返った。気配の正体は、リスなのか犬なのかいまいち分からないカルデアの特権生物、フォウだった。
「なんだ、お前か……あいつ（マシュ）について行かなくていいのか？」
「フォウ、キュウ。」
　自分の足にじゃれついてくるフォウを見て、立香は頭を掻きながら溜息をついた。

「こりゃ離れる気配は無いな……仕方ない、部屋の中に入れてやるよ。」
そう言うと、立香はフォウの首元を掴んで持ち上げる。フォウは持ち上げられると、軽く抵抗はしたものの暴れる気配は無かった。
彼は部屋のドアを開き、謎の小動物と共に、新しい我が家に足を踏み入れた。
「はーい、入ってまー……」
部屋に入ると同時に、立香は硬直する。自室だと案内された部屋に、ベッドに座りながら、ケーキを食べている見知らぬ男がいたのだ。
男も、何か言おうとしていたが、立香を見ると同じように硬直する。そのまま沈黙が部屋を支配する。
「――――って、うぇえええええ⁉？誰だ君は⁉？」
最初に沈黙を破ったのは男の方だった。驚いた様子で、大声を出しながら大きく仰け反る。
「いや、あの――――」
「ここは空き部屋だぞ、僕のさぼり場だぞ⁉？　誰のことわりがあって入って来たんだい⁉？」
男の出鱈目な話に、立香はハアとため息を吐く。
「アンタ何言ってんだ？　俺はただ、ここが部屋だって言われたから入っただけなんだよ。」
彼は少し強い口調でそう言った。
「君の部屋？ここが？」
そう言うと、その男は何かを思い出したらしく、頭を抱えながらがくりと肩を落とした。
「あー……そっか、ついに最後の子が来ちゃったかぁ……」
「……で、あんたの名前は？」
そのまま残念そうに溜息をついた男に対して、立香はそう質問した。
すると、男は先程とは打って変わって元気に顔を上げ、喋り出した。
「僕はロマニ・アーキマン、医療部門のトップだ。なぜかみんなからは、略してドクター・ロマンと呼ばれているよ。

理由は分からないけど言いやすいし、君も遠慮なくロマンと呼んでくれていいとも。」
男はのほほんとした表情でそう言った。
その自己紹介を聞いた立香は驚いた。目の前の、頼りげのなさそうな男が、カルデアの医療部門のトップなのだという。
「……こいつがトップって……失礼、1先程の発言お詫び申し上げます。ドクター・アーキマン。」
立香はボソリと呟くと、先程とは打って変わって、紳士的な態度を取る。
どうやらロマニには聞こえなかったようだ。
「ハハハ、よしてくれよ。ロマンで良いさ……あれ？」
何かに気付いたロマンは、立香の足元を見る。
そこには完全に存在を忘れ去られていたフォウがいた。
「君の足元にいるの、もしかして噂の怪生物？うわあ、はじめて見た！」
ロマンはそう言ってフォウの事をまじまじと観察する。
その姿はまるで、動物園で初めて象を見た子供のようだった。
「マシュから聞いてはいたけど、ほんとにいたんだねぇ……どれ、ちょっと手なずけてみるかな？」
そう言うと、彼はフォウに向かって手を差し出す。
「はい、お手。うまくできたらお菓子をあげるぞ。」
ロマンは間の抜けた笑顔を浮かべて、手を差し出している。
それを見た立香は呆れてしまった。本当にこの男が医療部門のトップなのかと疑問にすら思ってしまう。
「……フウ。」
どうやらフォウも彼と同意見だったらしい。フォウは憐憫の感情のこもった目でそっぽを向く。
「あ、あれ。いま、すごく哀れなものを見るような目で無視されたような……」
そりゃそうだ、と立香は心の中で呟く。
大の男がこんな事をやっているのを見たら、誰だってこのような目

で見る。
「と、ところで、もうすぐレイシフトが始まるんじゃないのかい？スタッフ総出で駆り出されてるって聞いたけど。」
「あー……それは……」
立香はギクリとする。ブリーフィング中に居眠りして追い出されたとはとても言えたものじゃない。
口籠る立香を見て、ロマンは彼の事情を察する。
「だいたい話は見えてきたよ。君は今日来たばかりの新人で、所長のカミナリを受けたってところだろ？」
「……ご名答。お恥ずかしながらその通りです。」
「それならボクと同類だ。何を隠そう、ボクも所長に叱られて待機中だったんだ。」
「え？」
仮にも医療部門のトップが参加しないとは、どういう事なのだろう。
目の前の男は、何か重大なヘマでもしたのかと立香は考える。
「さっきも言った通り、もうすぐレイシフトが始まるだろ？　スタッフ総出で駆り出されてるんだけど、僕の仕事はみんなの健康管理だから。正直、やるコトがなかった。
霊子筐体（コフィン）に入った魔術師たちのバイタルチェックは機械の方が確実だしね。コーヒー、入れようか？」
「……ブラックでお願いします。」
それを聞いた立香は考え込む。
不測の事態が起きる可能性だってあるはずだろう。それなのに何故医療部門のトップである彼を追い出してしまったのだろうか。
あの所長はそういった状況が起きると想定していなかったのか。
『ロマニが現場にいると空気が緩むのよ！』って所長に追い出されて、仕方なくここで拗ねていたんだ。はいどうぞ。」
「ありがとうございます……たく、何考えてんだか。」
立香はあの所長に対し、ボソリと毒吐く。幸いにもロマンは聞いていなかったようだ。

「でも、そんな時にキミが来てくれた。地獄に仏、ぼっちにメル友とはこのコトさ。所在ない者同士、ここでのんびりと世間話でもして交友を深めようじゃあないか！」
「え、ええ。まあ……」
　立香は苦笑いを浮かべる。こんな奴と同類にはされたくない、と心の中で呟いた。
「そうだなあ……まずは、このカルデアについて話してあげよう。ここは――――」

――――――――――――

「――――とまあ、以上がこのカルデアの構造だ。標高６０００メートルの雪山の中に作られた地下工房で……」
　言いかけたところで、ロマンの腕の端末から着信音のような音が発生する。
　彼が端末を操作すると、空中に画面が展開した。ここまで技術が進歩しているのか、と立香は感嘆する。
「やあレフ。」
　どうやら彼はレフ教授と通信しているらしい。
『ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えてこちらに来てくれないか？』
「何かあったのかい？」
『Ａチームの状態は万全だが、Ｂチーム以下、慣れていない者に若干の変調が見られる。』
　Ａチームといえば、マシュの所属している部隊だ。
　オルガマリーは、彼等は一ヶ月前からチームとして機能していると言っていた。どのチームもこれが初実戦だろうが、経験の差は天と地ほどの差がある。新兵同然のＢチーム以下が不安定になるのも当然だろう。
　だが先行するのはＡチームだ。彼等はまだ余裕があるはずだ……当のＡチームがパニックやトリガーハッピーのような状態にならなければの話だが。
「それは気の毒だ。麻酔をかけに行くよ。」

『ああ、急いでくれ。いま医務室だろ？そこからなら二分で到着できる筈だ。』
「オッケー。」
『……遅れるなよ。』
そう言ってレフは通信を切った。
「ここ、俺の部屋ですよね？」
同時に立香は呆れた様子でロマンにそう言う。それを聞いたロマンは苦笑いを浮かべる。
「はははは……ここからじゃどうあっても五分はかかるぞ……」
呆れると同時に、本当にこの男は医療部門のトップなのかと、その様子を見た立香は再び疑問に思う。
「ま、まあ、少しぐらいの遅刻は許されるよね。Aチームは問題ないようだし。ああ、今の男はレフ・ライノールって言うんだ。」
ロマンは苦し紛れの言い訳を並べた後に、話を逸らそうとする。仕方がないので、立香も渋々話に付き合う事にした。
「存じています。ここの技師ですよね。」
「はははは、技師だなんて随分謙遜したなあ。」
「え？」
思わず声が漏れる。謙遜したとはどう言う事だろうか。
「彼は、あの擬似天体（カルデアス）を観測するための望遠鏡――――――近未来観測レンズ・シバを作った魔術師だ。」
あの物腰が柔らかい紳士的な人物が、カルデアスを観測するための望遠鏡を開発した張本人。
人は見かけによらないとはよく言ったものだ、と立香は心の中で驚嘆する。
「シバはカルデアスの観測だけじゃなく、この施設内のほぼ全域を監視し、写し出すモニターでもある。
ちなみにレイシフトの中枢を担う召喚・喚起システムを構築したのは前所長。その理論を実現させるための擬似霊子演算機……ようはスパコンだね、これを提供してくれたのはアトラス院。」
聞いたことのない単語が雪崩れ込んでくる。アトラス院とはなん

だ。そもそも霊子とは一体なんなのか。もはや立香にはなんの事なのかさっぱりだった。
「このように実に多くの才能が集結して、このミッションは行われる。僕みたいな平凡な医者が立ち会ってもしょうがないけど、お呼びとあらば行かないとね。」
そう言ってロマンはベッドから立ち上がり、ドアへ向かう。途中で、何かを思い出したかのように立香の方に振り向いた。
「そうだ……おしゃべりに付き合ってくれてありがとう、藤丸くん。」
「こちらこそ、ありがとうございました。」
「落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。今度は美味しいケーキぐらいはご馳走するよ。」
またね、と手を振りながらロマンはそのままドアに近付く。
それと同時に、突然部屋の明かりが消えた。
「なんだ？明かりが消えるなんて、何か――――」
瞬間、ドンという音と同時に地響きのような振動がカルデア駆け巡る。
1秒遅れて、けたたましい警報音が鳴り響く。
『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、中央管制室で火災が発生しました。
中央区画の隔壁は２４０秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください。
繰り返します。中央発電所、及び中央――――』
警報音と共に、避難を呼びかける無機質な女性の音声が流れる。
先程の音と振動、そして火災。これらから考えられる原因であろう物体は、立香が知りうる限りでは一つしかなかった。
「今のは爆発音か⁉？　一体なにが起こっている……⁉？　モニター、管制室を映してくれ！　みんなは無事なのか⁉？」
ロマンに命令された端末は、中央管制室の映像を映し出す。そこにあったのは、炎で一面真っ赤に染まった管制室の姿があった。
「……こりゃ酷い……まさか……テロか？」
そうは言ったものの、立香もテロとは考えにくかった。あの広い部

屋をここまで破壊するには、それこそ真上からGBU(大型貫通爆弾)—57 MOPなどでも投下しなければ不可能だろう。
「……藤丸くん、すぐに避難してくれ。ボクは管制室に行く。もうじき隔壁が閉鎖するからね。その前にキミだけでも外に出るんだ！」
ロマンは全速力で管制室の方向へと走っていく。
「ちょ、Ｄｒ．ロマン！　危険で――――」
立香はロマンを呼び止めようとするが、ロマンはそのまま管制室の方へと消えていった。仕方なく、立香は最初に入って来たゲートの方向に走り出そうとする。
その瞬間、脳裏にマシュの姿が浮かぶ。
管制室には、立香とロマンを除くカルデアのスタッフの大半が集まっていた。このまま避難するよりも、ロマンと協力して、一人でも多くの人員を救出したほうが良いのではないのだろうか。
思い悩んでいたその時、立香の脳裏にある言葉が蘇った。
――――海兵隊は、決して仲間を見捨てない。
「……そうだ。俺は、合衆国海兵隊の海兵だ。これまでも、そしてこれからも。」
彼は既に、この施設の一員だ。ならその同僚を助けない理由などないだろう。
立ち止まっていた立香は弾かれるように、中央管制室の方向に走り出した。
そのまま走っていると、前を走っていたロマンに追いつく。いつの間にか自分と並走していた立香を見て、ロマンは驚いた表情を浮かべた。
「いや、なにしてるんだいキミ⁉？　方向が逆だ、第二ゲートは向こうだよ⁉？」
「すいません、一人でも多く助けたいんです！」
「だからって……ああもう、言い争ってる時間も惜しい！隔壁が閉鎖する前に戻るんだぞ！」
「了解！」
二人は全力で走り続ける。

前方に中央管制室のゲートが見えてくる。接近するとゲートは自動で開き、中から熱波と、様々な物が焼ける匂いが噴き出す。
その光景は、映像で見るよりも更に凄惨だった。
あちこちで火の手が上がり、天井からは様々なものが落ちて来ている。
所々に人間の死体や肉片が散らばっており、まるで旅客機事故の現場のようだった。
「……生存者は、恐らくいないな。無事なのはカルデアスだけだ。ここが爆発の基点だろう。人為的な破壊工作の可能性がある。」
「クソが……！　一体どこのどいつがこんな事を――――」
その言葉を遮るように、アナウンスが流れ出す。
『動力部の停止を確認。発電量が不足しています。予備電源への切り替えに異常　が　あります。職員は　手動で　切り替えてください。
隔壁閉鎖まで　あと　１８０秒。中央区画に残っている職員は速やかに――――』
予備電源が無ければ、施設の最低限の維持は不可能になる。それだけは避けなければならない。
それを聞いたロマンはゲートを潜り抜け、管制室から抜け出す。
「……ボクは地下の発電所に行く。カルデアの火を止める訳にはいかない。キミは急いで来た道を戻るんだ！」
「ドクター・ロマン！」
彼はそのまま走り去り、ゲートは閉じてしまう。これで、実質ここにいるのは立香だけになった。
立香は、逃げるべきかどうか心の中で葛藤する。このまま逃げてしまえば、自身は助かるだろう。だが、いるかも知れない生存者を見捨てる訳にはいかなかった。
いつの間にかついて来ていたフォウが、立香の事を心配そうな顔で見つめた。
「……まだ、間に合うはずだ。」
そう言って、立香は燃え盛る管制室の奥に進入する。
『システム　レイシフト最終段階に移行します。座標　西暦２００４

年　1月　30日　日本　冬木』
　進む毎に、様々なものが目に入る。
　瓦礫に押し潰され、下半身のみが残された職員。コフィンの中で血を流しているマスター適性者。炎で焼かれ、悶え苦しみながら絶命したであろう黒焦げの誰か。目と両足を潰され、両手を振り回しながら誰かの名前を叫び続ける者。飛び散った内臓や脳髄。
『ラプラスによる転移保護　成立。特異点への因子追加枠　確保。アンサモンプログラム　セット。マスターは最終調整に入ってください。』
　立香も、このような地獄は久しぶりに見た。少し吐き気を催す。
　常人なら嘔吐しているであろうその光景の中を立香は進み、生存者を探す。
「誰か！　いるなら返事をしろ！」
　そうして進んでいるうちに、開けた場所に出る。もう駄目だと諦め、戻ろうとしたその時、立香の目は何か動くものを捉えた。
　目を凝らすと、見覚えのあるパーカーを来た少女が倒れているのが見えた。
「……、あ。」
　マシュも立香に気がついたらしく、呻き声を上げながら彼の方を向いた。
「マシュ！」
　彼女の名を呼び、立香は慌てて駆け寄る。
「おい、大丈夫か⁉？　助けに来た……ぞ……」
　あと2メートルというところで、彼女がどういう状況に置かれているか立香は理解する。
　下半身があるはずの場所は、上から降ってきた車ほどの大きさの瓦礫に押し潰されていた。
　もう助からない。それは火を見るよりも明らかだった。下半身は完全に潰れ、大量に出血している。救助して処置を施したところで、30分持つかどうかだった。
「……畜生！」

立香は苦々しそうにそう吐き捨てると、彼女を押し潰している瓦礫を殴りつける。勿論この程度ではビクともしないのは彼も理解していた。
「……はい。ご理解がはやくて、たすかります。だから、せんぱいもはやく、逃げないと。」
その言葉に、立香は自分の無力さを思い知らされる。また助けられないのか。また見捨てなければいけないのか。
神がいるのだとしたら、なぜ再びこのような苦しみを味合わせるのか問い詰めたい気分だった。
突然、カルデアスがある方向から、警笛のような低い音が響く。
振り向くとそこには、燃えるような赤に染まったカルデアスの姿があった。
「なに……!?」
「あ……」
その光景を見た二人は驚愕する。なぜ突然カルデアスが赤く染まったのか、理解できなかった。
『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。
近未来百年までの地球において
人類の痕跡は　発見　できません。
人類の生存は　確認　できません。
人類の未来は　保証　できません。』
マシュは弱々しくも、悔しそうにも、悲しそうにも見えるような表情を浮かべる。
「カルデアスが……真っ赤に、なっちゃいました……」
『中央隔壁　封鎖します。館内洗浄開始まで　あと　１８０秒です。』
二人が呆然としているうちに、隔壁は閉まってしまった。
もはや脱出は不可能だ。逃げる事ができなくなった立香は、その場に座り込む。
「……隔壁、閉まっちゃいましたね……もう、外に、は。」
時間が経つごとに衰弱していっているマシュは、既に息をするのも

苦しそうだった。
「……もういいさ。所詮は俺もここで終わりってだけだ。それよりお前は？　痛むか？」
「わたしは、大丈夫です……ありがとう、ございます……」
「なに、礼には及ばない。俺にできるのは、お前を看取るぐらいだからな。」
　気丈に振る舞おうと、立香は笑みを浮かべる。それを見たマシュも、弱々しい笑顔を見せる。
『コフィン内マスターの　バイタル　基準値に　達していません。
　レイシフト　定員に　達していません。該当マスターを検索中――――――――』
「せんぱい……」
「どうした？」
　弱々しく話しかけてきたマシュに、立香は答える。
「……ここからは……ちっとも……空が見えない……」
　そう、小さく呟いた。
「……そうか。ここは吹雪ばかりで見る機会が無いしな……なら、いつか見せてやるよ。飛び切りの青空をさ。」
　勿論のことだが、これは嘘だ。二人はあと数分の命、もう時間はない。
　だがそれでも、せめてこの少女には絶望したまま死んでほしくなかったのだ。
『――――検索中――――――発見しました。適応番号４８　を　マスターとして　再設定　します。』
「……あの……せん、ぱい」
「ん、今度はなんだ？　言ってみろ。」
「手を、握ってもらって、いいですか？」
「……ああ、お安い御用さ。」
　立香は、マシュの手を優しく包み込む。マシュはそれを見ると、満足そうに目を閉じた。
　時を同じくして、大きな揺れとともに管制室に大量の瓦礫が降り注

ぐ。
『アンサモンプログラム　スタート。霊子変換を開始　します。』
二人の真上からも、瓦礫は容赦なく襲いかかる。
『レイシフト開始まで　3』
『2』
『1』
『全行程　終了。ファーストオーダー　実証を　開始　します。』
立香の意識はそこで暗転した。

――――――日本　　とある地方都市
燃え盛るこの街のある場所に、迷彩服を着た白人の男が倒れていた。
男はヘルメットを被っており、その迷彩服の右肩には星条旗のパッチが貼られている。さらに、その傍らには小銃やナイフなどが落ちていた。
人は彼を様々な名で呼んだ。だが、後にも先にも、彼の真の名は、一つだけだ。
男の名は――――――ローガン・K・アダムス

Ｍｉｓｓｉｏｎ．６『Ｏｎｃｅ ａ Ｍａｒｉｎｅ，
Ａｌｗａｙｓ ａ Ｍａｒｉｎｅ．』

「キュウ……キュウ」
耳元で聞き覚えのある鳴き声が聞こえる。
彼は何の鳴き声か思い出そうとするが、何故か思い出すことができない。
「フォウ……フー、フォウ……」
頬を舐められるような感覚がする。その感触に彼は覚えがあった。自分は助かったのか。なら彼女は――――――マシュは無事なのだろうか。
「マシュ……！」
ガバリと彼は起き上がり、周辺の状況を確認する。目の前に広がる光景はあの燃え盛る管制室とよく似ていたが、全く違うものだった。
「ここは一体……ん？」
起き上がって更に様子を確かめようとしたところで、彼は自分の体に違和感を覚える。
目線がおかしい、もう少し低かったはずだ。声も前と比べて低くなっている。
体を触って確かめると、その違和感は更に大きくなる。
今の彼は海兵隊のコンバットシャツとコンバットパンツを着て、プレートキャリアとヘルメットを装着している。腰に手を回してみると、ヒップホルスターにはＭ４５Ａ１ピストルが差し込まれていた。
「おいおい……何だこれは……」
更には、Ｍ４Ａ１カービンライフルやグルカナイフまでもが彼の側に落ちている。他にもグレネードや銃剣、無線機……それらは全て、彼が最期に従事した任務の際の装備だった。それらを見た彼は酷く動揺する。
ふと横を見ると、そこにはヒビの入った鏡が落ちていた。急いでそれを手に取り自分の顔を確認する。そこに写っていたのは――――

「……まったく、何の冗談だ？」
――――――紛れも無い、ローガン・Ｋ・アダムス本人の顔だった。
ローガンは呆然として手から鏡を落とす。
なぜ、今になって自分はこうなったのか。それ以前にここはどこで、自分はどうしてここにいるのか。マシュはどこに行ったのか。
自身の置かれた状況に対する疑問が続々と湧き出てくる。試しに無線を弄るが、まったく反応はない。どの周波数にしてもだ。
何か手掛かりになる物はないかとポーチなどを探ると、あるものが出てきた。
「これは……」
それは彼がカルデアに入館する時に受け取った、腕時計型の端末とＩＤだった。ＩＤには『Ｎｏ．４８　藤丸立香』と記されており、彼がカルデアの一員である事を証明していた。
「……つまり俺はカルデアから生きてここに来たって事か？」
そうなると根本的な疑問が残ってしまう。なぜ自分は藤丸立香からローガン・Ｋ・アダムスに戻ったのか。
顎に手を当て考え込んでいると、ローガンはまた足元に何かの気配を感じる。
素早くＭ４５Ａ１を引き抜いて足元を見ると、そこには自分を起こしてくれた張本人であるフォウがいた。
「なんだお前か……」
どうやら彼は考え事に夢中でフォウの事をすっかり忘れていたようだ。安堵のため息を漏らして考え事に戻ろうとした瞬間、微かにだが彼は何かの音を聞いた。
「……？」
音のした方に振り向くと、一本の赤い筋が空に昇って行くのが見えた。それはそのまま雲の中に入ると、カッと赤い光を放つ。１秒遅れてそれは何個もの光に分裂し、ローガンのいる方向めがけて降って来た。
「なっ……!?？」

やられる。そう思った時には、既に避けられないほどの距離までそれは迫っていた。
「クソッ！」
彼に到達するまでコンマ３秒という所まで来た瞬間、目の前に巨大な何かを持った誰かが現れた。
猛烈な爆音と共に、連続でそれらは弾着する。しかしローガンには傷一つ付かない。突然現れた巨大な盾が彼を守っているからだ。
そしてその盾の持ち主は、彼も良く知る人物だった。
「……マシュ⁉？」
そう。彼の目の前で盾を展開しているのは、あのマシュ・キリエライトだ。
彼女は自分の名前を呼ばれ、驚いている様子だ。それもその筈、彼女はローガンの事は知らないのだ。
正確には、藤丸立香だった彼しか知らないという事だが。
「わたしの事を知っているようですが、詳しい話は後です。とにかく、今は伏せていてください！」
「……了解した！」
その後もそれはガトリング砲のように絶え間なく降り注ぐ。ところが１０秒程経ったところで、パタリとそれの襲撃は止んでしまった。
煙が晴れると、辺りの状況は一変していた。
「嘘だろ、おい……」
それを見たローガンは愕然とする。二人がいた所を除く周辺の地面が、あたかもクレーターの様にえぐれていた。その光景はまるで、一点への集中砲撃が行われた後のようだった。
「酷いですね……それより、お怪我はありませんか？　それと貴方は？　姿からして正規軍の方のようですが……」
「……ああ、まずはそこから説明しなければな。とりあえず、こいつを見てくれ。」
ローガンはポーチに入っていたＩＤを差し出す。それを見たマシュは驚いた表情を浮かべた。

「そんな……！失礼ですが、これをどこで手に入れたんですか⁉？」
マシュは興奮した様子でまくし立てる。彼女は立香がどうなっているのか知りたいのだ。
「あー……信じられないだろうが、藤丸立香は……」
その勢いに、ローガンは気圧され口籠る。
「教えて下さい！　先輩は、先輩はどこにいるんですか⁉？」
「……俺だ。」
「……え？」
彼女はその言葉を、すぐには理解できなかった。
「厳密には、藤丸立香だったんだ……さっきまではな。」
それを聞いたマシュは呆然とする。お前は何を言ってるんだ、という感情がハッキリとローガンに伝わってくる。
「……やっぱりな。」
その様子を見たローガンはそう呟く。どういう反応をするのかは彼も予想済みだった。
目の前の男が、自分が探していた青年だと自称しているのを信じられる人間はいない。彼女がこのような反応をするのも無理はなかった。
「……本当に、先輩なんですか？」
マシュはローガンに半信半疑な様子でそう聞いて来る。その目には、疑念の色が見て取れた。
「……ああ。管制塔じゃ済まなかったな、手を握ってやる事しか出来なくて。」
それを聞いたマシュは驚いた表情でローガンを見る。
それもそうだろう。それはあの管制室にいた二人にしか知り得ない事であり、赤の他人が知っている筈のないものだ。
マシュもこれで信じてくれたらしく、先程まで強張っていた表情は少し和らいだ。
「先輩……なんですね。よかった。ご無事で何よりです。」
「そちらこそ、と言いたいところだが、まずはここから移動しよう。」
ローガンはそう言って自分の足元を見る。二人が立っているのは、

先程の攻撃で出来たクレーターの中央に残った足場だ。
ここで立ち話、というのはどちらも気が引けた。
「そうですね。よろしければお手伝いしますが？」
「いや、結構だ。そこまで老いぼれじゃない。」
手を振りながら彼は急な斜面を滑り降りる。マシュもそれに続き、降りていった。幸いにもクレーターはあまり深くなく、登るのはそれほど苦ではなかった。
クレーターから抜け出し、ローガンは再び周辺の状況を確認する。まず始めに感じたのは、風と共に飛んでくる何かが燃える匂いだった。
至る所で火の手が上がっており、まるで焼夷弾による空襲を受けた時のような光景が広がっている。火災を免れている建造物の形状等は日本の古風な建築だと見てとれた。
「となると、ここは日本か？」
だが何故自分は日本にいる。先程まで雪山に居たはずだ。それなのに何故。
「……いやまさかな。」
そこで彼の頭にとある仮説が浮かんだ。人間を霊子化させ過去へ送り込み、事象に介入する行為――――レイシフトだ。あの時、レイシフトに巻き込まれのだとすると、ここは特異点だという事になる。
だが彼は魔術についてはからっきしの素人だ。その仮説が正しいかどうかは彼には判断できなかった。
「こいつは専門外だな……あいつに聞いてみるか。」
素人が一人で考えるよりも、知識のある者に聞いた方が早い。ローガンは後ろのマシュの方を見る。彼女は存在を半分忘れ去られて拗ねていたフォウを慰めている。
「なあマシュ。」
「あ、はい。どうされましたか？」
彼女はローガンの呼びかけに気付き、彼の方を向く。
「ここは特異点なのか？」
「……はい。確かにここは特異点Ｆ――――２００４年の日本、冬木市

です。」
やはり、とローガンは心の中で呟く。彼はあの時、管制室でレイシフトに巻き込まれていたのだ。レイシフトが行われなければ二人は今頃瓦礫に埋もれていただろう。ローガンは心の中で、この偶然に感謝した。
「運が良かった……って事だな。」
これで疑問の一つが解決した訳だが、彼のにはもう一つの疑問が残っていた。マシュの事だ。
彼女は確かにあの時、瓦礫に下半身を押し潰され死を待つのみだった。それなのに何故、彼女は五体満足で無事なのだろうか。
それにあの服装だ。身体に密着したスーツが年齢の割に肉付きの良い肢体を強調しているのにに加えて、腹部は臍が見える程大きく穴が開いている。
ローガンからするとその格好はまるで、アメコミのヒロインのようにも見えた。
「あー……それでだ。マシュ、その格好は？」
彼が思い切って聞いてみると、マシュは顔を赤らめた。あの格好は彼女にとっても恥ずかしいものらしい。
「……これは、その……」
「あー、言いたくないなら言わなくていい。それより通信手段を……ん？」
その時、ローガンの背後で、突然小さな物音が響いた。ローガンの耳が小さな物音を察知する。それは極めて小さいものだったが、彼はその音が自然に発生したものではないとすぐに見抜いた。
彼は素早く音のした方向にＭ４Ａ１を構える。鍛えられた彼の直感が、その音に警鐘を鳴らした。
音がしたのは、二人がいる地点から４０メートル先の道路の曲がり角からだ。
マシュもその音に気付いたらしく、あの巨大な盾を構えていた。彼はＭ４Ａ１を構えながら音のした方にゆっくりと近付いて行く。
トリガーには指を掛けていない。民間人だった場合、誤射してしま

うと不味いからだ。
「……生存者ですか？もしそうなら返事をして下さい。」
藤丸立香として１８年間使い続けた日本語でその方向に声をかける。
反応は無い。
「……繰り返します。生存者なら返事をして、我々の前に姿を現して下さい。さもなければ貴方を敵とみなします。」
彼は先程よりも強めの口調でそう言う。１０秒ほど待つが、やはり誰も姿を現さない。
見当違いだったかと思い、銃を下ろそうとした瞬間、カチカチと骨同士が当たるような音と共に、その音の主が姿を現した。
「……な⁉？」
それは骨だった。骨と言ってもただの骨一本ではない。人間の骨格が、歩いていたのだ。その姿を見てローガンは後ずさる。非現実的な光景を目にして彼は酷く動揺していた。
動く骨格は更に現れ、合わせて五体ほどが集まった。それらは皆ボロボロの布を身に纏い、大ぶりな剣鉈で武装している。
スケルトン。ローガンの頭にその単語が浮かんだ。
中世ヨーロッパを始めとした世界各地の伝承に登場するアンデッドの一種、ＲＰＧではお馴染みの存在だろう。だが伝説は所詮伝説、身体を構成する要素が骨だけの生物などいる筈がない。
だがそれらは彼の目の前にいて、動いてすらいる。俄かには信じられない光景がそこにはあった。
「Ｇｉ――――ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」
それらの内の一体、最初に姿を現したものが彼に向かって剣鉈を振り回しながら突っ込んで来た。走るスピードは小学生とほぼ同じくらいで、お世辞にも速いとは言えない。
「止まれ！　止まらないと撃つぞ！」
ローガンは銃口を向けながらそう言うが、知性のない怪物であるスケルトンは気にせず突っ込んで来る。一人と一体の距離は着々と狭まっていた。

「下がってください、先輩！」
マシュが走り出すが、既に距離は5メートルまで迫っていた。
4メートル、3メートル、そして2メートルまで近付いたところで、スケルトンは剣鉈を振り上げる。
刹那、乾いた音が連続で鳴り響く。
ローガンが構えたＭ４Ａ１から吐き出された５．５６×４５ｍｍ弾がスケルトンの肋骨を、肩甲骨を、頚椎を、頭蓋骨を貫く。
そのままスケルトンは、１骨同士の接続が無くなり、バラバラになって崩れ落ちた。
「……敵性行動を確認。意思疎通は不可能。ＲＯＥ（交戦規定）に基づき、現時点を以って貴様らを敵と見なす！」
冷酷な声が静かにその場に響く。その声を聞いたマシュは、心の奥底が凍りつくような感覚を覚えた。
その発砲音を皮切りに残りの四体が走り出す。ローガンはＭ４Ａ１のセレクターをセミオートに切り替え、その内の一体の頭蓋骨を撃ち抜く。撃たれたスケルトンはガシャンと音を立てて崩れた。
「有効な無力化手段は頭部損傷か……マシュ！　近接戦闘は出来るか⁉？」
「は、はい！」
返事を聞いたローガンはニヤリと口角を釣り上げる。
「盾で連中をブン殴れ！　俺がカバーする。タイタニックに乗った気持ちで殴り込め！」
「それは沈んでしまうのではないでしょうか☒」
「ハッ、どうだかな。まだ分からんさ！」
酷な命令だと、彼も自覚していた。
いかに訓練を積んで来たとは言え、彼女は初陣だ。頑丈な盾があろうとも、それを支える足が震えている。
だがあの身体能力は本物だ。それを活用しなければ宝の持ち腐れになる。
マシュは自分を落ち着かせようと深く息を吸い込む。
「……分かりました。先輩、指示を！」

そう言って彼女は走り出し、先頭の一体に盾でタックルした。それをもろに受けたスケルトンは分解され、吹き飛ばされる。
「はあっ！」
そのまま左にいたもう一体に盾をスイング。同じようにそれは砕け散る。
振り返ってもう一体を仕留めようとするが、そこにスケルトンはいない。
刃物が空気を切る音が聞こえる。彼女は慌てて上に目を向けると、ジャンプして剣鉈を振り下ろそうとするスケルトンの姿があった。
「そんな……！」
避けられない。直感的にそう感じる。
振り下ろされた剣鉈は、彼女に命中……する事は無く、乾いた音と共に弾き飛ばされる。
「……え？」
間髪入れずにスケルトンに無数の弾丸が叩き込まれる。スケルトンはバラバラに空中分解し、先程までスケルトンだったものは地面に降り注いだ。
「Ａｌｌ　ｃｌｅａｒ．」
戦闘の終了を知らせる声が発せられる。声の主は勿論ローガンだ。彼はまだ硝煙の匂いが残る銃を構えながら、周囲を警戒する。
安全を確認した彼は、こちらを見ながら唖然としているマシュに近づく。
「……大丈夫か？」
ローガンがそう言って彼女の頬をぺちぺちと叩くと、彼女はハッと我に返った。
「す、すいません……なんとかなりましたね。」
「ああ……それでだ。マシュ、その格好は？それとお前、そんなに強かったのか？」
先程聞きそびれていた事を再度彼女に尋ねる。尋ねられた彼女は顔を少し赤らめた。
「……いえ、戦闘訓練はいつも居残りでした。逆上がりもできない研

究員。それがわたしです。」
　あれ程の身体能力を発揮していたにも関わらず、訓練では落ちこぼれだったという彼女の話を、ローガンはあまり信じられなかった。
「わたしが今、あのように戦えたのは――――」
　マシュがそう言いかけたところで、ローガンが所持していた端末から着信音が鳴り出した。彼は急いでポーチから端末を取り出すと、右手首に装着する。
　しかし彼はこの端末を操作した事がなかったので、どこをどうすればいいのか見当がつかなかった。
「操作方法分かるか？」
　そう言って彼は右腕をマシュに差し出した。
「あ、はい。そのボタンを押せば――――」
　言われた通りに操作すると、５０センチ先に映像が浮かび上がる。その映像には、ロマニ・アーキマンの姿が映っていた。
『ああ、やっと繋がった！　もしもし、こちらはカルデア管制室だ、聞こえるかい⁉？」
　どうやら電力の復帰には成功したようだが、まだ問題が残っているらしい。ロマンは焦った様子で話している。
「こちらＡチームメンバー、マシュ・キリエライトです。現在、特異点Ｆにシフト完了しました。」
　焦っている彼に対して、マシュは落ち着いた様子で淡々と報告をする。それでも、彼女の足は微かに震えていた。
「同伴者は藤丸立香一名。心身共に問題ありません。」
『ああそうか。藤丸君も無事だったんだね……って、ええ⁉？　マシュ、君の隣の男性は誰なんだい⁉？』
　ロマンはマシュの隣に立っているローガンを見ると、つい数十分前の、立香と初めて会った時のような反応をした。ローガンとしては予想通りの反応だった訳だが。
「……補足します、ドクター。この男性が藤丸立香です。」
『――――マシュ、どこか頭を打ってしまったのかい？』
　彼女は事実を述べているものの、やはりロマンは信じる事ができな

い。
「……俺の部屋でサボってたのは、どこのどいつだった？」
ローガンがそう言うと、ロマンは図星だったらしく体を一瞬ビクつかせた。ローガンは藤丸立香のＩＤをロマンに見えるように掲げる。
「ほら、俺のＩＤだ。これを見ても信じられないか？」
ＩＤを見たロマンは手元のキーボードで何らかの操作をした。
『……ほ、ほんとだ。確かに藤丸君のＩＤだね。という事は、本当に藤丸君なのかい？』
「証拠は揃ってるだろ。意外と疑い深いんだな、アンタ。」
ロマンの質問にローガンはヘルメットを外して頭を掻きながらそう答えた。通信中も安心は出来ないので、彼は頭を掻き終わるとすぐにヘルメットを装着した。
「――――一つ言うと、今の俺の名前は藤丸立香じゃないな。」
ヘルメットの顎紐を締めながら、ローガンはそう付け足す。
『へ？そうなのかい？』
「そう言えば、わたしも先輩の名前を聞いてませんでした。」
マシュが思い出したかのようにそう言う。確かに、ローガンは自分の名前を彼らに教えていなかった。
「そうだな。じゃあ自己紹介だ。」
そう言うと、ローガンはビシリと音が鳴りそうな程に整然とした動きで気を付けの体勢をとる。
「俺はローガン・Ｋ・アダムス。アメリカ合衆国海兵隊の海兵で、階級は大尉だ。」
『……べ、米軍の……大尉⁉？　そんな人がどうして……』
ローガンの自己紹介を聞いたロマンは酷く驚く。なぜ米軍の士官がこのような状況下にいるのか、ロマンは混乱した。
「それはだな。まあ、上手く説明はできないんだが――――」
そうしてローガンは自分がここまで来てしまった経緯を話し始めた。
２０１５年の今日、イラクでの任務中に死亡した事。その後に１９９７年の日本で、赤ん坊の藤丸立香になっていた事。そしてレイシフ

トの後、藤丸立香から再びローガン・K・アダムスの体に戻っていた事。
その話を聞いた二人は唖然としている。
それもその筈、彼の話は余りにも突拍子のないものだ。転生ものの小説のような話を体験したなどと言われても、すぐに信じられる人間は殆どいないだろう。
「あー……お二人さん？確かに信じられないだろうが、こいつは全部本当の話なんだ。」
『……ごめん。ちょっと話について行けてなかった。』
「同じくです……」
ロマンは眉間に指を当てながら、マシュは申し訳なさそうな表情を浮かべてそれぞれの感想を述べた。
「いや、大丈夫だ。それで、これからどうする？」
「少々お待ちください……ドクター。レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。
藤丸立香改め、ローガン・K・アダムスを正式な調査員として登録してください。」
『ああ、分かった。』
ロマンは再び手元の機器を操作する。藤丸立香の情報をローガン・K・アダムスとして上書きして、彼を調査員として登録した。
『……コフィンなしでよく意味消失に耐えてくれた。それは嬉しい。』
登録し終わると、ロマンはなぜか改まった様子で話し始めた。
『それと、マシュ……君が無事なのも嬉しいんだけど、その格好はどういうコトなんだい⁉？　ハレンチすぎる！　ボクはそんな子に育てた覚えはないぞ⁉？』
――――突然の発言に、彼らの周囲が静寂に包まれる。それを聞いていたローガンは眉間を抑え、深いため息を吐く。
確かにマシュの服装の事は彼も知りたかったし、ロマンの気持ちも理解はできたが、突然の言葉には呆れを隠せなかった。
「……これは、変身したのです。カルデアの制服では先輩を守れなかったので。」

マシュは頬を赤らめ、恥ずかしそうにそう言った。それにしても変身なんて、彼女はバッタの改造人間か光の巨人の仲間なのだろうかとローガンは思った。
『変身……？　変身って、なに言ってるんだマシュ？　本当に頭を打ったのかい？　それともやっぱりさっきので……』
「――――Ｄｒ．ロマン。ちょっと黙って。」
『アッハイ。』
マシュは少し怒気を孕んだ声でそう言った。どうやらロマンは地雷を踏み抜いていたらしい。ローガンも止めようとしてはいたが、少し遅かったようだ。
「わたしの状態をチェックしてください。それで状況は理解していただけると思います。」
『キミの身体状況を？』
マシュが少しぶっきらぼうにそう言うと、ロマンは言われた通りの彼女の身体状況を調べ始めた。
『お……おお、おおおぉぉおおおお⁉？』
調べていく内に、ロマンは大きく感嘆の声を上げた。
『身体能力、魔力回路、すべてが向上している！　これじゃ人間というより――――』
「はい。サーヴァントそのものです。」
サーヴァント。その単語を聞いてローガンが思い出したのは、入館時に受けた模擬戦闘において圧倒的ともいえる戦闘能力を示したあの三人の姿だった。
「経緯は覚えていませんが、わたしはサーヴァントと融合した事で一命を取り留めたようです。」
そうしてマシュは、自分がこうなった理由を語り始めた。
カルデアでは特異点Ｆの調査・解決のため、事前にサーヴァントが用意されていた。しかし、そのサーヴァントもあの爆発でマスターを失い、消滅する運命にあった。
だがその直前に、そのサーヴァントは瀕死の重傷を負っていたマシュに契約をもちかけてきたのだ。英霊としての能力と宝具を譲り

渡す代わりに、特異点の原因を排除する、という条件で。
『英霊と人間の融合……デミ・サーヴァント。カルデア六つ目の実験だ。』
デミ・サーヴァント。人間とサーヴァントを融合させるとは凄まじい事なのだろうが、どういうものなのかはローガンにはいまいち分からなかった。
『そうか。ようやく成功したのか。では、キミの中に英霊の意識はあるのか？』
「……いえ、彼はわたしに戦闘能力を託して消滅しました。最後まで真名を告げずに。
ですので、わたしは自分がどの英霊なのか、自分が手にしたこの武器がどのような宝具なのか、現時点ではまるで判りません。」
真名に、宝具。魔術とは縁遠い人生を送ってきたローガンにとっては、一度も聞いたこともない言葉だ。
だが宝具というものには覚えがあった。模擬戦闘であの少女、セイバーが見せた超高出力のレーザー兵器のような攻撃だ。
あれが宝具だとするならば、最終兵器――――核兵器のような位置付けになるのだろう。
『……そうなのか。だがまあ、不幸中の幸いだな。召喚したサーヴァントが協力的とは限らないからね。』
ローガンにはサーヴァントの事はさっぱりだったが、協力的とは限らないという言葉が引っかかった。
いくら強力と言えど、裏切る可能性のあるものを使用するのは安全面で多大な問題があるのではないか。
『けどマシュがサーヴァントになったのなら話は早い。なにしろ全面的に信頼できる。』
「ああ、それには賛同できる。」
確かに、彼女は素直でいい人間だ。精神的に幼すぎる面もあるが、裏切る事はまずないだろう。
『アダムス大尉。そちらに無事シフトできたのはキミだけのようだ。』
「そうだろうな。管制室の連中はほぼ全滅だろ？」

その言葉に、ロマンは一瞬だが表情を曇らせる。やはり無事なマスター適性者は彼だけのようだ。
『ああ。それに、何も事情を説明しないままこのような事になってしまい申し訳ない。
わからない事ばかりだろうけど、どうか安心してほしい。
あなたにはマシュという、人類最強の兵器があるんだから。』
「……最強というのは、どうかと。たぶん言い過ぎです。後で責められるのはわたしです。」
困ったような表情でマシュはそう言った。
あれだけの戦闘能力を発揮してすら謙遜するとは、あまり自分に自信が無いらしい。
『まあまあ。サーヴァントはそういうものなんだって彼に理解してもらえればいいんだ。』
「人類最強ねえ……本当にそうか？」
先程の戦闘を見ていた彼にとっては、目の前にいる少女が核を超える兵器だとは信じられなかった。
『ただし大尉、サーヴァントは頼もしい味方であると同時に、弱点もある。』
「……弱点？　燃料的な何かか？」
『うん。魔力の供給源となる人間……マスターがいなければ消えてしまう、という点だ。
現在データを解析中だが、これによるとマシュはキミの使い魔（サーヴァント）として成立している。
つまり、キミがマシュの主（マスター）なんだ。キミが初めて契約した英霊が彼女、という事だね。』
サーヴァントにマスター。宝具や魔力。ファンタジー小説に出てきそうな単語が次々と出てくる。
そのおかげでローガンは話についていくのが精一杯だ。
「俺がマシュのマスター？　……訳が分からんな。」
『うん。当惑するのも無理はない。キミにはマスターとサーヴァントの説明さえしていなかったし。』

一瞬だが、映像にノイズが走り、ロマンの顔が歪む。通信環境が悪いのだろうか。
『いい機会だ。詳しく説明しよう。今回のミッションには二つの新たな試みがあって……』
更にノイズは酷くなり、雑音が大きくなる。ロマンの顔も、先程より遥かに不鮮明になっていた。
「ドクター、通信が乱れています。通信途絶まで、あと十秒。」
『むっ、予備電源に替えたばかりでシバの出力が安定していないのか。仕方ない、説明は後ほど。』
この間にもノイズは悪化している。
既に映像はほとんど砂嵐で、かろうじて音声が聞こえている程度だった。
『二人とも、そこから2キロほど移動した先に霊脈の強いポイントがある。何とかそこまで辿り着いてくれ。』
「そうすれば通信は回復するのか？」
『ああ。でも、くれぐれも無茶な行動は避けるように。
こっちもできるかぎり早く電力を――――』
そこで通信は途絶えた。ローガンは端末を操作するが、音沙汰はない。
「……仕方ない。言われた地点に急ぐぞ。」
「はい。頼もしいです、先輩。実はものすごく怖かったので、助かります。」
マシュはそう言って笑っているが、やはり足は小さく震えていた。
「それでだ……こいつはどうする？」
「キュ。フー、フォーウ！」
ローガンは足元で転がっていたフォウを持ち上げ、頭をワシャワシャとかき回した。
当の本人は気に入らなかったらしく、すぐにマシュの肩に飛び移った。
「そうでした。フォウさんもいてくれたんですね。応援、ありがとうございます。」

マシュはいつかの時のように微笑むと、フォウに指を差し出した。
フォウが彼女の指を舐めている光景を見て、ローガンは強張っていた表情を少し綻ばせた。
「どうやらフォウさんは先輩と一緒にこちらにレイシフトしてしまったようです。」
「そうか……ロマンには報告しなくて良かったのか？」
ローガンがそう言うと、マシュはあっと声を上げて固まった。
どうやら頭から抜け落ちていたようだ。気付いた彼女は申し訳なさそうにシュンとしてしまった。
「キュ。フォウ、キャーウ！」
「……あいつの事は気にするな、だってよ。」
ローガンに他の生物の言語など分かる訳ないが、その時は何故か本当にフォウがそう言っているように彼は感じた。
「そうですね。フォウさんの事はまた後で、タイミングを見て報告します。」
フォウの励まし？もあってか、彼女はスッキリとした顔立ちになっていた。
「ああ。まずはロマンの言ってた座標を目指すぞ。そしたら通信も回復するはずだ。」
「はい。それにベースキャンプも作れるはずです。」
ローガンは装備のチェックをする。
ＧＰＳは音沙汰なし。無線機も通じないがそれ以外の装備は無事なようだ。
Ｍ４Ａ１のは装填済みの物を含めて７個。先程の戦闘で使用した弾薬分を引いても、弾薬は２００発程はある。
ＯＫＣ―３Ｓとグルカナイフにも異常はない。
「こちらの準備は完了した。さあ、行くぞ。」
「分かりました。行きましょう、先輩！」
そうして英霊と融合した少女と、一度死んだはずの男は共に歩き始めた。

――――――場所は変わり、燃え盛る市街地。
ビルの側に、ローガンと似たような格好をした男達が七人ほど集まっていた。
「おい、無線は通じたか？」
そのうちの一人が、無線を弄っていた一人に話しかけた。
「……はあ、全然だ。」
「クソッタレ、ＧＰＳも駄目だ。」
もう一人がＡＮ／ＰＳＮ―１３ＤＡＧＲ（防衛高度ＧＰＳ受信機）を弄るが、何も反応は無い。
「現在地は不明、ＨＱとの連絡手段もなし……どうすりゃ良いんだ？」
「俺に聞くなよ……くそ、大尉さえいてくれればな。」
一人の男がそう吐き捨てる。
「いない人の事を言っても何も始まらんだろ。俺たちだけでなんとかしなきゃなんねえ。」
そう言って、もう一人がその発言を窘めた。
「分かってるよ……」
男は闇に包まれている空を見上げる。
他の男達も彼に続いて、同じように見上げた。
「……大尉、一体どこにいるんですか……？」
男達は皆、自分達の英雄の帰還を待ち望んでいた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．７『燃える街にて』

――――見渡す限りの炎、炎、炎。辺り一面が炎で覆われている。
ここは２００４年の日本　冬木市。またの名を特異点Ｆ。人類史というドレスに染み付いた汚れ。あってはならない歴史。
この燃え盛る街の中を、巨大な盾を持った少女と迷彩服を着た白人の男が歩いていた。
少女の名はマシュ・キリエライト。彼女は死の間際、名も知らぬ英霊と契約した事でデミ・サーヴァントとなった。その身体能力は並の人間を圧倒し、人類最強の兵器と呼ばれる程の強さを秘めている。
そしてもう一人。
男の名はローガン・Ｋ・アダムス。アメリカ海兵隊所属の特殊部隊の指揮官で、階級は大尉。イラクでの任務中に死亡した筈だったが、紆余曲折あって特異点Ｆにレイシフトした。
現在は特異点の異常を排除するために、マシュと共に行動している。
「……先輩。もうじきドクターに指定されたポイントに到着します。」
左手首に装着していた腕時計型の端末で座標をチェックしながら、マシュは前方を歩いていたローガンにそう言った。
「そうか。やっと一服できるな。」
ローガンはそう軽口を叩きながらも、継続して周囲を警戒している。彼が持つＭ４Ａ１カービンライフルの銃口は、様々な方向へと忙しなく動いている。
「しかし……見渡す限りの炎ですね。資料にあるフユキとはまったく違います。」
「マシュ。その冬木ってのは、実際はどんな街だったんだ？」
「資料では平均的な地方都市であり、２００４年にこんな災害が起きた事はない筈ですが……」
マシュが端末を操作すると、電子音と共に空中に小さく何かの数字が表示された。
「大気中の魔力（マナ）濃度も異常です。これはまるで古代の地球のような

……」
「マナ？そりゃ一体なん――――」
「キャアーーーー！」
突然、甲高い悲鳴が響いた。
「次は何だクソッタレ！」
「どう聞いても女性の悲鳴です！　急ぎましょう、先輩！」
「おいマシュ！　落ち着け……て言っても無駄だよな、クソッ！」
悲鳴がした方向へと走り出したマシュを、ローガンは悪態を吐きながらも彼女を追い始める。

――――――――――――

燃え盛る街中を、幾つかの人影が走っている。
骨と化しても尚動き続ける亡者達の群れが、まだ肉の付いている生者を追いかけ回している。
「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……！」
先頭を走っている、と言うよりも追いかけられている女性――――オルガマリー・アニムスフィアは亡者達に追いつかれないように、死に物狂いで走っていた。
だが彼女が今履いている靴は悲しい事にヒールだ。まともに走り続ける事は難しい。
「ハッ、ハッ、ハッ……キャアッ！」
何かに躓いたらしく、オルガマリーは転倒してしまった。
それでも彼女の背後からは御構い無しにスケルトン達が走ってくる。
「ッ……何なのよ！」
だが彼女は曲がりなりにも魔術師だ。向かってくるスケルトン達に向かって人差し指を向けると、指先から黒い球体が発射される。
発射された球体が集団の内の一体に命中すると、そのスケルトンは粉々に砕け散った。
だがそれも焼け石に水。スケルトン達は一度は立ち止まったものの、笑うようにカタカタと体を震わせると、再び走り出した。
「……ッ！」

オルガマリーも負けじと先程の球体を連射する。しかし発射速度が遅いせいか、スケルトン達の数は減る気配を見せない。
「何なの、何なのよコイツら⁉？　なんだってわたしばっかりこんな目に遭わなくちゃいけないの⁉？」
彼女の泣き言も御構い無しに、亡者達は彼女の方へと走り続ける。
その時、彼女の頭上で先程のスケルトンのそれと同じカタカタという音がした。その事に気づいた彼女が顔を上げると、街灯から飛び降りて彼女を襲おうとするスケルトンの姿があった。
「もうイヤ！　助けてレフ！」
涙を浮かべながら彼女はそう叫んだが、それに応える者はいない。
落下してくるスケルトンの剣鉈は彼女に振り下ろされる――――が、突然割り込んできた巨大な盾によってその斬撃は防がれた。
「オルガマリー所長……⁉？」
「マシュ⁉？」
攻撃を受け止めていたマシュは、自分が助けた女性を見て驚く。助けられたオルガマリーもひどく動揺する。
「あなた、どうして……」
「マシュ、そのまま動くな！」
「へ？」
オルガマリーの疑問を遮るかのように怒号が発せられると、数発の乾いた銃声と共にマシュの盾を攻撃していたスケルトンはバラバラになる。
「更に敵接近！　マシュ、近接戦闘頼めるか⁉？」
「了解です、マスター！」
「頼むぞ！　ほら、ボサッとしてないでアンタも立て！」
ローガンはオルガマリーの腕を掴むと、そのまま彼女の体を引き起こした。
「い、一体誰なのよ、貴方！」
「自己紹介は後だ！　死にたくないなら俺の後ろに下がれ！」
「ちょ、ちょっと待ちなさい！　まだ話は……キャアッ！」
オルガマリーは反論しようとしたが、ローガンは問答無用で彼女を

後ろに押し込んだ。
「いいか、そこでじっとしてろよ！」
「ああもう、いったい何がどうなってるのよーーっ！」
一体のスケルトンに巨大な盾が叩きつけられる。
重量のある盾の打撃をもろに食らった亡者の骨格は崩れ、飛び散る。
「ハアッ！」
その盾の持ち主であるマシュは、重々しい盾を軽快に振り回す。既に三体、彼女の盾の餌食になっているが、まだ敵は九体ほど残っている。
正面にいたスケルトンが彼女目掛けて得物を振り回しながら突進してくる。マシュも盾を構え突進する。接触した瞬間、スケルトンは粉々になる。骨だけの怪物とサーヴァント、力の差は歴然だ。
だが八体を同時に相手に出来るほどの力は、今の彼女には無い。襲い掛かってきたスケルトン達の攻撃を受け止め、躱しながら、彼女はどうするか思考する。
「マシュ！」
ローガンの怒鳴り声が彼女の耳に届く。それを聞いたマシュが振り向くと同時に、銃声が三回発せられた。
Ｍ４Ａ１から発射された三発の銃弾は、彼女を取り囲んでいたスケルトンの内二体の頭蓋を貫く。
「一旦下がるんだ！」
「分かりました！」
マシュはそう言って頷くと、目の前にいたスケルトンを押しのけ、ローガンのいる方向へ走り出す。スケルトン達も逃すまいと追いかけるが、走るスピードは彼女の方が上だ。
こちらに走ってくるマシュと、それを追うスケルトン達を確認したローガンはＭ４Ａ１を下ろし、Ｍ６７破片手榴弾を取り出した。
「グレネード！」
マシュが自分の側に到着したのを確認すると彼はＭ６７のピンを外し、投擲する。

彼の手から離れたと同時にレバーが外れ、そのままＭ６７は敵集団の正面７メートル手前に落下した。スケルトン達はそれを気にも止めずに二人を目指して走り続ける。
「マシュ、盾を構えてくれ。」
ローガンは落ち着いた様子でそう言った。
「は、はい。こうですか？」
「ああ。後ろの嬢ちゃんは……大丈夫そうだな。」
オルガマリーの方を見ながらローガンはそう言った。
正面に目を移すと、スケルトン達が先程Ｍ６７が落下した場所へと近づいている。
「さてと、もうじきだ。」
向かってくるスケルトン達を見ながらローガンはニヤリと笑った。
「３……２……１……」
そして敵集団の先頭が手榴弾の真上に辿り着いた瞬間、
「……Ｂｏｏｍ！」
スケルトン達の真下で、爆発が起きた。
爆発の衝撃と飛び散った破片を一身に受けた亡者達はバラバラになりながら吹き飛ぶ。
だがその内の一体は、行動不能にはならずに二人の側に吹き飛んで来る。
そのスケルトンは下半身と右腕を喪失していたが、まだ動く左腕でローガンの足を掴む。
スケルトンは彼の足に噛み付こうとしたが、それを行動に移す前にＭ４Ａ１の銃口で頭を押さえ付けられた。
「お前らは地面にキスしてるのがお似合いだ、死に損ない共が。」
そう吐き捨てると、ローガンは引き金を引く。頭蓋骨を撃ち抜かれたスケルトンはそのまま完全に沈黙した。
「オールクリア。」
冷徹な声が響く。その声は、ローガンとはまるで違う、別人のそれのように聞こえる。
「……戦闘終了。やっぱり、先輩はお強いですね。」

そう言ってマシュはローガンの方を見た。
「なに、大した事ない。俺の方が経験があるってだけだ。」
「ですが……」
マシュは表情を曇らせる。彼女は自分が足手纏いだと感じているようだ。
それを見たローガンはどう励まそうかと考える。
「……そう気に病むな。純粋な戦闘能力なら、圧倒的にお前の方が上だ。」
彼はヘルメットの後頭部を掻きながらそう言った。
「本当ですか？」
「ああ、本当だ……まあその話は置いといてだ。」
「？」
「あそこの所長さんに話を伺うのが先決だな。」
ローガンはそう言ってオルガマリーを指差した。
「戦闘、終了しました。お怪我はありませんか、所長。」
マシュはオルガマリーに駆け寄り、座り込んでる彼女に手を差し伸べる。
「……どういう事？」
彼女は開口一番にそう言った。
「所長？　……ああ、私の状況ですね。信じがたい事だとは思いますが、実は――――」
「サーヴァントとの融合、デミ・サーヴァントでしょ。そんなの見れば分かるわよ。わたしが訊きたいのは、どうして今になって成功したかって話よ！」
マシュにそう厳しく言い放つと、オルガマリーはローガンをキッと睨みつけた。
「それ以上に貴方！」
「お、俺か？」
「ええ、貴方よ！　何者なの⁉？　それになんでマスターになってるの⁉？」
「マスターって一体何の……」

オルガマリーはそう言ってローガンに詰め寄る。その余りの勢いに、彼は少し当惑する。
「サーヴァントと契約できるのは一流の魔術師だけ！アンタなんかがマスターになれるハズないじゃない！」
「いや、まずは俺の話を……」
「その子にどんな乱暴を働いて言いなりにしたの⁉？」
「あ？」
ローガンは、彼女が最後に発した言葉に怒りを覚える。
「お前、命の恩人を性犯罪者扱いする気か？」
ローガンは少しドスの効いた声で言うと、オルガマリーをギッと睨みつけた。
彼はマシュに一度も手を上げてないし、上げようとも思わない。彼は、妙な言い掛かりを掛けられたことに腹を立てたのだ。
「それは誤解です所長。強引に契約を結んだのは、むしろ私の方です。」
「なんですって？」
「経緯を説明します。その方がお互いの状況確認にも繋がるでしょう。」
そうしてマシュは自身の身に起きた事と、ローガンの事をオルガマリーに説明し始めた。

「……以上です。わたしたちはレイシフトに巻きこまれ、ここ冬木に転移してしまいました。」
「それで？　貴方の隣の男が、私の説明会に遅刻したあの一般枠だって言うの？」
そう言ってオルガマリーは再度ローガンの事を睨みつける。彼はため息を吐きながら眉間を抑えた。
「事実だ……て言っても信じないだろ？」
「当然よ、そんな事有り得るはずがないわ！」
ローガンはポーチの一つからある物を取り出し、オルガマリーに見せた。

「ほらよ。」
「――――カルデアの、ＩＤ⁉？」
「所長なんだから、これが本物かどうかぐらい分かるだろ？」
「……ちょっと貸して！」
　オルガマリーはＩＤをひったくるように取ると、手首の端末を操作する。
　操作が終わると、彼女の端末には『一致』という文字が浮かび上がった。
「……確かに、これは藤丸立香のＩＤね。」
「そら見たことか！」
　端末を閉じ、オルガマリーは顔を上げる。その顔はこれまで起きた一連の出来事のせいか、少し疲れているように見えた。
「ハア……分かったわ。一応は貴方の言うことを信じてあげる。」
「ご理解感謝する、所長さん。」
「ええ、この話は一旦ここで終わりね。マシュ、状況報告をお願い。」
「は、はい。」
　先程まで置いてけぼりを食らっていたマシュは、急いで説明を再開する。
「――――先輩の他に転移したマスター適性者はいません。」
「アンタが、俺たちが現状唯一出会った人間って事だ。」
「でも希望ができました。所長がいらっしゃるのなら、他に転移が成功している適性者も……」
「……いないわよ。それはここまでで確認している。」
　マシュの言葉を遮るように、オルガマリーは厳しい顔でそう言った。なぜ自分以外は転移していないのか、ローガンの頭に疑問が浮かんだ。
「……認めたくないけど、どうしてわたしと彼が冬木にシフトしたのかわかったわ。」
「生き残った理由に説明がつくのですか？」
　マシュは驚いた表情でそう言った。その点に関してはローガンも知りたいところだった。

「消去法……いえ、共通項ね。わたしもあなたも彼も、コフィンに入っていなかった。」
コフィンとは、人間を霊子に変換する装置だ。
それに入らなかったからこそレイシフトに成功した、とはどういうことか。
「生身のままのレイシフトは成功率は激減するけど、ゼロにはならない。
一方コフィンにはブレーカーがあるの。シフトの確率が９５％を下回ると電源が落ちるのよ。
だから彼等はレイシフトそのものを行なっていない。ここにいるのはわたしたちだけよ。」
彼女の仮説に、二人は思わず感嘆の声をあげる。
「なるほど……さすがです所長。」
「つまり俺たちがここにいるのは奇跡って事か。落ち着けば使い物になるな、アンタ。」
とはいえ感想は人それぞれである。ローガンの発言を聞いたオルガマリーは額に青筋を浮かべる。
「それどういう意味⁉？　普段は落ち着いていないって言いたいワケ⁉？」
「悪い悪い。頼むからそう喚かないでくれ。」
彼は若干ヒステリックになっているオルガマリーに待ったのジェスチャーをした。
「……まあ、前線指揮官には向いてないだろうな。」
ローガンはボソリと呟いたが、幸いにも彼女には聞こえていなかったようだ。
「……フン、まあいいでしょう。状況は理解しました。」
オルガマリーは髪をバサリと掻き上げると、ドンと仁王立ちする。
「ローガン・Ｋ・アダムス大尉。緊急事態という事で、あなたとキリエライトの契約を認めます。」
そう言って彼女はローガンにビシリと指を向けた。
「ここからはわたしの指示に従ってもらいます。

……まずはベースキャンプの作成ね。」
「ああ。俺たちもそれが目的でここまで来たんだ。」
「いい？こういう時は霊脈のターミナル、魔力が収束する場所を探すのよ。
そこならカルデアとの通信が取れるから。それで、この街の場合は……」
「このポイントです、所長。レイポイントは所長の足元だと報告します。」
「うぇ⁉？あ……そ、そうね、そうみたい。わかってる、分かってたわよそんなコトは！」
マシュに指摘されると、オルガマリーは焦った様子で立っていた場所を離れる。
「マシュ。貴方の盾を地面に置きなさい。宝具を触媒にして召喚サークルを設置するから。」
「……だ、そうです。構いませんか、先輩？」
マシュにそう問われると、ローガンは下げていたＭ４Ａ１を小さく掲げた。
「いいぞ、多少は守ってやれる。」
「……了解しました。それでは始めます。」
ガシャと音を立て、マシュが盾を置く。
オルガマリーがそれに手を乗せて呪文のようなものを唱え始めると、三人の周りを光が包み込んだ。
光が消えると、彼等の周りの光景は様変わりしていた。
彼等の周辺には先程のような燃え盛る町ではなく、電子回路のような青白い線が無数にある青い空間が広がっていた。
「これは……カルデアにあった召喚実験場と同じ……」
マシュはそう呟きながら周囲を見渡す。彼女はこの空間に見覚えがあるようだ。
突然、ローガンの端末に通信が入る。腕の端末を操作すると、空中にＤｒ．ロマンの姿が浮かび上がった。
『ＣＱ、ＣＱ。もしもーし！　よし、通信が戻ったぞ！

ふたりともご苦労さま、空間固定に成功した。これで通信もできるようになったし、補給物資だって――――』
「はあ⁉？　なんで貴方が仕切っているのロマニ⁉？　レフは？　レフはどこ？　レフを出しなさい！」
『うひゃあぁあ⁉？』
オルガマリーの姿を見たロマンは、まるで幽霊でも見たかのように素っ頓狂な声を上げた。
『しょ、所長、生きていらしたんですか⁉？　あの爆発の中で⁉？　しかも無傷⁉？　どんだけ⁉？』
「どういう意味ですかっ！　いいからレフはどこ⁉？　医療セクションのトップがなぜその席にいるの⁉？」
オルガマリーに強い口調でそう質問されると、ロマンは表情を曇らせた。
『……なぜ、と言われると僕も困る。自分でもこんな役目は向いていないと自覚してるし。』
ロマンは申し訳なさそうな表情を浮かべている。その表情でローガンは大体の事情を察してしまった。
『でも他に人材がいないんですよ、オルガマリー。
現在、生き残ったカルデアの正規スタッフはボクを入れて二十人に満たない。
ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存者がいないためです。』
ロマンの言葉を聞いていくうちに、ローガンは眉間に指を当て、オルガマリーは口元を押さえ青ざめていく。
『レフ教授は管制室でレイシフトの指揮をとっていた。あの爆発にいた以上、生存は絶望的だ。』
その言葉に、彼女の表情には絶望の色が浮かんだ。
レフは彼女にとって大切な存在だったのだ。それを失ったとすると、心のダメージも大きくなる。
「そんな――――レフ、が？」
オルガマリーは呆然とした様子でそう呟く。レフを失った悲しみ

のためか、彼女の肩は小さく震えている。
「いえ、それより待って、待ちなさい、待ってよね、」
オルガマリーは何か恐ろしい事が思い浮かんだらしく、ひどく困惑した様子を見せた。
「生き残ったのが二十人に満たない？　じゃあマスター適性者は？　コフィンはどうなったの⁉？」
ロマンが言った生き残った人数は、マスター適性者の総数４８名の半分以下だ。
ローガンとオルガマリーの脳裏には最悪の結果が浮かんだ。
『……４７名、全員が危篤状態です。医療器具も足りません。何名かは助けることはできても、全員は――――』
全員死亡、とまでは行かなかったが、最悪の一歩手前だ。
標高６０００メートル級の山脈から降ろす手段は限られているし、あったとしても到着するまで持つかどうかも分からない。
「ふざけないで、すぐに冷凍保存に移行しなさい！蘇生方法は後回し、死なせないのが最優先よ！」
だがオルガマリーは冷静だった。彼女は厳しい目つきでロマンにそう命じる。
『ああ！そうか、コフィンにはその機能がありました！至急手配します！』
ロマンがそう言って椅子から立つと、通信は自動的に消えた。
「……驚いたな。死んでいようが無かろうが、凍結保存を本人の許諾なく行うのは違法だぞ。」
彼女の判断を聞いていたローガンは感心した様子でそう言った。
アメリカでも死亡後に冷凍保存が行われているが、あくまで本人が許諾した場合である。そうだとしても、遺族が反対して裁判になるのはザラだが。
「それなのに即座に英断するとは。所長として責任を負うより、人命を重視したのですね。」
マシュも笑顔で彼女の判断を肯定する。
「バカ言わないで！死んでさえいなければ後でいくらでも弁明できる

からに決まってるでしょう⁉？
だいたい４７人分の命なんて、わたしに背負えるはずないじゃない……！」
オルガマリーはそう声を荒げた。
確かに、彼女は二十代かどうかも怪しいほど若い。そんな女性がこんな重荷に耐えられるはずがない。
「死なないでよ頼むから……！
……ああもう、こんな時にレフがいてくれたら……！」

『……報告は以上です。』
通信に戻ったロマンは、カルデアの状況をオルガマリーに報告した。
『現在、カルデアはその機能の八割を失っています。残されたスタッフではできる事に限りがあります。
なので、こちらの判断で人材はレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に割いています。
外部との通信が回復次第、補給を要請してカルデア全体の立て直し……というところですね。』
「結構よ。わたしがそちらにいても同じ方針をとったでしょう。」
オルガマリーは腕を組みながらそう言った。
「……はあ。ロマニ・アーキマン。納得はいかないけど、わたしが戻るまでカルデアを任せます。レイシフトの修理を最優先で行いなさい。
わたしたちはこちらでこの街……特異点Ｆの調査を続けます。」
『うぇ⁉？　所長、そんな爆心地みたいな現場、怖くないんですか⁉？
チキンのくせに⁉？』
「……ほんっとう、一言多いわね貴方は。」
ロマンの発言が癪に触ったのか、彼女は不機嫌そうな表情を浮かべる。
「今すぐ戻りたいのは山々だけど、レイシフトの修理が終わるまでは時間がかかるんでしょ。
この街にいるのは低級な怪物だけと分かったし、デミ・サーヴァン

ト化したマシュとあの男がいれば安全よ。
事故というトラブルはどうあれ、与えられた状況で最善を尽くすのがアニムスフィアの誇りです。」
「ほお……えらく信用してくれてるな、所長さん。」
装備品のチェックを行なっていたローガンは、Ｍ４Ａ１にマガジンを挿入しながらそう言った。
「……勘違いしないで。わたしはあなたの戦闘能力を買っているだけ、信用なんてこれっぽっちもしてないわ。」
「そうかい。なら早く信用を得ないとな。」
ローガンは軽口を叩きながら、Ｍ４Ａ１のコッキングレバーを引く。
銃の左側にある排莢口が開くと、そこから未使用の銃弾が一発排出された。
「ではこれよりローガン・Ｋ・アダムス大尉、マシュ・キリエライトの両名を探索員として特異点Ｆの調査を開始します。
……とはいえ現場のスタッフの内一名は未熟、もう一名も問題だらけなのでミッションはこの異常事態の原因、その発見に留めます。
解析、排除はカルデア復興後、第二陣を送り込んでからの話になります。あなたもそれでいいわね？　アダムス大尉。」
「俺は別に構わん。」
そうは言ったものの、ローガンは少し妙な胸騒ぎがしていた。本当にこの判断でいいのかと。
『了解です。健闘を祈ります、所長。
これからは短時間ですが通信も可能ですよ。緊急事態になったら遠慮なく連絡を。』
「……ふん。ＳＯＳを送ったところで、誰も助けてくれないクセに。」
『所長？』
オルガマリーの呟きは、ロマンには聞こえなかったようだ。
「なんでもありません。通信を切ります。そちらはそちらの仕事をこなしなさい。」
その言葉を最後に、オルガマリーは通信を切った。

「……所長、よろしいのですか？ここで救助を待つ、という案もありますが。」
マシュが心配して声をかけると、オルガマリーはその表情を厳しいものに変えた。
「そういう訳には行かないのよ……カルデアに戻った後、次のチーム選抜にどれほどの時間がかかるか。
人材集めも資金繰りも一ヶ月じゃきかないわ。その間、協会からどれほど抗議があると思ってるの？
最悪、今回の不始末の責任としてカルデアは連中に取り上げられるでしょう。
そんな事になったら破滅よ。手ぶらでは帰れない。わたしには連中を黙らせる成果がどうしても必要なの。」
どうやら彼女の周辺は相当危ない状況のようだ。魔術の世界にも、権力云々のいざこざがあるらしい。
彼女のような年齢の少女がそのような重圧に晒されていれば、高圧的な態度になるのも無理はなかった。
「それじゃあ、外に出るぞ。」
ローガンはＭ４Ａ１を構え、ベースキャンプから飛び出す。外に出ると同時に、熱風がローガンの顔に吹き付ける。
「――――周辺に敵の姿は確認出来ない。出てきても良いぞ。」
ローガンがそう言うと、マシュはすぐに、オルガマリーは恐る恐るベースキャンプから出てくる。
オルガマリーは辺りを見渡し、敵がいない事を確認すると、安堵のため息を漏らす。
「……さて。悪いけど付き合ってもらうわよ、マシュ、アダムス大尉。
とにかくこの街を探索しましょう。この狂った歴史の原因がどこかにあるはずなんだから。」
オルガマリーは二人のいる方に振り向くと、堂々とした様子でそう言った。
「了解しました、所長。」

「右に同じく。俺としても、こんなイカれた街からはさっさと出たい。」
二人はそれぞれの返答を述べる。それを聞いた彼女は小さく頷くと、振り返って前へ進み始めた。
「ほら二人共、置いて行くわよ！」
ローガンとマシュは、顔を見合わせ苦笑いすると、彼女の後を追って歩き出した。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．８『カルデアとサーヴァント』

「ストップ。都市探索を始める前に、私に言うべき事があるでしょう、アダムス大尉。」
「何？」
それは冬木市を二分する河川、それを横断する鉄橋の側に辿り着いた時だった。
オルガマリーが、突然ローガンに声を掛けた。
途中に通りすがった商店街の跡地で拝借した――――きちんと代金は置いてきた――――煙草に火を点けようとしていた彼は、一体何の事だと言わんばかりに呆けた声を上げる。
「特に何もないと思うが……いきなりどうした？」
「……本気で覚えが悪いようね。」
ローガンの回答が気に食わなかったのか、彼女は不機嫌そうに眉間に皺を寄せる。
「思い出しなさい。管制室での事よ！」
「あ。あれですよ先輩。管制室でレムレムしていた時の事です、きっと。」
「あー……あれか。」
ローガンは火を点けたばかりの煙草を踏み潰すと顎に手を当て、ブリーフィングでの事を思い出そうと長考する。
「集中すれば思い出せます。あれは、ほら――――」
そう言われて、ローガンは頭の中からブリーフィングでの事を思い出そうとする。
オルガマリーのビンタで吹き飛んでいた記憶が、徐々に蘇ってくる。
「――――思い出しましたか、先輩？」
「……まあ、大体は。」
「大体はって……やっぱりまともに聞いてなかったのね、あなた！」
ローガンの言葉を聞いたオルガマリーは酷く腹を立てる。
確かに、自分の話を聞かずに寝ていたとなれば誰でも腹を立てるだ

ろう。というかブリーフィング中に寝ている方が非常識だ。
今回のそれはローガンの方に非がある。
「ああもう、ちょっとそこに座りなさいッ！事態も使命も知らずに特異点に来るなんて酷い話よ！」
「分かった分かった！　だからもう少し落ち着け、な？」
彼女の癇癪を面倒臭がりながら、ローガンは渋々と地面に座り込んだ。
「仕方ないからもう一度、いちから説明してあげます。いい、わたしたちカルデアは――――」
彼が座ったのを確認したオルガマリーが話を始めようとしたその瞬間、彼女の真後ろの道の角からカタカタと音がした。
「まったく、今度は何な……の……」
腹立たしげに振り向いた彼女の視界に入ったのは、
「……」
同じように三人の方を見ている四体のスケルトンだった。
「「……」」
突然の接触のためか、双方とも微動だにしない。
謎の静寂が、彼らの周囲を包み込む。
「――――Ｆｕｃｋ！」
最初に行動を起こしたのはローガンだった。
彼はオルガマリーの肩を掴んで後ろに下がらせると、すぐさまＭ４Ａ１のセーフティーを外し、スケルトンに向けてセミオートで数発発砲する。
銃口から秒速９００ｍ前後で発射された５．５６×４５ｍｍ弾は、二体のスケルトンの頭部に命中し、二体を沈黙させる。
「先輩、あとはお任せを！」
マシュはそう言うと、残っている他のスケルトンに向かって飛び出した。
「了解だ！」
マシュに残りを任せたローガンは後ろを振り向き、オルガマリーが無事かどうか確認した。

幸いにも彼女は傷一つ付いていない。
「よし無事だな……話は後だ、そのまま下がっていろ！」
「ああ、ちょっと！　わたしの話を聞きなさ――――――いっ！」
オルガマリーは腹立たしげに叫んだが、悲しいことにその叫び声に耳を傾ける人間は誰一人いなかった。

――――――――――――

「……ふう。ご苦労様です、マシュ、アダムス大尉。邪魔者が消えてようやく話を戻せます。」
スケルトンがいなくなってしばらくすると、オルガマリーは先程とは打って変わって堂々とした様子で話を再開する。
先程まで、彼女は瓦礫に隠れながら「ほ、本当にいないの⁉？」などと怯えていたのを見ていたローガンは、苦笑いを浮かべる。
「おい、まだ何かあるのか？」
「ありますともっ！　アダムス大尉！　覚えがないとは言わせないわ！　説明会はまだ半分よ！　いえ、その後こそ大事だったんだから！」
彼女は興奮した様子でローガンに詰め寄る。ローガンはうんざりした様子でため息をついた。
「思い出しなさい、いますぐ！おーもーいーだーしーなーさーいー！」
「……まったく。面倒臭い奴だな。」
そのしつこさの余りローガンの口から思わず本音が漏れてしまうが、彼女は聞いていなかったらしく反応するようなそぶりは見せなかった。
『まあまあそう言わずに。所長の長話はそれなりに役に立つよ、アダムス……大尉？』
とはいえ、マイクとスピーカー越しに会話を聞いていたロマンには全て筒抜けのようだった。
「……Ｄｒ．ロマン。大尉は別に必要ない、自分の呼びたいように呼んでくれ。」
ロマンの自分に対する呼び方がやけにむず痒く感じたローガンは、少しウンザリした様子で彼にそう告げる。

彼としては、同じ軍人ではない人間に階級を呼ばせるのは、あまり好きではないのだ。
『え、あ、ああ。これは失礼、アダムス君。』
「ああ、それで良い。」
ロマンが呼び方を変えると、ローガンは画面に向けて小さく小さく親指を立てた。
『よし、それじゃあ……キミたちマスター候補がなぜカルデアに集められたか？その説明になっているはずだよ。』
「分かった……ほら、さっさと話してくれ、所長さん。」
ローガンの話し方が気に食わなかったのか、オルガマリーは顔をしかめながらも口を開いた。
話を聞くにつれて、ローガンは段々と苦々しそうな表情を浮かべ出す。
「――――以上です。先輩が管制室から追い出された経緯、思い出してもらえましたか？」
「……ああ、全部思い出した。」
話を聞き終えたローガンは下を向きながら、申し訳なさそうに指で眉間を押さえた。
「ああクソ。ブリーフィング中に寝るなんて俺も落ちたな。」
ローガンはそう呟くと、軽く舌打ちする。
18年に及ぶ平和な生活は、彼を大分軟弱にしたようだ。
「とにかく！大事な作戦前にどれほど迷惑をかけたのかちゃんと思い出してくれた⁉？」
オルガマリーは苛立った様子でローガンに吼えた。
『あのー、マリー所長？それは言いがかりなのでは……』
「言いがかりなものですかっ！」
ロマンは何とか助け舟を出そうとしたが、オルガマリーの低い沸点の前にあえなく撃沈される。
「あの問答に時間をとられたおかげで、着替える時間がなくなったんですから！」
「？　……所長はダイブ予定になかったのですから、別にスーツに着

替える必要はなかったような……」
オルガマリーにマシュは疑問を投げかける。
ローガンが崩壊した管制室に入った時、コフィンの中の人間は体に密着したボディスーツのようなものを着ていた。スーツとはそれのことだろう。おそらくはレイシフトに必要なものだ。
そう思うと確かに、レイシフトをしないのならスーツを着る必要もないはずだ。
「ありました！　あったの！　作戦に備えて特注で作っておいた礼装がっ！」
どうやら彼女のスーツは、ただの見栄っ張りのためだったようだ。
「……もう。まだ一度も袖を通していなかったのに……まあいいわ。」
彼女は切り替えも早い。沸点の低さ以外はリーダーとしてはいい素質を持っている人間だと、彼女の様子を見ながらローガンはそう感じる。
「とにかくあなたたちマスター候補の役割、その責任と義務はわかったわね？」
「ああ。ご丁寧な説明のおかげで充分理解できた。感謝する。」
「ではローガン・K・アダムス大尉。改めてわたしの護衛（ガード）を任せます。全力で役目を果たすように。」
その命令を聞いたローガンは腕を組むと、ゆっくりと顔を上げる。その顔には、表情は無かった。
「――――悪いが、これ以上あんたの命令を聞くのは無理な話だ。」
突然、ローガンは冷徹な声で言い放つ。その発言に彼以外の三人は困惑する。
「はあ⁉？　あなた、命令に背くつもりなの⁉？」
『彼女の言う通りだ！　一体どうしたんだい⁉？』
オルガマリーとロマンがそう問いただすと、ローガンは先程とは打って変わり軍人然とした様相になった。
「……俺はアメリカ海兵隊とU（アメリカ）・S（特殊）・SOCOM（作戦軍）の共同管轄下にあるんだ。
俺が基本的に従うのはあくまでそれらの司令部からの命令であっ

て、アンタのような人間の命令に従う義務は俺にはない。」
「で、でもあなた、さっきはわたしの命令に従ってたじゃない！」
「あれはあくまで、イレギュラー発生に伴う緊急措置だ。任務に関係のない一施設の責任者が、俺に指示できるとでも？」
「……っ！」
ローガンの言葉に、オルガマリーは唇を噛み締めた。その様子を見た彼は少し頷くと、フウと息を漏らす。
「……というのが、通常時の返答だ。」
「「……へ？」」
その言葉に、彼女の他三人は呆気に取られる。
「俺の部隊は高度に政治的かつ、極めて特殊性の高い任務を遂行する。だから現場の指揮官にも、ある程度の指揮判断の自由はあるんだ。」
話を理解しきれていない三人を見て、ローガンは更に話を続ける。
「現在はＨＱとの交信は不可能、俺と周辺の状態もかなりのイレギュラーだ。こうなると、部隊をどうするかは俺の一存で決まることになる。」
「……あの、先輩。それはつまり……」
話の意味を半分ほど理解できたマシュはようやく口を開く。
「ああ。つまりＹｅｓって事さ。」
ローガンはそう答えると、少し意地の悪い笑みを浮かべた。
「安心しろ。俺もそこまで鬼じゃない。」
その答えを聞いて、マシュとロマンは胸を撫で下ろす。
だがオルガマリーは恥ずかしそうに顔を赤らめると、歯を食いしばってわなわなとローガンを睨みつけた。
「おい、所長さん……悪かった、冗談だ。だから拗ねないでくれ。」
ローガンは笑いながら声を掛けるが、なおも彼女は目の前の男を睨む。
しばらく睨み続けた後、オルガマリーはゆっくりと口を開いた。
「あなたねえ……！」
彼女の口から漏れた声には怒りの色が含まれていた。
そのまま彼女は息を深く吸い込むと、目をカッと見開き、

「――――いい加減にしなさいよぉー!!?」
と、大声で叫んだ。
あまりの絶叫にローガンは鼓膜がビリビリと震えるのを感じる。
「今この状況で冗談とか言える!?? 馬鹿じゃないの!??」
「いやほんと悪かったって。だから落ち着けって……いってえ!」
興奮したオルガマリーは怒りに任せてローガンの足を蹴った。ローガンは突然の激痛に飛び上がりそうになる。
蹴り自体は大した事はなかったが、なにせ彼女が履いているのはヒールだ。所々尖っている事もあり、ヒールで蹴られると相当痛いのだ。
「おおおお……流石に脛はないだろ脛は……」
「フン、当然の報いよ!」
脛を押さえながら悶絶しているローガンにオルガマリーはそう吐き捨てた。
少し弄りすぎたか、と彼女の後ろ姿を見ながらローガンは少し反省する。彼女の沸点の低さには気を付けなければ。
「……仲が良くて結構です。では、新手が来る前に移動しましょう。」
そう言ってマシュは鉄橋を渡りはじめる。
オルガマリーが彼女の後を追ったのを見て、ローガンは煙草を取り出した。
『僕個人の意見だけど、喫煙はあまりお勧めできないかな。』
煙草を口に咥え、ライターを取り出そうとしているローガンに、ロマンは注意する。
医者にとって、煙草は悪以外の何者でもないのだろう。
「こっちは18年ぶりの煙草なんだ。一本ぐらい良いだろ。」
そう言ってローガンは『USMC』というロゴが刻まれたジッポーで煙草に火をつけた。彼はそのまま息を吸い込み、煙草を指で挟んで紫煙を吐き出す。
だが永らく吸っていなかった所為か、もう一度吸ったところで彼は咳き込んでしまった。
『まったく、だから言ったじゃないか。』

「……ああクソ、ごもっともだ。」
ローガンは咳き込みながらも、煙草を捨てようとは微塵も思わなかった。咳が収まった彼は、火のついた煙草を咥え、先を歩いている二人の背中を追い始めた。
その時の煙草の味を、なぜだか分からないが彼はひどく懐かしく感じた。
「……あ。」
自分の現在の行動が任務放棄と敵前逃亡に当てはまるのではないか、という考えが頭に浮かんだローガンは、思わず呆けた声を漏らしてしまう。
だがしばらくすると、仕方ないという様子で苦笑いしながら首を振った。
「まったく……軍法会議も覚悟しないとな。」

三人が鉄橋を渡り始めて数分が経った。長さが約３００ｍもある事もあって、未だに橋の中央部には到達していない。
遠目には炎上する都市が見えるが、橋の上では火災が起きていないため、橋はかなり暗い。空も厚い雲に覆われ、月の光すら見えない。
ローガンはＭ４Ａ１のレールに装着しているフラッシュライトを点灯させている。彼は暗視装置を装備してはいたが、他の二人の視界も確保するためにフラッシュライトを使用していた。
「……なあ所長さん。一つ質問いいか？」
ローガンは周囲に敵がいない事を確認し、Ｍ４Ａ１を下ろして口を開いた。
「今度はなに？さっさと答えなさい。」
「例の――――サーヴァントって奴の事なんだが。」
オルガマリーはその言葉を聞くと、驚いた表情でローガンの方を振り向いた。
「……あなたの言いたい事は大体分かったわ。」
振り向いた当初は表情に怒りの色が見えたが、彼女は何かを察したように溜息をついてやれやれと言わんばかりに首を振った。

「サーヴァントがどんなものかって事でしょう？」
「ああ。残念ながら俺は、あんたらの世界についてはド素人だからな。」
ローガンは苦笑いしながら肩を竦める。それを見たオルガマリーは先程よりも深い溜息をついた。
「……仕方ないわ。移動がてら教えてあげる。」
彼女はそう言ってサーヴァントについての講義を開始した。
サーヴァントとは魔術世界における最上級の使い魔。
人類史に残った様々な英雄、偉業、概念。そういったものを霊体として召喚したもの、それがサーヴァントなのだ。実在した英雄であれ、実在しなかった英雄であれ、それらが〝地球上で発生した情報〟である事に変わりはない。
英霊召喚とは、この惑星に蓄積されてきた情報を人類の利益となるカタチに変換する事なのだ。
オルガマリーが言うには、過去の遺産を現代の人間が使うのは当然の権利であり、遺産を使って未来を残すのが生き物の義務、なのだそうだ。
……人間が好き放題に資源を浪費した結果、環境破壊が進んだという前例を踏まえての発言だろうか。
「分かる？あなたが契約したモノはそういう、人間以上の存在であるけれど人間に仕える道具なの。
だからその呼称をＳｅｒｖａｎｔ（召使い）というのよ。たとえ神の一員であろうとマスターに従うものに過ぎないんだから。」
オルガマリーの話を聞いてローガンは幾つかの事を理解した。
サーヴァントとは過去の英雄――――有名どころではジャンヌ・ダルクやライト兄弟などだろう――――が召喚されたものである事。ロビンフッドやシャルルマーニュのローランのような、実在しないものも召喚される事。そして、彼女の主義主張には極論が多い事。
マシュの力を見ればわかるが、確かにサーヴァントは人外じみた能力を持っている。だがそれほどの存在が、なぜ人間に隷属するのかがローガンには理解できなかった。

「所長。所長の考えは極端ではないか、とわたしの細胞が抗議しています。」
「……フン。という事は、アナタと融合したサーヴァントは「地」属性の英霊ね、きっと。」
オルガマリーはマシュの抗議の声にそう答えると、講義を再開した。
過去の英雄を使い魔にしたものがサーヴァント。そしてこれと契約し、使役する者こそがマスターと呼ばれる。
サーヴァントには七つのクラスがあり、英霊達の逸話・能力によって変化する。人間の魔術師では英霊を丸ごと霊体として再現できるほどのリソース、メモリが足りないため、その英霊が持つ一側面だけを固定化するのだ。
それらの七つのクラスはこう呼称される。剣騎（セイバー）、槍兵（ランサー）、弓兵（アーチャー）、騎兵（ライダー）、魔術師（キャスター）、狂戦士（バーサーカー）、と。
どんな英霊であれ、必ずいずれかのクラスになって顕現するのだ。
またそれらはサーヴァントの正体……英霊としての名前、真名を隠すためのプロテクトでもある。
真名を隠す理由は簡単だ。英霊は強力すぎる故に有名すぎるのだ。例えば『イーリアス』のアキレウス。彼は海の女神テティスによって冥府の川の水に浸けられ、不死身となった。踵の部分を除いて。
英霊の再現である以上、弱点も引き継いでしまう。そのため、サーヴァント達はクラスで真名を隠すのだ。
そこまで話したところで、オルガマリーは何か思い出したらしく、ローガンの方を向いた。
「……補足だけど、あなたには一つ伝えておくものがあるわ、アダムス大尉。」
「俺に？　一体何だ。」
「右手の甲、見てみなさい。」
「？」
ローガンは頭に疑問符を浮かべながら、Ｍ４Ａ１から手を離して右手のグローブを外した。

「……！」
　グローブを外した彼の右手の甲には、赤いタトゥーの様なものが浮かび上がっていた。
「それがマスターである証拠、サーヴァントへの絶対命令権。令呪よ。」
「これが……」
　ローガンは右手の甲を撫でながら、驚嘆の声を漏らした。
「それさえあれば、サーヴァントにどんな命令でも出せるわ。例えば、そう……自害させる。なんてことも可能ね。」
「なるほど、サーヴァントが人間に従う理由はこれか。」
「ご名答。けどカルデアの令呪は通常のそれより効力は弱いから、過信は禁物よ。」
　オルガマリーとの会話が終わると、ローガンは令呪に目を落とす。右手の甲に浮かび上がっている赤い幾何学的な模様は、いびつに歪んだ星……と言うより、翼を広げた鷲のように見えた。
「……話を戻すわ。サーヴァントが真名を隠す理由はもう一つあるの。」
「まだ何か秘密があるのか？」
「ええ。それはサーヴァントの切り札にして真骨頂。その英霊が持つ奇跡、存在が結晶化したもの。それが、」
「所長、お楽しみのところ申し訳ございません。敵性生物を視認しました。あと数秒で接敵します。」
　マシュはオルガマリーの話を遮るようにそう言って対岸の方向を指差す。その方向からはまたもや数体のスケルトンが走ってきていた。
「ヒッ⁉？　さ、さっさと片付けなさい！わた、私は隠れてるからね！」
　スケルトンに気づいたオルガマリーは、先程と打って変わって怯えた様子で柱の陰に隠れた。その情けない姿を見たローガンは苦笑いを浮かべた。
「やれやれだ……さっさと片付けよう、マシュ。」

「了解です。行きます、先輩！」
マシュは自分を奮い立たせるかのようにそう叫ぶと、盾を構えて敵集団へと走り出した。ローガンも援護のためにＭ４Ａ１でスケルトンに照準を合わせ、トリガーを引いた。
その一発の銃声を皮切りに、戦闘は開始された。

「――――――」。

『……モニター越しでも感じる、この緊張感……所長は相変わらずご機嫌斜めのようだね。』
ローガンの後ろを歩いているオルガマリーの様子を見ていたロマンは、ローガンに耳打ちするようにそんな事を呟いた。今の彼女は苦々しい表情を浮かべながら爪を噛んでいる。彼女が不機嫌なのは火を見るより明らかだった。
もちろん、この発言はオルガマリーにも聞こえている。彼女は不躾な発言をした部下を通信機越しに睨みつけた。
「斜めだって？ありゃあ断崖絶壁じゃねえか。」
先頭を歩いていたローガンも、彼女のその様子を見て首を横に振りながら軽口を叩いた。
「いえ、所長の癇癪にも同情の余地ありです。」
ローガンと並行して歩いていたマシュは彼の軽口に異議を唱えた。
「失礼ながら、先輩はカルデアについて無知過ぎます。」
「……まあ、否定はしない。」
「全くもって困りものです。うっかり迷い込んだレベルです。ほぼネコと同義です。」
「ネコ……ねえ。」
痛い所を突かれ言葉を詰まらせたローガンに対して、彼女は少し不思議な表現で注意した。しかし、すぐに彼女も顔を俯かせてため息を吐いた。
「――まあ、わたしも同じようなものですが。」
「そうなのか？」
「はい。勤めて二年ほど経過しますが、よくわかりません。のんびり

忍び込んだレベルです。ほぼワニと同義です。」
「ワニか……まあ確かに、ワニなら何も知らないか……」
マシュの表現は返答に困るな、と心の中で呟きながらローガンは苦笑いを浮かべる。彼女には少し天然なところがあるようだ。
「はい。わたしの知識もカタログにある程度です。でも先輩のために復唱しますね。」
「初めて会った時に説明してくれたあれか。分かった、もう一度頼む。」
「了解です。」
そう言って、マシュは再びカルデアについて説明を始めた。
大体の話はレイシフト前にマシュから聞かされていた事もあり、彼女の話はスラスラとローガンの頭の中に入ってきた。
「……カルデア設立の出資金は各国合同となっていますが、その七割はロンドンの魔術協会――――――アニムスフィア家が出資しています。」
「アニムスフィア……所長さんの実家か？」
「その通りです。」
「へえ……なるほどな。」
その話を聞いたローガンはオルガマリーの方を見て、何かに納得したように頷く。彼は、彼女が若くして所長になれた理由が少し分かったような気がした。
「カルデアは研究施設となっていますが、その重要性から内部規律レベルは軍隊のそれです。」
「……まあ、こんな機密まみれみたいな組織なら妥当だな。」
「ええ。大変厳しい規則と罰則が敷かれていますから、所長の横暴さはむしろ控えめと言います。」
あの沸点の低い所長ですら控えめとは、どれほど厳しい規則なのだろうか。とローガンは身震いする。
「所長は悪党ではありませんが、悪人です。気に入らないスタッフは平気でクビを切ります。」
「嘘だろ？　まるでスターリンだな……」

ローガンは、かつてのソビエト連邦の指導者として悪名高い男の名を出す。大粛清を起こしてソビエトを一時期、存亡の危機に陥れた男だが、政治的手腕はある程度あった男だ。
「スターリン、ですか……いえ、どうでしょう。性格が悪い人、を悪人と言っていいのでしょうか。」
「え？」
「……すいません。おシャレな台詞回しとか、ちょっと慣れていないので。」
マシュは申し訳なさそうにローガンに頭を下げる。
それを見たローガンは何と言えばいいのかと悩み、頬をポリポリと掻く。
「キュ。ンキュ、キュ！」
突然、フォウが鳴き出す。
「きゃあぁあああ⁉？　ちょっと、なにしてるのよアナタたち⁉？」
その直後に、オルガマリーが突然叫ぶ。
「どうした？」
「うしろうしろ！　敵、敵に見つかってるじゃない！」
「なっ⁉？」
ローガンはすぐさま背後へと振り返るが、既に一体のスケルトンが彼の目前にまで接近して来ていた。
「先輩！」
マシュが悲痛な叫びを上げローガンの元へ走り出そうとするが、既にスケルトンは剣鉈を振り上げている。
そのままスケルトンは剣鉈を振り下ろし、肉の裂ける音――――ではなく、金属同士が激突する甲高い音が響いた。
「――――ッ！」
ローガンは腰に差していたククリナイフを引き抜き、スケルトンの剣鉈を受け止めたのだ。
サイドアームのＭ４５Ａ１のハンマー（撃鉄）を引いていなかったため、彼は代わりにＯＫＣ―３Ｓを引き抜き、スケルトンの頚椎の関節部に突き刺し、切断する。

頭部と身体を切り離されたスケルトンは骨格を保てなくなり、崩壊する。
「――――残りは何体だ⁉？」
「て、敵三体、前方から接近して来るわ！」
地面に落下したスケルトンの頭蓋骨を踏み潰したローガンがオルガマリーにそう聞くと、彼女は対岸から走って来るスケルトンを指差す。
「よし、マシュ！　Ｇｏ！　Ｇｏ！　Ｇｏ！」
「了解、行きます！」
ローガンが左手を前後に振りながらそう叫ぶと、マシュはそれに従い、敵に向けて突進した。ローガンもＭ４Ａ１を構え、援護する。
マシュは軽くジャンプし、一体のスケルトンを盾で殴る。スケルトンはそのまま吹き飛び、橋から落下する。彼女は方向転換し、もう一体の敵に狙いを定めるが、別の一体に左腕を斬りつけられた。
「――――ッ！」
傷は深くはなかったが、肌を斬られた痛みにマシュは小さく怯む。隙あり、と言わんばかりに敵は剣鉈を振り上げるが、直後に全身を銃撃され、粉々になる。
「マシュ、まだ一体残ってる！　注意しろ！」
ローガンはマシュの背後にいた敵を指差し、マシュはその敵に盾を振りかざした。叩き付けられた盾は、スケルトンの頭蓋骨を砕き、そのまま無力化する。
「クリア！　戦闘終了！」
周囲に敵がいない事を確認したローガンはそう叫び、マシュの元へと駆け寄る。
「大丈夫か？」
「はい、私は平気です。」
ローガンの問いに、マシュは傷を抑えながら笑顔でそう告げる。
「……ちょっと見せてみろ。」
そう言って、ローガンはマシュの手を引き剥がす。痛みのせいか、彼女は表情を少し歪める。

傷は深くないものの出血しており、一筋の血が垂れている。
それを見たローガンはハアとため息を吐いた。
「傷が出来たならすぐに言え。折角の綺麗な肌なのに傷跡が残るぞ。」
「……すいません。」
ローガンがそう注意すると、マシュは申し訳なさそうに項垂れる。
「意識ははっきりとしてるな……痛みはあるか？」
「はい、少しだけなら。」
「手の感覚に異常は？」
「ありません。」
「そうか。」
ローガンは質問に対するマシュの回答を確認する。異常は特に無し、ただの切り傷のようだ。
「次は応急処置だが……」
彼はそう言った所で、額に指を当てて悩み出す。
この場に、応急処置が出来る人間はいるだろうか。ローガンも止血帯は所持しているが、切り傷に使うものでは無い。ロマンはカルデアにいるため、論外だ。
「クソ、フェルナンデスがいれば……」
かつて彼の部下だった衛生兵の名前をボソリと呟く。
専門的な戦闘救護も、そのための機材も、大半がフェルナンデスの担当だったのだ。
「ちょっと、二人ともこっちへ来なさい。」
唐突に、オルガマリーが二人を呼ぶ。
「どうした？」
マシュとローガンは彼女の元へと向かうと、彼女はマシュを手招く。
「……これくらいの傷なら治療できるわよ。」
「本当か？」
「ええ。」
オルガマリーはマシュの傷に手を当てると、何かを呟き始める。途端にマシュの傷が緑の光で包まれ、塞がった。

傷が塞がると、オルガマリーは手を離す。
「……ふう、これで大丈夫よ。」
「あ……はい。ありがとうございます、オルガマリー所長。」
「凄いな、これも魔術なのか？」
「ええ、その通りよ。」
その光景に、立香は感嘆する。傷口を瞬時に治癒するなど、現代の医学でも不可能だ。それを目の前の女性が、簡単に実現したのだ。驚くのも無理はない。
「治療も終わった事だし、早く行くわよ。」
「了解です、所長。」
オルガマリーが歩き出すと、マシュもそれに追随する。
『やれやれ。所長も落ち着いていると頼りになるんだけどなぁ……』
「いきなりどうした？　俺にだけ通信を送ってくるなんて。」
ローガンもそれに続こうとするが、ロマンから突然通信が入った。
オルガマリーやマシュには通信を入れず、男二人だけの通信だった事もあり、ローガンはロマンを怪訝な目で見る。
『いやあ、アダムス君にはボクからも言っておきたい事があったからね。
所長……オルガマリーも複雑な立場なんだ。』
そう言って、ロマンは話を続けた。
ロマン曰く、オルガマリーもローガン達同様、マスター候補の一人だったそうだ。
そして三年前、前所長……彼女の父が亡くなり、学生であるにも関わらずカルデアを引き継ぐ事になった。自身の家を背負う事となった彼女は、毎日緊張の連続だっただろう。
彼女はカルデアの維持で精一杯だった。そんな中、今回の事件の発端であるカルデアスの異常が発見されたのだ。今まで保証されていた百年先の未来が視えなくなったせいで、スポンサー達からの非難の声が山のように届いた。
『一刻も早い事態の収束を。』それが彼女に課せられたオーダーとなった。

それに加え、彼女にはマスター適性がない事が判明した。
名門中の名門、十二のロードの一家、魔術協会の天体学科を司るアニムスフィア家。その当主がマスターになれないなど、スキャンダルもいい所だ。どれだけ陰口を囁かれたのかは想像に難くない。勿論、その声は彼女本人にも聞こえていただろう。
そのような状況でも彼女は所長として最善を尽くしている。この半年間、ギリギリで踏みとどまっている。
キャパオーバーしているので、ロマンとしてもメンタルケアに来てほしいそうだが、中々都合が合わないらしい。
『――――そんな訳で彼女は心身共に張り詰めている。キミに辛く当たったのは、何もキミが嫌いな訳じゃないさ。』
運が悪いにも程がある、とローガンは心の中で呟く。
「……あいつの気持ちも分かる。悪人……では無いだろうな。」
『そう言ってもらえるとボクも嬉しいよ。
あ、でも所長は悪人だよ？　ただ外道とか残忍とか、クズとかゲスじゃないのは保証できる。根はどこまでも真面目だから。』
「……お前意外と辛辣だな。」
『えぇ、そうかな？』
ロマンはそう言って笑うと、ローガンも釣られて薄らと笑みを浮かべる。
オルガマリー達の方に目をやると、彼女達との距離は既に５０ｍ程開いていた。
『ともかく、今頼れるのはキミたち三人だけなんだ。ケンカせず、仲良く調査を続けてくれ。』
「了解した、出来るだけ善処する。アウト。」
ローガンは通信を切ると、前方を歩いている二人に追いつくため、走り出した。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．９『新たな敵』

とある港。その埠頭にて、金属同士が接触する音が連続して響いている。
「ハァッ！」
その掛け声と共に、巨大な盾が動く骨だけの亡者に叩き付けられる。その衝撃により、骨同士の接合部は外れ、亡者はバラバラになって吹き飛び、残骸は海に落下した。
盾の持ち手の少女――――マシュ・キリエライトは崩れた敵の残骸を見て、フゥと息を吐く。
「敵性生物、排除しました」
「戦闘終了。よくやったな、マシュ」
「はい、ありがとうございます」
ローガンはＭ４Ａ１の銃口を下ろしてマシュに近づくと、ポンと肩を叩く。マシュはローガンの方を向くと、嬉しそうに微笑んだ。
「あの怪物を見た時はどうなるかと思ったけど、さすがはサーヴァント体、スペックでは圧勝ね」
二人の背後にオルガマリーも続く。彼女は海に落ちなかった頭蓋骨を見て、ハンと鼻で笑う。
「……姿が怖いのは変わらないのですが……ところで所長。質問があるのですが」
「？　いいわよ、何？」
「資料にあった冬木の街と、この冬木の街はあまりにも違います」
マシュはそう言って周りを見渡す。ローガンも同じように周囲を見る。
確かに、この街はおかしい。辺り全体で火災が発生しているのもそうだが、何よりあの骸骨達のような怪物が出現している事だ。あんな怪物が彷徨いているなど、異常以外の何者でもない。
「一体この街に何が起きたのか、所長はどうお考えですか？」
マシュの問いに、オルガマリーは顎に手を当ててしばらく思慮す

る。
「……そうね。きっと歴史がわずかに狂ったのよ。そうとしか思えない」
「歴史が……狂った？　並行世界みたいなものか？」
オルガマリーの返答に、ローガンは頭上に疑問符を浮かべる。
「並行世界とは少し違うわね。
……いいわ、説明してあげる。二人とも、一度しか言わないからよく聞きなさい」
そう言って、オルガマリーは説明を始めた。
オルガマリーの説明はこうだ。
カルデアはカルデアスという地球モデルで未来を観るのと同時に、ラプラスという使い魔で過去の記録を集計する。
彼女曰く、公にならなかった表の歴史、人知れず闇に葬られた情報を拾ってくるのがラプラスの仕事だそうだ。
そのラプラスによる観測で、２００４年のこの街で特殊な「聖杯戦争」が確認されている。
その聖杯とは勿論、アーサー王伝説等の聖杯伝説や最後の晩餐で名高いあの聖杯だ。魔術世界では、所有者の願いを叶える万能の力。あらゆる魔術の根底にあるとされる魔法の釜、などと呼称されている。
冬木の街にいた魔術師たちがその聖杯を完成させ、その起動のために七騎の英霊を召喚した――――それが聖杯戦争の始まり。この街では人知れずサーヴァントが呼ばれていたのだ。
その冬木の聖杯戦争のシステムは単純だ。七人のマスターがそれぞれ競い合い、最後に残った者が聖杯を手にする、というもの。
カルデアがその事実を知ったのは２０１０年。オルガマリーの父である前所長はこのデータを元に召喚式を作った。
それがカルデアの英霊召喚システム・フェイト。ラプラス、カルデアに続く第三の発明。シバは既に亡くなっているレフ教授の発明――――オルガマリーは自身との共同開発だと強調したが――――であるため、ここには含まれないのだそうだ。
とどのつまり、この冬木がサーヴァント発祥の地なのだ。かつてこ

こで七騎のサーヴァントが競い合い、結果はセイバーの勝利で聖杯戦争は終結した。街は破壊される事なく、サーヴァントの活動は人々に知られる事なく終わった――――――――はずだったのだが、今はこの状態だ。特異点が生じた事で結果が変わったと考えるべきだとオルガマリーは言う。

２００４年のこの異変が人類史に影響を及ぼし、その結果として百年先の未来が見えなくなった。だから、この異変の修復こそがカルデアの使命なのだ。この領域のどこかに歴史を狂わせた原因がある。

「――――それを解析、ないし排除すればミッション終了。わたしもアナタたちも現代に戻れるわ」

「……そうか」

オルガマリーの話をメモに書き写していたローガンは、今回の件はそのような簡単な事ではないように思えた。あの爆発の原因すら判明していない状況では、オルガマリーの考えは少し楽観しすぎのように感じる。

とはいえローガンの考えも、考え過ぎだと言われればそれまでのものだ。ローガンは大人しく、不安を自分の中に押し込んだ。

「ところでだが、カルデアではサーヴァントを召喚しなかったのか？」

ふと頭に浮かんだ疑問を、ローガンはオルガマリーに聞く。

英霊召喚システムが完成しているなら、既にサーヴァントがカルデアにいてもおかしくないと考えたからだ。

「もちろんしました。でもうまくいかなくて、成功例は数えるほどよ。資料では三体だけ呼び出せたらしいけど、私は二体しか知らないわ。前所長の頃に第一号。私が所長になってから第二号、第三号」

「三体か……」

予想外の少なさにローガンは唸る。オルガマリーの言葉から考えるに、成功率も低いらしい。

確かに、マシュと同程度の強さを持つものが三体と聞けば聞こえは良いが、特異点に派遣するつもりだったのならそれの二倍は必要だっただろう。

「……それじゃあ、マシュが融合したっていうサーヴァントは何番目

の奴なんだ？」
「第二号よ。第三号はもう知ってるでしょ」
「？」
「カルデアに住み着いたあの変人。レオナルド・ダ・ヴィンチよ」
「――――ダ・ヴィンチ？　もしやと思うが――――」
その質問を遮るように、カタカタと聞き覚えのある音が響く。
三人が音のした方向に振り向くと、そこには弓や剣鉈を持った骸骨が同じようにこちらを向いていた。
「……チッ、どうして何時もコイツらは話の途中に来るんだろうな」
ローガンは舌打ちをすると、Ｍ４Ａ１のセーフティレバーをセミオートに合わせ、スケルトン達に向ける。
「そんな悠長なこと言ってる場合ですか！　蹴散らしなさい、二人とも！」
「分かったからそう喚かないでくれ……
マシュ、お前は剣持ちを狙え。俺は弓持ちをやる」
盾を構えているマシュの肩に手を乗せながら、ローガンは敵に指を指して彼女に指示を出す。
「了解です、マスター」
「俺が発砲するのと同時に突っ込め、いいな？」
「はい」
マシュの返事を聞いたローガンは無言で頷くとＭ４Ａ１を構え、トリガーを引いた。

――――――――――――――――――――

「……ふう。戦闘終了です、マスター。今回もなんとかなって、安心です」
「ああ、よくやった。感謝する、マシュ」
「……はい。お役に立てて幸いです」
ローガンの言葉にマシュは目を細める。その表情を見て、ローガンも僅かに笑みを浮かべる。

「……ねえマシュ。あなた、もしかして宝具を使えない？」
二人の後ろから戦闘の様子を見ていたオルガマリーはマシュに近づくと、深刻そうな顔つきで彼女にそう尋ねた。
その質問に、マシュも表情を暗くする。ローガンはそんな二人の様子を怪訝な表情で見つめ、オルガマリーが口にした宝具がどのようなものかと疑問を浮かべる。
「……そのようです。わたしはわたしに融合してくれた英霊が誰なのかもわかりませんし、宝具を発揮することも出来ません」
マシュが申し訳なさそうな表情でそう言うと、オルガマリーは嫌な予感が的中したという様子でため息を吐く。
「……二人とも。一つ聞きたいんだが……その宝具っていうのは、一体何なんだ？」
二人のやり取りに痺れを切らしたローガンは小さく咳払いをしてそう二人に尋ねると、二人は一緒にローガンの方に振り向いた。
宝具といった、サーヴァントに関わるものがどういうものかも分からない状態で、マシュの指揮を円滑に進めるのは難しい。指揮官としてそのような状況は好ましくないと感じたのだ。
「すいません。先輩への説明が後になっていました」
そう言ってマシュはローガンに頭を下げる。
「……サーヴァントには宝具という固有の特殊技能が備わっています。
英雄たちそれぞれの伝承、偉業にちなんだ、かっこよかったり微妙だったりする切り札です」
「伝承や偉業というと、アーサー王の聖剣のようなものか？」
ローガンはそう言って、カルデアの入館時に受けた模擬戦闘を思い出す。マシュが言う事から予想するに、あの鎧を着た少女が放った光線が宝具なのだろう。
「はい。ですが、私はその宝具をうまく扱えません」
「うまく扱えない？　使うこと自体は出来るのか？」
「……宝具そのものは何とか使えるのですが、出力は低下していますし、真名解放による真価も発揮できません。

そもそも私のこの武器が〝何に由来するものなのか〟さえ分からないのです」
「……なるほど」
やはり真名が不明である事が彼女の足を引っ張っている最大の原因のようだ。
これも自分がマスターとして未熟だからなのだろう。ローガンはそう思い、申し訳なく感じた。
「ですので、わたしの事は欠陥サーヴァント、あるいは成長性と可能性に満ちたできる後輩、とご期待ください」
「……悪いな。俺がもっとまともなマスターなら、こんな事にはならなかっただろうに」
ローガンはそう言って申し訳無さそうにマシュから視線を逸らす。
彼自身は、マスターとしての己の未熟さを恥じていただけだった訳だが、マシュは自分が言ったことで気分を害したのではないのかと少し焦った。
「そんなに気に病まないで下さい。わたしが融合した英霊の情報をリードできずとも、先輩がマスターとして成長すればおのずと分かります」
「そうなのか？」
マシュの言葉を聞いたローガンは即座に視線をマシュの方へと戻す。その目には、貪欲な炎がちらついていた。
突然こちらを向いたローガンに驚いたマシュは、思わず後ずさりかけてしまう。
「その通りよ」
ローガンの問いに、マシュより先にオルガマリーが答える。
「マスターは契約したサーヴァントのパラメータやスキル、情報を解析できる。アナタが一人前になればマシュのサーヴァント情報も解析できるでしょう」
オルガマリーの説明を、ローガンはポーチから取り出したメモとボールペンで書き取る。彼のメモには、他にもサーヴァントや特異点に関する情報が書き込まれていた。

「俺が成長すればいいって事だな……いい事を聞かせて貰った、ありがとう」
「え、ええ……」
ローガンはそう言うと、オルガマリーに親指を立てる。その様子にオルガマリーは少し驚く。彼女は軍人というのは学の無い者達ばかりだと思っていたため、目の前の男の予想外の態度に驚いたのだ。
「……とにかく。この先、他のサーヴァントと契約した時も同じよ。まずはサーヴァントの宝具と真名を知る事。
信頼が増せば増すほど、そのサーヴァントの能力は上がっていくわ」
その言葉を、ローガンはスラスラとメモに書き写していく。全て書き終わると、ローガンは次の言葉に耳を傾ける。
「まあ、アンタなんかにそんな才能はないでしょうけど。マシュをうまく使えないのもその証拠よ」
ローガンはその言葉を書き写そうとするが、すぐにため息をついてボールペンを動かす手を降ろす。
そのまま彼はウンザリとした様子で顔を上げた。
「おい、また嫌味か？」
「失礼ね。私は事実を述べてるだけよ」
「事実って……」
オルガマリーの頑固な様子にローガンは思わず呆れる。
やはり彼女は性格に問題がありすぎる。それ以外はマトモだと言うのにだ。
「カルデアのレイシフト機能が回復すれば一流のマスターをシフトさせるわ」
「そしたら俺はすぐにサヨナラバイバイって訳か」
ローガンはそう言って左手でシッシと追い払うようなジェスチャーをする。
とは言ったものの、彼自身今回の騒動の処分がそんな簡単なものだと思ってはいない。
「いいえ。今回の騒動が終息するまではカルデアに残ってもらうわ」

「……やはりか」
オルガマリーの返答に、予想が的中したと言わんばかりに納得した様子でローガンは軽く腕を竦める。
今回の騒動。カルデアが本当に国連隷下の組織ならば、彼は国連視察団に重要参考人として事情聴取されるだろう。そしてその後に待ち受けているものは言わずもがな、軍法会議だ。
「まあ、事態が完全に収束すればアンタはお払い箱よ。それまでカルデアの隅で震えてなさい」
「よく言うよ。戦闘が始まるといつも俺より後ろで震えながら隠れてるくせに」
ヤレヤレと首を横に振りながらローガンがオルガマリーをからかう。
からかわれた彼女は拳を握りしめると、顔を少し紅潮させた。
「震えてない！　ちっとも！　アナタね、目上の人間を少しは敬いなさいよね⁉？」
オルガマリーはローガンに詰め寄ってそう怒鳴った。
その様子にローガンは苦笑いを浮かべる。少しは煽り耐性を付けろ、と彼は心の中で呟いた。
「ハッ、馬鹿言うな。少しは敬われるような人間になってから言え」
「何ですって⁉？」
「おっと！」
ローガンの煽りで頭に血が昇ったオルガマリーは掴み掛かろうとするが、ローガンはヒョイと彼女の腕を躱す。
すぐ側でそれを傍観していたマシュは、二人の間に割り込むと小さく咳払いをする。それでやっとオルガマリーは落ち着きを取り戻した。
「……互いに理解度が上がったようで結構です。では、新手が来る前に移動しましょう」
二人のやり取りに半ばウンザリしていたマシュは二人の顔を交互に見ると、業務連絡のように淡白な口調でそう言った。
「……そうだな。俺も少し遊び過ぎたな、反省する」

「……ごめんなさいマシュ。そこの男があまりに無礼な事を言うものだから、つい――」
「つい？　あれが平常運転じゃないのか？」
「そんな訳ないでしょう⁉？　馬鹿じゃな――」
「お二人とも！」
また再燃し始めた二人をマシュが一喝すると、二人は――片方はシレッとした様子で、もう片方は渋々という様子で――言い争いを止めた。
「それで？　所長、次はどこに向かわれますか？」
「……そうね、次は――」
マシュの質問にオルガマリーは左手首の端末でマップを開き、次の目的地を指定し始めた。

ビルが立ち並ぶ都市の中心部から少し離れた丘の上にある教会。ここは冬木第三位の霊脈の上に建てられており、内部の調査の結果、何らかの魔術的な痕跡が発見された。だがそれ以外には何も無い、ただの廃墟であった。
件の教会から数十メートル離れた市街地へと続く道路の上から、ローガンはボロボロの教会を見つめてる。
教会は内外のどちらもひどく損傷していた。尖塔は折れて地面に落下しており、建築物もほとんどが崩れ、瓦礫まみれの礼拝堂からは鬱蒼とした黒い曇天が覗いている。
「…………」
そんな教会の様子を、ローガンは険しい表情で見ている。
ローガンはクリスチャンとはいえ信仰心は無いに等しいため、教会が破壊されていてもそこまで心が揺れ動く訳では無い。
彼は今後の調査について思慮していたのだ。ここまで様々な場所で調査を行ってきたが、未だにこの特異点の原因に繋がるものは発見出来ていない。時間はまだあるにせよ、ここまで進捗が無いのは流石

にどうかと感じたのだ。
「とはいえ、素人が勝手に行動するとロクな事が起きないだろうし――」
自分が首を突っ込んだ所で何が出来る。そう心の中で言葉を続けたローガンは首を横に振った。
今の彼に出来る最善の行動は、専門的な知識と指揮能力を持つオルガマリーの命令を実行して、マシュと共に敵襲から彼女を守る事。今はそれを遂行する事こそが、今回の件を解決するのに一番貢献できる事だろう。
「……さてと、あの二人の所に行くか」
そう言ってローガンは教会に背を向け、数メートル先にいる二人の元へ向かった。
二人は市街地へと続く道の中央で立っており、都市部を向いているオルガマリーをマシュが傍らで護衛するというような形となっている。
「どこまで行っても焼け野原……住民の痕跡もないし、一体何があったのかしら……」
オルガマリーは何やら独り言を呟いているらしく、顎に手を当てて俯いている。
「そもそもカルデアスを灰色にする異変って何なのよ……未来が見えなくなるという事は人類が消えるという事……」
そう呟いたオルガマリーは少しハッとしたような表情を浮かべる。
「もしかして、特異点では抑止力が働かない？　じゃあやっぱりボルトみたいなものなんだ、ここ……
人類史に点在する致命的な滅亡の選択……それを悪い方に間違えちゃったのがこの結果とか……」
どうやら何か有力な仮説を発見したようだが、魔術世界に関する知識がほとんど無いローガンには、何を言っているのかさっぱりだった。
『おや、所長の独り言が始まったね。こうなると彼女は長いよ』
右手首の端末から、Ｄｒ．ロマンの映像と共に彼の音声が流れる。

ロマンの表情や態度から察するに、どうやら彼女の独り言はよくある事のようだ。
「放って置いていいのか、アレ？」
オルガマリーの方へと視線を向けながら、ローガンは画面越しのロマンにそう質問する。
『大丈夫だよ。敵性反応は無いし、何より今の彼女を刺激するのはやめておくべきだからね』
ロマンはヤレヤレという様子でそう答える。
どうやらオルガマリーは自身の水を差されるのを嫌うタイプらしい。そっとして置いた方が良いだろうとローガンは考えた。
『アダムス大尉。あたりは安全そうだし、少し休んではどうだい？』
「それもそうだな――――って、おいロマン。大尉は必要無いと言っただろ」
『いいじゃないか。ボクとしてはこっちの方がしっくり来るし』
ローガンの指摘に対して、ロマンはのほほんとした様子でそう返す。
「ハァ……分かった、何とでも呼べ」
ロマンの間抜けた表情を見ながら、ローガンは半ば諦めたようにため息を吐く。
端末を操作して通信を音声のみに切り替えると、ローガンは近くにあった手頃な瓦礫に腰かけた。
「お疲れ様です、先輩。レーション食べますか？」
マシュはどこからかプラスチック製の包装紙に入ったレーションを取り出して、ローガンに差し出した。
「……そうだな、頂くとしよう」
そう言ってローガンはレーションを受け取り、包装紙に印刷されている文字に目を通す。幸いにもこれはＭＲＥでは無いようだ。それを確認したローガンは少し安心する。
包装紙を開いて中身を確認すると、中にはブロック状のビスケットのような固形物が数個入っていた。
ローガンはその内の一個を口に放り込み、咀嚼する。合成物質で作

られたであろう不思議な甘みが水分と引き換えに口腔内に広がるのを感じる。ローガンは嚥下すると同時にハイドレーションシステムのチューブを咥え、水を飲んだ。
　お世辞にも美味いとは言えるものではない。だが食べられる物があるだけでもローガンにとっては十分だった。
「そういえばだがマシュ。お前の方こそ体に異常はないのか？」
　ふと、ローガンは隣で立っているマシュにそう聞く。
「体……もしかして、サーヴァントになって問題は無いのか、という質問ですか？」
　マシュの言葉に、ローガンは小さく頷く。
「ああ。サーヴァントの事なんざ俺は全く分からんし、ましてやそれがデミ・サーヴァントなら以ての外だ。
　それに、現状ただ一人の部下の状態を指揮官が把握しないでどうするんだって話だしな。」
　ローガンはそう言うと、レーションを一つ口の中に放り込む。
　マシュは少し驚いたような表情を浮かべると、自身の身体に視線を移した。
「……それは、なんとか。戦うのが怖いくらいで、体は万全です」
「……そうか」
　口の中のレーションを飲み込むと、ローガンはそう言って頷いた。
　戦うのが怖い。マシュのその言葉は至って普通のものだ。死と隣り合わせである戦場において、恐怖を感じない人間はいない。いるとするなら、それはもはや狂人や異常者と言っても差し支えはないだろう。
　ローガンとて、恐怖が無い訳ではない。ただ２０年に及ぶ従軍の中で次第に戦場に対する恐怖が薄れ、それを抑え込む術を身に付けたというだけだ。
　ましてやマシュはまだ戦い始めて数時間しか経っていない。そんな人間が簡単に恐怖を克服出来る訳がないのだ。
「それじゃあもう一つ聞かせてくれ。
　……俺はお前のマスターとして上手くやれているか？」

ローガンがそう聞くと、マシュはニコリと嬉しそうな笑みを浮かべる。
「もちろんです。わたしに不満はありません。先輩は世界で一番のマスターではないかと」
「お、おう。そうか……」
余りに嬉しそうな様子でマシュが答えてくるので、ローガンは少し驚いてしまった。
「まあ、なんだ……不満があれば遠慮無く言ってくれ。こちらも善処す――――」
『ごめん、休憩はそこまで！　周囲に生体反応がある！』
「クソ、またか！」
ロマンの通信に反応してローガンは捨て台詞を吐きながら即座に立ち上がり、傍に置いてあったＭ４Ａ１を手に取る。
市街地の方向に目をやると、既に数体のスケルトンがこちらに向かってきていた。
ローガンはＭ４Ａ１を、マシュは盾を構える。
「マスター、指示をお願いします！」

乾いた音と共に、最後の一体の頭蓋骨に銃弾が叩き込まれる。人間であれば脳幹部があるであろう場所を撃ち抜かれたスケルトンは、そのまま音を立てて崩れ落ちた。
「……頼むからこれで最後にしてくれよ」
トリガーから指を離し、Ｍ４Ａ１を下げたローガンはウンザリとした様子で弾倉内の弾薬を確認する。確認が終わると、彼は傍らに落ちている頭蓋骨を見つめながらある事を思考し始めた。
先程の亡者達。最初に遭遇した個体に比べて、幾分か動きの機敏さと不規則性が増しているようにローガンは感じた。その証拠に、彼は先程の戦闘で始めて弾丸を外してしまったのだ。自慢という訳では無いが、この特異点における戦闘でローガンは未だに一発も弾丸を外

した事はなかった。理由は簡単で、敵の動きが緩慢だったからだ。
だが現在はどうだろうか。奴等の動きはほんの少しだが機敏になっていた。これまでの個体とは何かが違うのだろうか。ではその何かとは一体――――
「――――――ぱい？　先輩、聞こえてますか？」
ローガンは自身に呼びかける声に反応して顔を上げると、マシュが少し心配そうな様子で彼の顔を覗き込んでいた。
「――――っああ、すまん。少し考え事をしてた」
マシュに気付いたローガンは一気に現実に引き戻される。どうやら彼は意識を全て思考に回していたようだ。
かつての自分なら近付かれる前に気付いていただろうに。ローガンはそう思いながら、18年という歳月で劣化してしまった自身とその能力を恨んだ。
「もう完全にサーヴァントとしてやっていけてるわね。ここの程度も知れたし、もう怖いものはないんじゃない？」
先程の戦闘の様子を見ていたオルガマリーは口元を吊り上げながら、マシュにそう聞く。
その言葉を聞いたマシュは、少し暗い表情を浮かべて俯いた。
「それは……どうでしょうか。どんなにうまく武器を使えても、戦闘そのものは……」
マシュが返答を続けようとすると、オルガマリーの端末から通信のコール音が鳴り響く。ロマンからの通信だろうと、その場の全員が予想した。
「全く……何よロマニ？　こっちは――――」
『ごめん、話はあと！　すぐにそこから逃げるんだ三人とも！』
「何だと？」
珍しく酷く焦った様子で通信をするロマンに、ローガンは何か只ならぬ雰囲気を感じる。
『君達の方に反応が一つ、物凄い勢いで接近しているんだ！　しかもこの反応は――――サーヴァントだ！』
「なっ……!?？」

サーヴァント。それはマシュと融合したものと同じ存在だ。そのサーヴァントがこちらに急速接近している。味方、という事はまず無いだろう。ならそのサーヴァントがローガン達にとってどういう存在かは明白だろう。

「敵か――――！」

そう言った矢先に、ローガンは背筋に凄まじい悪寒が走るのを感じた。

何かが来る。早く逃げろ。ローガンの直感はそれを即座に感じ取り、そう警鐘を鳴らしている。

『アダムス大尉、戦っちゃダメだ！　マシュにサーヴァント戦はまだ早すぎる……！』

「言われなくても分かってる！　二人とも、逃げるぞ！」

「は、はい！」

「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ！」

マシュとオルガマリーがその呼び掛けに反応したのを確認すると、ローガンは都市部へと続く道を走り出す。それに続いて二人も走り出した。

今はとにかく逃げなければ。今のマシュには彼女自身と同程度か、それ以上の実力の相手を倒せる程の力はない。まずは出来るだけサーヴァントと会敵するまでの時間を稼ぐ事だ。どう戦うかはその間に決めなければ。サーヴァントにこの銃が効く事をローガンは祈った。

「……フフ。逃がしませんよ」

全力疾走する三人の背後からは、着実に黒い影が迫って来ていた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．１０『ＶＳ．サーヴァント』前編

廃墟と化したビル群の谷間を、三人が走り抜けている。
「ハァ……ハァ……どうだ、逃げ切れたか⁉？」
ローガンは右腕の端末にそう怒鳴りつける。
逃げ切れたかと聞いてはいるが、追跡して来ているサーヴァントが彼等を見失ったとは彼自身、露ほども思っていない。
その証拠に、背筋にはあの悪寒が今もこびりついている。
『駄目だ、まだ追って来てる！　それどころかどんどん距離を詰められてる！』
「クソッ！」
ロマニの報告にローガンは毒吐く。予想していた事とはいえ、追跡を断念したのではと心の中では少し期待していた。だがその期待を裏切られた今となっては逃げるしか術は残されていなかった。
「――――――先輩！」
突然、一番後方で走っていたマシュが前方を指差し、悲痛な叫びを上げる。何事かと思いローガンは前方に目をやると、そこにあった光景に絶句した。
「……冗談だろ⁉？」
ローガン達の前方数十メートル先にある道路は、ビルの瓦礫と大型タンクローリーの残骸がバリケードとなり、行き止まりとなっていた。バリケードの高さは、ローガンの目測でおよそ３ｍ。マシュなら飛び越えられるのだろうが、ローガン一人やオルガマリーにとっては無理な注文だった。
現在彼等が走っている道路に脇道は無い。つまり、彼等は完全に袋小路に入ってしまったのだ。
進めないと確信したローガン達は走るのをを止めてしまう。
『サーヴァント反応、距離３０メートルを切った！』
ロマニは計器類が測定する残酷な現実を通信で伝える。
「どうするの、もう逃げられないわよ！」
「そんな事は分かってる！」

オルガマリーの言葉に、ローガンは思わず声を荒げる。
その時、背後で何かが降り立つ音が聞こえた。その音と同時に、ローガンはこれまでで一番の悪寒を感じる。
「見知らぬサーヴァントに見知らぬマスター……ああ、なんて瑞々しい……」
美しい透き通った、けれどもどこか恐ろしい女性の声。ねっとりと舐め回すような喋り方に、ローガンは全身の毛が逆立つような感覚を覚える。
ヤバイ、殺される。ローガンはそう直感した。
ローガンは振り返り、即座に声のした方向へＭ４Ａ１を向ける。既にマシュは盾を構え、臨戦態勢に入っている。
その声の主は女性だった。陶磁器のような病的なまでに白い肌。豊満で女性的な肢体に黒を基調とした扇情的な服装を纏い、頭部を覆っているフードからは長い髪が垂れ、整った顔と金色の瞳が覗いている。
美しい女性だ。だがその両手には、歪な槍のような禍々しい得物が握られている。
「あれがサーヴァントか……！」
ローガンの言葉に、女は端正な顔に邪悪な笑みを浮かべる。女の全身から溢れ出るおぞましいほどの殺意に、ローガンは自身の頬に冷や汗が伝うのを感じる。
「確かにサーヴァントです。でもマスターの姿がどこにも……」
マシュは盾を構えながら疑問を口にする。ローガンはサーヴァントの周りを確認するが、確かに周辺にはマスターらしき人影は確認出来ない。
ローガンの記憶が正しければ、サーヴァントが限界するためには魔力補給源となるマスターが必要なはずだ。
「ここはもう狂った世界よ。マスターのいないサーヴァントがいても、おかしく無いわ……！」
オルガマリーが銃の形にした手をサーヴァントに向けながらそう答える。

ここは特異点。通常が異常に、日常が非日常に変貌した世界だ。イレギュラーの一つや二つは普通に起こりうるという事か。
すると突然サーヴァントは両手の得物を構え、こちらへゆっくりと近付き始めた。
「……どちらにせよ、俺達を見逃してくれるって訳ではないな」
じりじりと距離を縮めてくるサーヴァントに、ローガンは銃口を向けながらそう毒吐く。
既に彼等に残された道は二つ。戦うか、死ぬかだ。
「……戦うしか、ありません」
マシュは声恐怖を押し殺した声でそう言うと、一歩前に出る。
現状、サーヴァントとまともに張り合えるのは三人の中で彼女だけだ。彼女を前に出すのは妥当な判断だろう。だが精神面では不安がある。未だに恐怖を強く感じている彼女が、サーヴァントを相手に勝てるだろうか。
「……こちらも可能な限り援護する……頼めるか、マシュ」
ローガンは険しい表情でＭ４Ａ１を構えながらマシュに近づき、彼女の側で耳打ちする。
「……はい。最善を尽くします……！」
マシュが盾を構えながら、サーヴァントに向けてゆっくりと歩き出す。
「ああ、勇ましい……そして初々しい……」
その様子を見つめているサーヴァントは恍惚の表情を浮かべる。
「貴方、サーヴァントとして戦うのは初めて？　なら先輩として教えてあげる」
サーヴァントは自分の手中にある槍を回転させる。歪んだ切っ先が炎を反射して輝いた。マシュは腰を屈め、盾を地面に接触させ、固定する。
「言動には気を付けなさい。……戦うと口にしたら、もう行為は始まっているのですからっ！」
そう言い放つと、サーヴァントは槍を構えて跳躍した。
マシュに向けて跳躍したサーヴァントは、彼女が持つ盾にその槍を

振り下ろす。瞬間、金属同士がぶつかり合う鈍い音が響く。
「くっ……！」
攻撃の衝撃が強かったせいか、マシュの口から苦悶の声が漏れる。その様子を見たサーヴァントはニタリと笑い、一旦後ろに下がると再び槍を振り下ろした。
連続で盾に攻撃を加えるサーヴァントに、マシュは何とか耐えているものの防戦一方だ。
「必死ですね、大変良い」
連続で攻撃を繰り出しているにも関わらず、サーヴァントは顔色一つ変えずに笑みを浮かべている。その笑みはまるで、獲物を痛め付ける肉食獣のようだ。
「でも気を付けなさい。私の槍は不死殺しの槍。この槍でつけた傷は何をしても治らない、肉体を完全に治癒できる奇跡であろうとも！」
その言葉に傍らで戦闘を見ていたローガンは耳を疑った。
どのような術を施しても治癒する事のない傷をつける槍。そんな恐ろしい物が実在している。それどころか目の前のサーヴァントが使用している事に衝撃を覚える。
もしあの槍で深い傷を受けるような事があれば、その傷は治る事なく傷を負った人間を苦しめ続けるだろう。サーヴァントの言い方からすると、その効果はマシュのようなサーヴァントにも有効なのだろう。
「分かりましたか。僅かでも受け損なえば――――！」
サーヴァントは一呼吸置いて、マシュの盾を槍の石突きで突く。槍の勢いは凄まじく、盾との間から火花か電流のような何かを撒き散らしている。
「貴方は一生、サーヴァントとして不出来になるのです！」
サーヴァントが槍を一気に押し込み、盾を弾き飛ばす。マシュは一瞬体勢が崩れたが、すぐに復帰して盾を構えた。
「ハァッ！」
だが彼女が立て直す間にできた一瞬の隙をサーヴァントは見逃さない。間髪入れずに槍をマシュに向けて振り下ろす。

幸いにもマシュは槍の穂の部分に当たりはしなかったものの、柄の部分が彼女の左肩に命中する。
「――――ッ！　……やぁぁぁぁっ！」
柄の直撃を受けたマシュは一瞬怯んでしまうものの、すぐに体勢を立て直し、サーヴァントに向けて突進する。
二人のサーヴァントが衝突したことにより、砂埃が舞い上がる。マシュはサーヴァントと共に砂埃の向こうへと消えていった。
「マシュ！」
ローガンはそう呼び掛けるが、返事はない。代わりに帰ってくるのは金属がぶつかる音だけだ。
「……クソッ！」
悪態をついたローガンはＭ４Ａ１のフォアグリップを外し、その代わりにバレルにＯＫＣ―３Ｓを装着した。
あのサーヴァントは近接戦闘を主としている。そのために、ローガンも近接戦闘に対応出来るようにＡＲ―１５系列小銃用の銃剣であるＯＫＣ―３Ｓを取り付け、銃剣格闘では邪魔になるフォアグリップを外したのだ。
「待ちなさい！」
準備が完了し、マシュの援護に向かおうとしていたローガンをオルガマリーは唐突に呼び止める。
「今度は一体何だ!?　早く援護に向かわないとマシュが死ぬぞ！」
「アナタが行った所で足手纏いにしかならないのよ！」
「何だと……!?」
ローガンは怒りの篭った声を漏らすと、思わずオルガマリーに掴みかかりそうになる。
「足手纏いになると何故言い切れる!?　あのままマシュ一人で戦っても勝ち目は無いだろ！」
「アナタの言い分も分かる！　でもアナタじゃサーヴァントには太刀打ちできないわ！」
オルガマリーの言葉にローガンは疑問を覚える。確かにローガンとサーヴァントの実力差は圧倒的で、太刀打ちできないというのも至

極真っ当な話だ。
だがローガンの手には銃が握られている。あのサーヴァントは近接戦闘が主体であり、距離をとって射撃すればある程度のダメージを与える事は可能なはずだ。それなのに、なぜオルガマリーは足手纏いになると言ったのだろうか。
「一体どういう事――――」
「よく聞きなさい！　サーヴァントに銃は効かないの！」
「――――何？」
ローガンは再び声を漏らす。だがその声に孕んでいた感情は、怒りではなく驚愕だった。
「サーヴァントは高位の霊体、通常の物理攻撃は効果が無いの！　だからアナタがいくら銃弾を撃ち込んだ所で、サーヴァントには傷一つ付かないわ！」
通常の物理攻撃が効かない。それはつまり、銃弾も、手榴弾の爆風や破片も、ナイフの斬撃も、ローガンが持ち得る攻撃の手段の全てがサーヴァントには通じないという事だ。
「……冗談だろ」
ローガンは俯き、手を握り締める。
肝心な時に役に立たない。何百人もその手で殺してきたくせに、少女一人助けることすら出来ないのか。
ローガンはそんな自身の無力さに声を震わせ、Ｍ４Ａ１のハンドガードとグリップを強く握りしめる。
「……それでもだ」
それでも、何かしなければならない。このまま何もしないままマシュを見殺しにするより、マシュを援護して彼女が勝利できる確率を上げた方が断然有意義だ。
ローガンはＭ４Ａ１を構え直すと、マシュとサーヴァントが戦いを繰り広げている方へと走り出した。
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　さっきの話聞いていたの!?」
「ああ勿論、全部聞いていた」
「それならどうして――――」

オルガマリーの問いにローガンは振り向く。その表情には、頑なな決心が浮かんでいた。
「もう部下の死んでいく様なんざ見たくないんでな。……銃弾が効かなくても、囮ぐらいにはなれる」
そう言ってローガンは再び走り出す。その行動にオルガマリーは数秒間呆気にとられる。
「……ああもう！　なんであんな馬鹿な真似ができるのよっ！」
ハッと我に帰ったオルガマリーは、そう叫んで既に遠ざかったローガンの背中を睨み付けた。

走りながら、ローガンは心の中で自嘲する。
今まで何度も無謀な事をこなして来たが、今回のそれは群を抜いている。例え彼が囮になれたとしても、勝てるかどうかは実際の所、不明瞭だ。下手すればマシュ共々殺される可能性すらある。
戦場において、僅かな確率に賭けるなどという行動は大抵が愚行となる。わざわざ危ない橋を渡るのは愚かな勇者か、自分以外の事を考えない狂人だ。
だがそれでも、そんな無謀さが戦局を左右し、勝利へと導く事は多々ある。今回のローガン選択も、そういった無謀さに類するものなのだろう。
それになにより、ローガンはこれ以上部下や同僚を失いたくないのだ。マシュはすでに彼のサーヴァント、部下なのだ。イラクで起きたあの出来事を、彼は決して忘れていない。二度とあの時のような事を繰り返さない――――ローガンはそう心に決めていた。
「……さあ海兵、嵐の中へ突っ込む用意はいいか？」
ローガンは自身に言い聞かせるように呟く。その表情は自分の愚かさを揶揄しているのか、少し笑っているように見えた。

Ｍｉｓｓｉｏｎ．１１『ＶＳ．サーヴァント』後編

盾と槍がぶつかり合い、双方の間から火花が散る。

「くっ……！」

サーヴァントが連続で繰り出してくる攻撃を、マシュは何とか受け止めている。だがサーヴァントの方が一枚上手であり、マシュはサーヴァントの勢いに押されて来ている。

このままではマシュは押し負けてしまう。だがマシュの武装は盾のみで、その盾も敵の攻撃を防ぐので精一杯だ。つまり現在の彼女には攻撃に使用できる武装の一切が手元に無い状態なのである。

マシュはこの状況を打開できる策を探るが、目の前のサーヴァントはそう言った隙を一瞬たりとも見せようとしない。それどころか逆にマシュが追い詰められている。戦闘経験はサーヴァントの方が圧倒的に上であり、戦闘に関しては素人となんら変わりないマシュには荷が重すぎる。

そして、打開策を模索していたマシュは、ほんの一瞬だけサーヴァントから意識を逸らしてしまう。

「――――そこ！」

連続で繰り出される攻撃に疲弊していたマシュが見せた一瞬の隙を、サーヴァントは見逃さなかった。サーヴァントはそう叫ぶと盾を槍で側面から殴る。ガキンという鈍い音とともに、マシュとサーヴァントを隔てていた盾は弾き飛ばされる。

マシュは体勢を立て直そうとするが時既に遅く、彼女の視界には槍を振り上げるサーヴァントの姿があった。

嬉しそうに顔を歪めたサーヴァントは、そのまま槍を振り下ろそうと腕に力を込める。

――――その瞬間、サーヴァントの後方から飛んで来た三発の銃弾が、彼女の右腕の肉を抉った。

「なっ――――⁉？」

サーヴァントは驚愕の表情で眼を見開き、肉を抉られた自身の右腕を見る。その驚きは自身への攻撃ではなく、その攻撃手段に向かられたものだった。

２００４年の冬木に召喚された彼女には、聖杯から銃という武器についての知識を与えられている。勿論、それが彼女らサーヴァントに傷一つ付ける事が出来ないという事も含めて。だが先程彼女を傷付けたのは、紛れもなく現代の銃弾だった。

サーヴァントは銃弾が飛んで来た自身の背後へと振り向く。彼女がそこで見たのは、銃を構えるデミ・サーヴァントのマスターの姿だった。

「いつから敵が一人だけだと思い込んでたんだ。クソ売女」

ローガンはそう毒突き、サーヴァントに照準を合わせる。

サーヴァントは驚愕の表情を浮かべているが、内心ではローガンも酷く驚いていた。

サーヴァントの情報に関して、ローガンはその道の専門家であるオルガマリーの言葉は基本的に信用している。だからサーヴァントに銃が効かないという話も９割方信用していた。

しかし、現実は違っていた。一か八か、囮になるつもりでローガンが放った銃弾は、確実にサーヴァントの右腕を抉っている。オルガマリーの話が間違っていたのか、それとも何か別の要因があるのか……ローガンは疑問が尽きなかった。

だが今はそんな事を思考している暇はローガンには無い。目の前には倒すべき敵がいて、自分はソレに銃口を向けている。ローガンは躊躇せずにＭ４Ａ１のトリガーを引いた。

しかしながら、彼女もサーヴァント。一度受けた攻撃を躱せないほど弱くはない。

彼女は素早く身体を屈め、銃弾を避ける。そのまま彼女は地面を強く蹴り、獲物を捉えた肉食獣の如き素早さでローガンの元へと駆け出した。

「チッ……！」

ローガンは急接近してくるサーヴァントに向けて連続で発砲する

が、全て避けられてしまう。
　そのままローガンの懐に入り込んだサーヴァントは、彼に向けて槍を突き上げる。ローガンは咄嗟に銃剣を振るい、双方の武器の刃から火花が散る。
　だがサーヴァントと生身の人間では身体能力の差は圧倒的で、サーヴァントの攻撃の勢いに押し負けたローガンは後方へと吹き飛ばされてしまった。
「ガァッ――――！」
　吹き飛ばされたローガンは地面に打ち付けられ、数回横転する。
　１５メートルほど吹き飛ばされた所でローガンはなんとか体勢を立て直すが、サーヴァントは既にローガンに槍を向けて歩いて来ていた。
「――――サーヴァントを傷付ける事の出来る銃を持っているとはいえ、所詮はただの人間。話になりませんね」
　サーヴァントは再び歪んだ笑みを浮かべ、ゆっくりとした歩調でローガンへと近づく。ローガンが与えた銃創の影響か、その右腕からは少なくない量の血が滴っている。
　ローガンは口の中に溜まった血を吐き出すと、セレクターをフルオートに切り替えたＭ４Ａ１を構え、サーヴァントに向けて発砲し始めた。
「無駄な事を……」
　サーヴァントはそう言って身体を捻る。ローガンは弾倉に残っていた８発の５．５６×４５ｍｍ弾を全弾撃ち込むが、右肩を掠った１発以外の全てを躱されてしまう。
　ローガンは小さく舌打ちをすると、Ｍ４Ａ１のマガジンリリースボタンを押し、空になった弾倉を銃本体から外す。
「幾ら撃っても無駄な事です。貴方のようなただの人間が、サーヴァントに勝てるとでも？」
　新しい弾倉を挿入し、ボルトリリースレバーを押して弾薬を装填し終えたローガンは銃口をサーヴァントに向けながら顔を上げる。すると彼は突然、フッとほくそ笑んだ。

目の前の男の余裕そうな様子に、サーヴァントは訝しげな表情でローガンを見た。
「なに、お前みたいな人外に勝てるなんて、はなっから思っちゃいないさ」
「では何故――――」
サーヴァントの言葉に、ローガンは先程よりも少しだけ口角を釣り上げる。
「……自分には到底太刀打ちできない相手が出て来たのならどうするか。
話は簡単、そいつには別の同族をぶつけてやればいいだけの話だ。戦車には戦車、戦闘機には戦闘機――――」
ローガン言葉を聞き、サーヴァントの脳裏には自身の背後にいるであろうあのデミ・サーヴァントの存在が咄嗟に浮かぶ。
「――――そしてサーヴァントにはサーヴァントって具合になぁ！」
ローガンがそう叫んだ直後、サーヴァントは背後から接近してくる何らかの気配を察知して振り向く。目の前の男に気を取られ、彼女は完全にその存在から気を逸らしてしまっていたのだ。
そして振り向いた彼女の視界の先にあったのは、自身に向けて突進してくるデミ・サーヴァントの盾だった。
「やぁあああ！」
マシュの叫びとともに盾はそのままサーヴァントに激突する。サーヴァントは即座に防御の体勢を取り、彼女の突進をなんとか食い止める。
サーヴァントがこちらから気を逸らしたのを確認したローガンは、彼女の背後から連続で発砲する。
「っ……！」
銃弾はサーヴァントの背中を貫き、エーテルで構成された肉体を引き裂く。それは多少なりとも効果があった模様で、サーヴァントは苦悶の声を上げて顔をしかめた。
しかし、サーヴァントは倒れる気配を見せない。胴体に4発、右腕に3発。並の人間なら致命傷どころか既に死んでいてもおかしくな

い数の銃弾を受けているのにも関わらずだ。
「成る程、これがサーヴァントとやらか……！」
サーヴァントの力を目の当たりにしたローガンは、思わず感心してしまう。
一方で銃弾を食らったサーヴァントは自身の周りを飛ぶ虫を鬱陶しがるような表情でローガンを見る。その一瞬の隙にマシュがサーヴァントに向けてタックルし、彼女の体は小さく宙を舞った。
「先輩！」
マシュがそう呼び掛けると、ローガンは彼女の元へ向けて全力で走り出す。吹き飛ばされていたサーヴァントも、猫のように軽やかに着地したと同時にローガンを追い始めた。
「ああクソッ！」
ローガンとサーヴァントの距離はすぐに縮まり始める。人間とサーヴァント、身体能力の差は歴然だった。
「これで……仕留めた！」
サーヴァントがそう叫び、彼女の槍がローガンの首を屠ろうとした瞬間に、彼と槍の間に巨大な盾が割り込んだ。
盾と槍が火花を散らしてぶつかり合う。間一髪の所でマシュがサーヴァントの槍を防いだのだ。
「……っ！　余計な邪魔を！」
「先輩に手出しは、させません！」
マシュは足を震わせながら声を張り上げる。だがその目には、確固たる意志が宿っていた。
一秒にも満たない睨み合いの後、サーヴァントは後方へと跳んでマシュと距離を取る。
「先輩、ご無事ですか⁉？」
マシュは不安げな様子でローガンの方を向いてそう呼び掛ける。その呼び掛けに、ローガンは無言で頷く。それを見たマシュはホッと表情を緩めた。
その様子を見たローガンも少しだけ口角を吊り上げるが、サーヴァントのいる方向を見るとすぐに表情を強張らせる。

「マシュ、12時の方向から敵接近！」
「……！　了解です！」
ローガンの警告でマシュが盾を構え直すと同時に、サーヴァントが再び二人に襲い掛かった。
ガンと鈍い音が響き、マシュの盾とサーヴァントの槍が火花を散らす。双方とも自身の獲物を激しく振るい、その度に激しい風圧が生み出された。
ローガンもマシュの背後でただ突っ立っている訳ではない。二人の攻防が膠着する毎に一瞬だけ生まれる隙を突いて、マシュの盾の上からサーヴァントに銃撃を加える。
しかし、銃による攻撃は既に警戒されているのか、サーヴァントは自身に向かってくる銃弾の大半を躱していた。命中弾もあるにはあるが、効果はほとんど無いと言っても過言ではなかった。
「クソ……このままじゃ埒が開かないどころか、下手したらジリ貧だぞ……！」
サーヴァントからの攻撃を盾で受け流しているマシュの背後で、ローガンは膠着している戦況に苦言を漏らす。
マシュには盾による相当の防御力があるが、武装がその盾だけということもあって火力不足だ。ローガンには銃があるが、並の人間の能力を遥かに凌駕するサーヴァント相手にははっきり言って効果は薄い。その上マシュもローガンも対サーヴァント戦はこれが初。火力も経験も敵サーヴァントの方が上だ。
「一体どうする……考えろ……考えろ……！」
ローガンはサーヴァントに発砲しながら、頭をフル回転させ、この状況の打開策を模索する。
何か、何か無いのか。奴にダメージを与えつつ、距離を取らせる事が出来るものは――――。
「――――そうか」
瞬間、ローガンはハッとした表情を浮かべた。そう、自分は何かを吹き飛ばすのに最適なモノを装備しているではないか。銃が効くなら、これも効くはずだ、と。

ローガンが策を思い付いたのも束の間、先程までのものより一回り大きい音が響く。マシュとサーヴァント、双方の力を込めた一撃がぶつかり合ったようだ。
先程の攻撃で隙が出来たのか、サーヴァントは後方へ跳躍し、マシュも数歩後ずさりする。ローガンはマシュと歩調を合わせながら、サーヴァントにＭ４Ａ１を構えて引き金を数回引く。
２０メートル後方に着地したサーヴァントは弾丸を全て避け、再び体勢を整えてローガン達の方へと跳んだ。
「やるなら今しか無いか……！」
ローガンは小声で呟きながらＭ４Ａ１を下ろし、ポーチからＭ６７破片手榴弾を取り出して安全クリップと安全ピンを引き抜く。
サーヴァントの跳躍の初速から、彼女がローガン達の元に到達するまでの所要時間は最大でも二秒ほど。
Ｍ６７は安全レバーを外してから約５秒後に爆発する手榴弾だ。今ローガンが安全レバーを外しても、爆発するのはサーヴァントが彼等の元に辿り着いてから約３秒後の話だ。
３秒。それは一聞すればとても短く感じるだろうが、戦場――それも状況が刻一刻と変わる最前線では、十分に長い時間だった。
これから迎える３秒という時間は、ローガン一人では決して乗り越えられないだろう。
だが、今のローガンは一人では無い。
何故なら、彼の傍らにはサーヴァント――それも防御に関しては十二分に信用していい存在が居るのだから。
「マシュ！　前に出て奴の攻撃から３秒だけ時間を稼いでくれ！」
「了解です！」
ローガンはＭ６７の安全レバーを外し、マシュに指示を出した。安全レバーが外れた事により、Ｍ６７内部の信管の導火線が発火し始める。
タイムリミットは５秒。それが過ぎれば、ローガンの右腕は跡形も無く吹き飛ぶだろう。
ああ、なんてクソみたいな状況だ。そうローガンは心の中で吐き捨

てるが、その表情は、微かに笑っていた。
――1秒。マシュがローガンの正面に出る。
――2秒。サーヴァントがマシュの盾に攻撃を開始する。
――3秒。サーヴァントに猛攻に、マシュはジリジリと後退していく。
――4秒。ローガンは自身のすぐ近くまで後退してきたマシュのその肩を支えるかのように手を置き、右腕を大きく振りかぶる。
――4秒50。ローガンはサーヴァントにM67を投擲する。
――そして5秒10。丁度サーヴァントとマシュの盾の中間に至ったM67の信管が作動した。
M67に内蔵されている6・5オンス（184グラム）のコンポジションB混合爆薬が爆発し、内部の硬質鉄線や外殻の破片を超音速で飛散させる。
それらの破片や爆風は、サーヴァントとローガン達に襲い掛かり、同時に三人を吹き飛ばした。
「「ッ――――！」」
ローガンはマシュ諸共に吹き飛ばされ、地面に倒れる。
更にその上からマシュとその盾が勢い良くのしかかり、その双方の――主に盾の――重量に、ローガンは少しだけ呻き声を上げる。
「――――！　先輩、大丈夫ですか⁉？」
自分がローガンをクッションにしていると気付いたマシュはすぐに彼の上から退き、片手を差し伸べる。
「……っああ。破片及び爆轟による外傷は無し。お前と盾の落下も影響無しだ。」
「そうですか……」
ローガンが無事だった事でマシュは安心したのか、ホッとした表情を浮かべる。
だがローガンはマシュではなく、2メートル先で倒れているサーヴァントを見ていた。マシュもそれに気付き、そちらを見る。
服装も肉体もボロボロになったサーヴァントは微動だにせず、槍も

彼女の手から離れ、転がっている。
それはまるで、時が止まっているかのように錯覚してしまう程だった。
「死んだ……のか？」
ローガンは真っ先にその疑問を口にする。
例えサーヴァントでも、至近距離で破片を受けたのだ。相当なダメージを食らったのは間違いない。
だがまだ仕留められたという確証も無い。
ローガンは生死を確認するため、動かないサーヴァントにＭ４Ａ１を向けて引き金を引こうとする。
――その瞬間、サーヴァントはゆらりと立ち上がった。
「な――――!?」
サーヴァントは既にボロボロだ。右腕は千切れ、腹部や脚は所々抉れて肉や臓物が見える。それでも、彼女は立っていた。
ローガンはすぐに引き金を引こうとしたが、サーヴァントの幽鬼の如き様子に一瞬だけ躊躇してしまう。
それがいけなかった。サーヴァントはゆらりと体を動かし、地面を蹴った。
彼女は凄まじい速度でローガン達の目の前に迫ると、マシュを片足で蹴り飛ばし、ローガンの首を左手で掴んで地面に叩きつける。
「ガッ――――！」
首を絞められ、ローガンは呼吸すらままならなくなる。サーヴァントは更に左腕に力を込め、ローガンの首からはミシミシと音が鳴り始めた。
ローガンはサーヴァントの顔に目を移し、その形相に戦慄する。
彼女の顔面の右半分は筋繊維が見えるほどに抉れており、頬は裂けて口腔内の様子が容易に観察出来る。しかしその眼から生気は失われておらず、寧ろ更に苛烈な色を浮かべている。
何とかしなければ、とローガンがＭ４Ａ１を手に取ろうとしたその時、突如としてサーヴァントの双眼が光を帯びる。
その瞬間、ローガンの身体は硬直した。

「――――――!?・?・」
突然の出来事にローガンは困惑する。幾ら動こうとしても、身体は文字通り指一本動く気配は無い。声も上げる事すら出来ず、辛うじて眼球を動かす事が出来るのみだ。
呼吸も心拍も、冬眠時の熊のように通常のそれよりも遥かに遅くなっている。
ローガンが硬直している間も、サーヴァントは腕の力を弱める事は無い。
「――――ァ――――ッ」
脳に血液が回らなくなる。呻き声を上げようとしても、舌も口も動こうとしない。出るのは空気が掠れる音のみだ。
「……最初からこうしておけば手っ取り早かったというのに、少し興に乗り過ぎましたね」
もがく事も出来ないまま苦しむローガンの様子を見つめながら、サーヴァントはニタリと笑みを浮かべて自嘲するようにそう呟く。
「ですがこれで終わりです。貴方を殺したら、次は貴方のサーヴァントを仕留めましょう」
サーヴァントはその蛇のような舌で舌舐めずりし、左腕にゆっくりと力を加え始めた。
薄れそうになる意識を保つために、ローガンは両手を握り締める。
「……ほざ、け」
「!」
突然、ポツリと零すようにローガンはそう呟いた。
サーヴァントは驚きのあまり腕の力を緩めてしまう。その混乱も当然のものだろう。自身の魔眼に魅入られ、全身麻痺しているはずの男が口を開き、更に声を発したのだから。
「簡単に、殺せると……思う、なよ……。
……海兵隊を……舐めるな……!」
早く殺さねば。サーヴァントはそう思い、更に腕に力を込めようとする。
その瞬間、身体に何かが当たる感触と共に、彼女の全身が硬直した。

「なっ――――!?」
何かが飛んで来たであろう方向にサーヴァントが目をやると、そこにはサーヴァントに人差し指を向けているオルガマリー　の姿があった。
「何やってるの！　動きは止めたんだから早く何とかなさい！」
オルガマリーはローガンに向けてそう叱咤する。それに応えるように、ローガンはオルガマリーの方向を向いて頷く。
先程より身体の自由が効くようになったのを感じたローガンはホルスターからＭ４５Ａ１を引き抜き、スライドを引く。そのまま彼は西部劇のガンマンのようにＭ４５Ａ１を腰の高さで構え、即座に全弾を発砲した。
秒速２７０メートルで発射された７発のホローポイント弾――――ハイドラ・ショックはサーヴァントの腹部に命中し、弾頭をマッシュルーム状に変化させながら彼女の体内を進む。
「――――ッ！」
・４５ＡＣＰ弾の中でもトップクラスのストッピングパワーを誇るハイドラ・ショックを至近距離で受けたサーヴァントは小さく仰け反り、ローガンの首から手を離す。
ローガンは落ちていたＭ４Ａ１を取り、ＯＫＣ―３Ｓを突き刺す。そして倒れたままサーヴァントを全力で蹴り飛ばし、起き上がって後退りしながらＭ４Ａ１を発砲した。
硬直が解けたサーヴァントは弾丸を受けながらも、傍に落ちていた彼女の槍を持ち、起き上がってローガンに飛び掛かろうとする。
「クソッ……！」
ローガンは無意味と分かりながらもＭ４Ａ１を盾にする。そして、サーヴァントの槍がローガンを屠ろうとした瞬間――――
「――――やぁぁぁっ！」
――――左側面から突っ込んできた巨大な盾が、彼女に激突した。
「マシュ！」
盾の主であるマシュは盾を大きく振り、サーヴァントを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたサーヴァントは大きく放物線を描きながら宙を飛び、そのまま落下した。
「先輩、ご無事ですか⁉？」
マシュはローガンの方を向いて、息を切らしながら必死な様子でそう尋ねる。
「俺は無事だ！　それより奴の状況を確認しろ！」
ローガンはそう叫んでサーヴァントが落下した方向を指差す。
そう、何より重要なのは敵の情報だ。情報が無ければ作戦を立てる事も、効率性を上げる事も出来ない。とにかくあのサーヴァントがどうなったかを知らねばならなかった。
「は、はいっ！」
ローガンの言葉にハッとしたという様子のマシュは、急いでサーヴァントのいる方向へと駆け出す。ローガンもそれに追随し、オルガマリーも取り残されまいと二人に着いて行った。

ローガンはマシュのすぐ後ろでＭ４Ａ１を構えながら、サーヴァントが落下した地点に小走りで接近する。数ｍほど進んだ所で、ようやくサーヴァントの姿が確認できた。
サーヴァントは瓦礫にもたれ掛かるように倒れており、動く気配を全く見せない。
まだ生きているのか、それとも今度こそ死亡しているのか。一目見ただけではローガンには判断出来なかった。
試しにと一発だけ撃ち込む。銃弾はサーヴァントの腹部に命中したが、サーヴァントはやはり微動だにしない。
やはり死亡しているのだろうか。
「――――ん？」
ふと、ローガンはサーヴァントの左手に目をやる。彼女の指先の輪郭から、黒い粒子の様なものが漏れ出ているのが見えた。
「これは――――」

「消滅しかけてるのよ」
後ろにいたオルガマリーがそう答える。
「消滅だって？」
ローガンは視線と銃口をサーヴァントに向けながら、オルガマリーの言葉に反応する。
「ええ。
サーヴァントには霊核というものがあって、それを魔力で出来た肉体で包む事によって成立している。
霊核はサーヴァントが現界し続けるために必要なの。だから肉体のダメージ等で霊核が消耗・損傷しすぎると、現世に居続ける事が出来なくなってしまうわ」
「なるほど……それは、つまり――――」
俺達は勝てたという事か。
そう口に出そうとした矢先、ローガンはサーヴァントの左手が黒い粒子に変わって行くのを見た。
「ッ⁉？」
そのまま両脚が、その次には大腿部が粒子と化す。
サーヴァントは徐々に全身が黒い粒子に変換されて行き、そして最後には、跡形も無く消え去ってしまう。
空中に浮かび上がった粒子もしばらく上昇を続けたが、塩が水に溶けるかのようにすぐ消滅した。
「勝った……らしいな」
ローガンは恐る恐る確認するように、そして確信するようにそう呟く。
すぐ側に居たマシュはその言葉を聞くと、倒れるようにその場にへたり込んでしまった。
「……勝てた……絶対ダメだと思ったのに、勝てた――――」
マシュはそう言って安堵のため息を吐く。
ローガンから見ても、やはり彼女は相当相当怖がっていた。戦闘中、彼女の脚はずっと震えていたのだから。
張り詰めていたものが緩み、それと一緒に身体の力が抜けたのだろ

う。あのような怪物を相手に戦ったのだから、無理もない。
その様子を見たローガンも、銃剣をＭ４Ａ１から取り外して鞘に戻す。
「……ああ、勝ったんだ。良くやったなマシュ」
ローガンは片方の口角を緩く吊り上げながら、マシュにそう声を掛けて手を差し伸べる。
マシュは嬉しそうな表情を浮かべ、静かにその手を取って起き上がる。
『……ゴメン、休んでる暇はないんだみんな』
突如として、ロマニから無線が入る。その無線越しの声は、ひどく深刻そうな様子だ。
『いまのはんのうとおなじものがそちらに向かっている。
……どうするべきか、言わなくてもわかるね？』
その言葉に、場の空気が凍結した。
今の反応と同じもの。それはつまり――――サーヴァントだ。
「え――――同じ反応って、そんな――――」
マシュは信じられないという様子だ。そしてその声には仄かな絶望の色が見える。
それもその筈だ。先程の怪物じみた――――怪物そのもののような女と同じような存在がもう一人、しかもこちらに向かって来ているのだから。
「――――クソッタレ、撤退だ！　とにかくここを急いで離脱するぞ！」
ローガンは即座にこの現実を受け入れ、皆に聞こえるように声を上げる。
「俺が先導する！　マシュは殿を頼むぞ！　所長は俺とマシュの間に入れ！
ロマン！　対象が接近する方位と距離、対象の速度は⁉？」
『あ、ああ！　方位は東１０５度、現在距離はおよそ２．５ｋｍ、現在平均速度は時速約６０ｋｍ／ｈだ！」
ローガンは二人に指示を出し、端末に怒鳴りつける。ロマニはその

気迫に少し驚くが、正確な情報をローガンに伝えて行く。
情報を得たローガンはそれらを頭に叩き込み、端末でマップを表示する。マップ上には赤いマーカーが青いマーカーに向けて接近しているのが表示されていた。赤がサーヴァント、青がローガン達なのだろう。
接触するまでの時間を最大限稼ぐには、対象が接近している方位とは逆方向に行くのが定石だ。
ローガンはマップでその方角の直線上を見る。その方角の先には前に彼等が通った鉄橋――――冬木大橋があった。
「……よし。目標は決まったな」
ローガンは小さく頷くとマップを閉じ、マシュ達の方を向く。
「これより我々は冬木大橋へと向かう！　橋に到着した場合、また途中で会敵した場合は、即座に敵と交戦状態に入る！
とにかく橋まで走るんだ、いいな⁉？」
「『は、はい！』」
ローガンの迫力のあまり、マシュとオルガマリー、ついでのロマニの三人は思わず畏まった返事をする。
「フォウ！」
フォウはローガンの足元まで近付くと、さっきの三人の真似をするかのように力強く鳴く。
「フォウ、お前はマシュと一緒に居ろよ」
ローガンはそう言いながら、フォウの頭をわしゃわしゃと撫で回す。
フォウは再び一鳴きすると、マシュの下まで駆けて行き、彼女の肩に乗った。
「……よし、準備はいいな⁉？」
ローガンはマシュとオルガマリーに最終確認を取る。二人と一匹は無言で頷いた。
「――――ＯＫ！　Ｇｏ！　Ｇｏ！　Ｇｏ！」
その言葉と共に、三人は一気に走り出す。
目指すは冬木大橋だ。